

第III部 考察

第1章 縄文時代後期の剥片生産について

松山 聰 [財]大阪文化財センター]

1. はじめに

小阪遺跡からは、比較的良好な状態で縄文時代後期の一群の石器が検出されている。出土状況、石器の概略に関しては本文に譲り、ここでは特に剥片に注目して話を進めることとする(Fig.471)。

一般に石器を対象として縄文時代を考えた場合、以下のような特徴を列記することができよう。

(プラス的特徴)

- ・切削用の利器に関してみれば石器が主役であり、相当量の資料が期待できる
- ・土器の編年研究が進んでおり、石器自体の編年が未整備でも時間的物差しとして共伴する土器を利用することで、時間的序列に則した変化を追うことが可能である

(マイナス的特徴)

- ・切削具の主役としては精緻な加工を施した定型的な器種のバラエティーにやや乏しい
- ・旧石器時代のような指標となる剥片生産技術に欠ける

今回の資料は縄文時代後期(北白川上層式)土器を共伴し、層理面からほぼ平面的に検出されているため、その一括性と所属時期に関しては一定の信頼性が与えられている。従ってここでは先に挙げたマイナス的特徴の中から、当該期の剥片生産という側面を、剥片に残された技術的な様相の抽出と記述から考えていきたい。

2. 多変量解析とその結果

はじめに剥片に残された技術的な様相を抽出する手掛かりとして、多変量解析の手法を用いてみるととすると。まず分析の流れを列記すると以下のようになる。

- ① 定量的データおよび定性的データの抽出
- ② 各属性間の相関関係の検討
- ③ 定量的データに基づいた多変量解析
- ④ 定性的データに基づいた多変量解析
- ⑤ 解析結果の記述と解釈

具体的には、②においては相関係数を算出し、③においては主成分分析、④においては数量化III類を用いることとする。

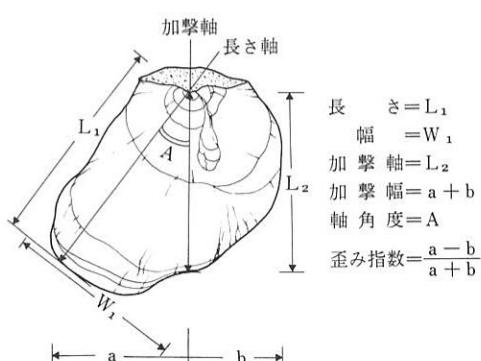


Fig.465 資料の計測基準

①-1 定量的データの抽出

それぞれの剥片はFig.465に示す基準に則って計測を行った。計測に関して若干の説明を加えると、「長さ」はみかけの最大長ではなく、打点とその遠位端を結ぶ線分の長さをあてた。「幅」は「長さ」に直交する方向での最大値を計測した。「加撃軸長」は、はじめに主要剥離面に残るリング、フィッシャーなどから加撃方向を推定し、それを基線として打点と剥片のエッジを結ぶ線分を計測し、「加撃軸幅」はそれに直交する方向での最大

2. 多変量解析とその結果

Tab.82 属性カテゴリー一覧

アイテム	No.	カテゴリー
打面	1	自然面
	2	剥離面(単数)
	3	剥離面(複数)
背面 剥離方向	4	自然面
	5	同方向剥離
	6	対向方向剥離
	7	直交方向剥離
	8	求心方向剥離
背面 剥離面数	9	0
	10	1
	11	2
	12	3
	13	4面以上

値を充てた。「軸角度」は「長さ」を計測した軸と加撃軸によってなす角度を計測した。「歪み指数」は「加撃軸幅」のうちの軸の左側の部分と右側の部分の比率をあてて指数化したもので、-1から+1までの値をとり、左に偏ると正、右に偏ると負の値をとる。このほか「面積」は主要剥離面をおおむね水平に置いた場合の投影面積を実測図より計測した。厚さに関しては、測定部位による偏りが大きいため、重量を面積で除した単位面積あたりの重量を「厚さ指数」として採用した。この値は素材の比重を考慮に入れると、平均厚に変換することができる(Tab.92)。

①-2 定性的データの抽出

剥片の打面の特徴、背面に残る剥離面の剥離方向、背面に残る主要な剥離面の数をアイテムとしてカテゴライズした(Tab.82)。そのほかに①-1で挙げた定量的データに基づいた主成分分析の結果の一部をカテゴライズしたものがあわせて分析を試行してみたが、傾向性をうまく把握することができなかつたため、カテゴリーは上で挙げたものに限定した。

Tab.83 相関関係と関連の程度

相関係数	関連の程度
(-0.7~-(-)1.0	かなり強い正の(負の)関連がある。
(-0.4~-(-)0.7	かなり正の(負の)関連がある。
(-0.2~-(-)0.4	やや正の(負の)関連がある。
0 ~ ± 0.2	ほとんど関連がない。

②各属性間の相関関係の検討

一般に相関係数の値は、その絶対値が大きいほど関連の強さは増すわけであるが、その程度を表示する場合には便宜的にTab.83のように表現される場合が多い。

ここで設定した定量的な属性間での相関係数はTab.84に示してあるとおりであり、結果はおおむね大き

さを規定する属性と形を規定する属性

に二分されそうであることが明らかになった。ただし、大きさを規定する諸属性の相関係数が非常に高い。面積はもともと長さと幅におおむね従属する変量であり、相関係数が大きいのは当然とも考えられ、また質量と体積が比例関係にあることを考慮に入れれば、質量もおおむねその他の計測値に従属

する変量とみなすことができるなど、属性の設定に重複する部分も存在するようであり、整理と再検討の必要性を指摘することもできる。

③定量的データに基づく多変量解析

Tab.84 定量的属性の相関係数

CORELATION TABLE

C.R	長さ	加撃軸長	幅	加撃軸幅	重量	投影面積	厚さ指数	軸角度	歪み
長さ	1.0000	0.9293	0.6348	0.4999	0.7284	0.8610	0.6288	-0.2620	0.1347
加撃軸長	0.9293	1.0000	0.5923	0.4105	0.6921	0.8161	0.5500	-0.3787	0.1877
幅	0.6348	0.5923	1.0000	0.9146	0.7505	0.8975	0.6339	-0.0101	0.0623
加撃軸幅	0.4999	0.4105	0.9146	1.0000	0.6166	0.8002	0.5000	0.2903	-0.0131
重量	0.7284	0.6921	0.7505	0.6166	1.0000	0.8676	0.9429	-0.1166	0.0101
投影面積	0.8610	0.8161	0.8975	0.8002	0.8676	1.0000	0.7311	-0.0851	0.0902
厚さ指数	0.6288	0.5500	0.6339	0.5000	0.9429	0.7311	1.0000	-0.0841	-0.0290
軸角度	-0.2620	-0.3787	-0.0101	0.2903	-0.1166	-0.0851	-0.0841	1.0000	-0.1627
歪み	0.1347	0.1877	0.0623	-0.0131	0.0101	0.0902	-0.0290	-0.1627	1.0000

Tab.85 因子負荷量と寄与率

FACTOR LOADING & EIGEN VECTOR LIST

Y	長さ	加撃軸長	幅	加撃軸幅	重量	投影面積	厚さ指数	軸角度	歪み	EIGEN V	キヨリツ(%)	Acc.(%)
Y1	0.8757	0.8327	0.8866	0.7633	0.9201	0.9816	0.8178	-0.1401	0.0960	5.3366	59.30	59.30
Y2	-0.2757	-0.4063	0.2480	0.5166	0.0347	0.0501	0.0588	0.8485	-0.4662	1.5140	16.82	76.12
Y3	0.0376	0.0276	-0.1527	-0.2418	0.1716	-0.0553	0.2495	-0.2658	-0.8409	0.9564	10.63	86.74
Y4	0.1627	0.2053	0.1570	0.2056	-0.3191	0.1045	-0.5021	-0.1194	-0.2569	0.5806	6.45	93.20
Y5	0.3102	0.2633	-0.2951	-0.1827	-0.0262	0.0179	-0.0283	0.4165	-0.0179	0.4617	5.13	98.33
Y6	-0.1776	0.1464	0.0149	-0.0439	0.0965	0.0283	-0.0707	0.0308	-0.0061	0.0712	0.79	99.12
Y7	-0.0107	0.0703	0.0989	-0.0323	-0.0832	-0.0933	0.0727	0.0230	-0.0034	0.0374	0.42	99.53
Y8	-0.0156	0.0523	-0.0809	0.1157	0.0041	-0.0749	0.0243	-0.0228	0.0026	0.0297	0.33	99.86
Y9	0.0347	-0.0120	0.0298	-0.0051	0.0628	-0.0672	-0.0418	0.0046	0.0006	0.0125	0.14	100.00

前項で挙げた属性をもとに主成分分析を行った。主成分分析は、多くの定量的な変量からなるデータ群を、個々のデータが有する総合的な特質になるべく損なわぬよう、主要な変動に縮約する統計学的な手法である。つまり、仮に対象とする資料に10箇所の計測点を設定したとすると、それぞれのデータは10次元空間に展開することとなる。これらのすべての数値のそれぞれの変化がデータの変動に反映されるわけであるが、一方人間が感覚的にトレースできるレベルには限界がある。従って、観察者は通常データの主要な特性に重みをつけて取捨選択を行うことによって分析を進めていかざるを得ない。これに対してこうした統計的手法は、属性の切り捨てではなくその総合化によってデータの変動を表すことを主眼としているということなのである。

それぞれの主成分は各属性の計測値の一次結合で求められるのであるが、その際に各属性に付される係数が因子負荷量と呼ばれ、この大小によって各主成分の性格が決定される。また各主成分が原データのどの程度の情報を保持しているかは寄与率によって示される。総合値は各データの主成分得点と呼ばれ、これらの分布を視覚的に検討していくのであるが、通常は3次元程度まで考えれば、原データの主要な変動の傾向をうかがうことができるようである。

この分析で得られた因子負荷量はTab.85に示したとおりである。また対象とするのは、累積寄与率が86.74%に達する第3主成分までとする。

各主成分の因子負荷量を検討すると、第1主成分においては軸角度と歪み指数を除く総ての係数が極めて大きな正の値をとっている。つまりここでは資料の大きさが大きければ大きいほど、その得点は大きくなるため、この主成分は総合的な「大きさ」の指標であると考えることができる。同様に第2主成分を考えると、これは長さの係数が負であるのに對して、幅の係数は正の値をとる。また軸角度も非常に大きな正の値をとる。これらを総合すると、資料が横長であればあるほど、その値が大きくなるため、これは総合的な「形」の指標であると考えができる。また、第3主成分は歪み係数のみがとびぬけて負の値を示すことから「歪み」の指標とみることができる。

各々の主成分得点の計算結果をもとに、横軸を第1主成分に、縦軸を第2主成分にプロットしたのがFig.466である。これを概観すると、今回の資料に関しては、まず「大きさ」でみると、大小

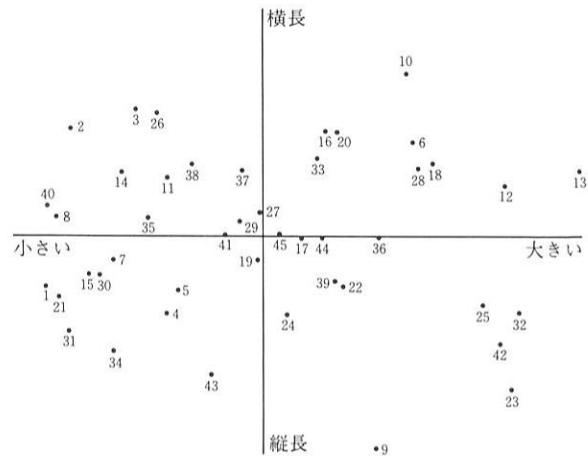


Fig.466 主成分得点散布図（その1）

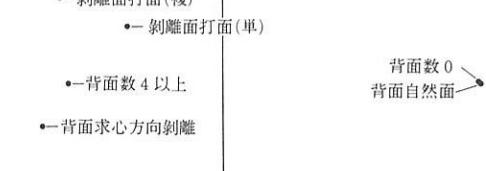


Fig.467 数量化III類 カテゴリー数量散布図

2. 多変量解析とその結果

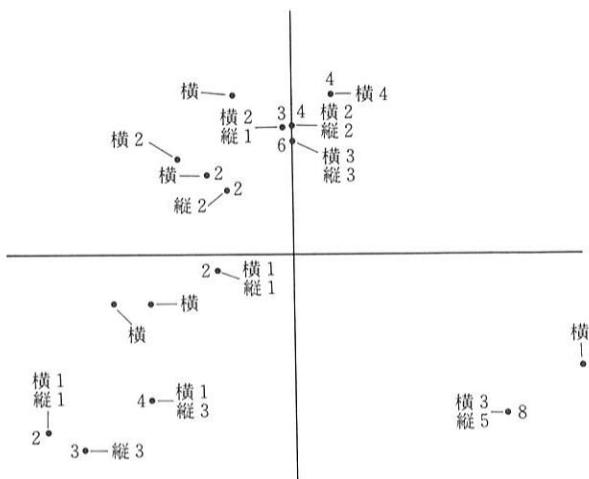


Fig.468 数量化III類 個体数量散布図

2群に分かれるようであり、「形態」の要素を加味すると全体に大きく3つの群に分かれるようである。これは以下のように類型化できる。

- 1類 比較的大きい横長剝片
- 2類 比較的大きい縦長剝片
- 3類 比較的小さく、形状の変化が連続的かつ変化量の少ない剝片

④定性的データに基づく多変量解析
数量化III類を用いて行った。この方法は名義尺度に従って分類されているデータがそれぞれのカテゴリー

にどの様に反応するかを数字の1と0を用いて一つの数値列として表し、その数値列に数学的な操作を加えて個体間の総合的な類似傾向、設定されたカテゴリーの反応のされたかの類似傾向を探ることを目的とする分析法である。前項で挙げた主成分分析とは使用するデータが定量的であるか定性的であるかの違いによって区別されるもので、その目的や結果の表現法などは類似している。

はじめにカテゴリー数量のI軸とII軸の計算結果をプロットしたものをFig.467に示す。それぞれのカテゴリーの中で反応のされ方の類似するカテゴリーほど近い数値が与えられている。結果を概観すると、おおむね以下に示す3類型を挙げることができる。

A類 打面は自然面・背面に残る剝離面数は比較的小ない（1～3面）・剝離の方向は単軸（同方向あるいは対向方向）あるいは直交

B類 打面は剝離面・背面に残る剝離面数が多い（4面以上）・剝離の方向は求心的

C類 背面は自然面・背面の剝離面数は0

この中で、C類は全く当然のことであるために見かけ上強い結びつきが認められるものである。属性の設定に問題があるとも考えられるが、後述するように主成分分析の成果とあわせて考えると一つの傾向性が認められるため、ここでは除外しない。次に個体数量のI軸とII軸の数値をプロットしたものを見ると、今までに示した特徴の他に、B類の一部がややA類方向に偏って分布する。

これらは剝離面を打面とする剝片であるが、剝離の方向がいずれも直交方向であることに起因する。打点が巡るという点ではB類と同様であり、B'類とする。

⑤解析結果の記述と解釈

主成分分析の結果と数量化III類の結果の対応関係を図示したものを見ると、1類はA類、C類と対応し、一部B'類とも対応するが、B類との対応は認められない。また2類はB類、C類と対応し、一部A類、B'類との対応が認められる。3類はA類、B類、B'類のいずれとも対応するが、C類との対応は認められな

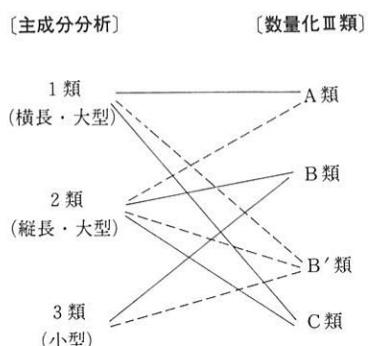


Fig.469 主成分得点散布図(その2)

こうした対応関係の違いは、先に主成分分析で設定した3つのクラスターの存在自体の妥当性を補強するとともに、それぞれが質的に若干異なる可能性を示唆するものとして考えることができよう。統計学的なアプローチからすると、言及できるのはここまでであり、それぞれのクラスターの位置づけなどは全く別の視点からの検討が必要になってくるのは言うまでもないが、分析成果を概観する限りにおいては

1類・2類 素材を意図するような目的的な剥片

3類 調整剥片などの非目的的な剥片

という性格が予想されるとともに、1類と2類の間には生産過程上の有意な差が存在することなども予想される。また、資料全体を概観すると自然面を打面とする剥片が非常に多く、丁寧な打面調整の意図や痕跡を認めるとはむずかしい。一方、単に数量的にみると3類に属する剥片の量はかなり多い(Fig.470)。従って仮に3類の剥片が、非目的なものと位置づけられるならば、ここには石器製作時あるいは使用時に副次的に生じた、いわば石屑が多数含まれていることが当然考えられ、これらの石器が採集された場所が石器製作跡に近接していることが暗示される。さらにこれらの石器は土器も共伴していることから、何らかの生活域が近隣に展開していた可能性にまで言及することもできよう。

第3主成分に関しては多くは触れられなかったが、各個体の主成分得点を概観するかぎりにおいては、個体の歪みは大きさや形状とは独立に展開するようであり、石材や技術的な面から不可避的なものようである。しかしこれを逆に考えると、例えば旧石器時代の石刃技法のように、高度に規格化された剥片を連続的に生産するということは、この歪みを最小限に抑える技術と知識を有していたということであり、その変遷を考える上で一つの興味深い指標となろう。

3. 仮説の検討

分析によっていくつかの方向性を指摘することができた。しかし分析の成果として提示できるのは、あくまで「設定された属性から統計学的にみた場合」という範囲での傾向性に限定される。従って次に、分析から得られた目的剥片・非目的剥片のイメージは実体を反映しているか、という問題を別の視点から検討してみたい。

まず、前項までの成果を仮説の形にまとめて提示することとする。

☆仮説1

- 比較的大きな横長剥片 └
- 比較的大きな縦長剥片 └ 目的的な剥片
- 比較的小さな剥片 ── 非目的的な剥片

☆仮説2

縦長剥片と横長剥片を意識的に作り分けている。

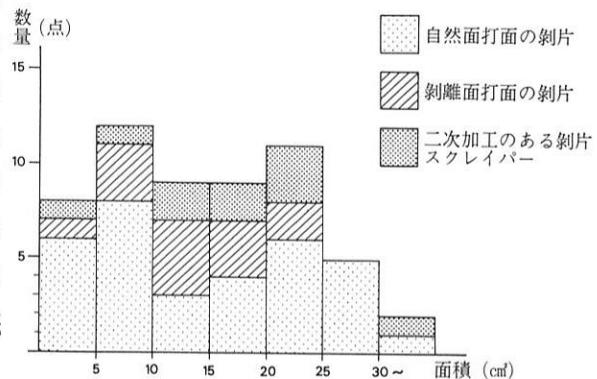


Fig. 470 遺物投影面積ヒストグラム

3. 仮説の検討

まず仮説1を二つの側面から検討してみたい。

・小さな剝片は非目的剝片か？

多変量解析の結果から見ると、大きさ、形状のまわり、打面構成などから、これらの剝片は一つのクラスターを形成するとみても差し支え無さそうである。これら的一群が目的的に剝離されたものであるためには、他のツールの素材になりえるか、あるいはそれ自体にツールとしての位置づけが与えられる必要があり、逆にこうした可能性が否定されることはその非目的性が明らかになることでもある。

この点から、まずこれらの剝片が他のツールの素材になり得るか否かを検討してみるとする。単純なイメージであるが、縄文時代のツールの中で相対的に一番小さいものをあげるとしたら、まず石鏃が考えられる。ここでは石鏃は未完成品も含めて6点出土しており、これらの石鏃をもとにして、最も効率よく作ったとして完成品よりもどの程度大きな素材剝片が必要になってくるかを考えてみると、極めておおまかにではあるが、以下のように試算できる。

1) 石鏃に接する大きさの三角形を描いてみると、6点の石鏃に接する三角形の面積はおおむね2cm²程度となる。

2) この三角形の三辺の外周にそれぞれ幅5mmの加工域を設定する。

これを最小値と考えると、完成品にくらべて3倍程度の面積の素材が必要になってくる。実際は素材の厚みや、剝離面の形状から考えて、もっと大きな素材が必要であろうが、必要最小限としてこの値に基づいて考えると、最低でもおよそ6cm²以上の素材が必要であるということになる。小さい一群と位置づけられた剝片の中で前記の面積に満たないものは10点あり、およそ半数に達する。この数値はあくまで最低限であるから、少なくとも半数以上のものは石鏃の素材にもなれないような小さな剝片と考えることができる。石鏃の素材にもなれないような小さな剝片がそのほかのツールの素材に一般的に利用されるとは考えがたいため、小さな剝片と位置づけられた剝片の大半は素材剝片とはなりえないという結論が得られる。

それではこれ自体のツールとしての利用の可能性を考えてみると、小さな一群の剝片には明瞭な二次加工や、エッジの部分に微小な剝離がほとんど認められないことは、大きな剝片の中での二次加工や微小剝離の出現頻度と比較しても全く様相が異なり、そのままツールとして利用する意図やその痕跡はほとんど認められない。

これらの点を考えると、こうした一群の小さな剝片は、バイ・プロダクトとしての非目的剝片の範疇に含めても差し支えないものと結論づけられる。若干の例外の存在も当然予想されるが、この資料の中での一般的な傾向としては大過ないものと考えられる。

・大きな剝片は目的剝片か？

剝片に二次加工を施すという作業は、明らかに利用の意図を反映するものである。従って、二次加工のある剝片は明らかに目的剝片であると考えられる。ただし、ここで言う目的剝片とは、それを生産する系統的な技術に裏打ちされたものであるかどうかは問わないこととし、結果的に「目的的なもの」として選択されたものであるということにのみ注目している点に留意していただきたい。

分析資料の中で二次加工のある剝片は10点出土している。その内の5点は今回の基準に照らしてみれば、横長の比較的大きな剝片を素材としており、その末端部に剝片の長軸方向に合わせて背腹両面から剝離を加えて刃部を作出している。1点は同様に横長剝片を素材としているが、打面部を除去する加工を行いそのままそこを刃部につくり出している。これらの素材となる剝片の諸属性と分析に供した剝片

のそれとの間には、大きな差はみられない。残り4点の内、2点はピエス・エスキューの破損品である可能性もある。従って明確に縦長剝片を素材とするものは2点だけであるが、そのうちの1点も現象的には大型の縦長剝片を素材としているが、接合状態で観察すると、剝片を剝離する段階では必ずしも縦長剝片を指向したのではなく、剝離の際に剝片の一部が折損したものに加工を加えているものであり、大勢としては、二次加工に供される剝片は比較的大きな横長剝片が中心となると考えられる。ただし、今回の資料にはみられなかったが、当遺跡の他の調査区のほぼ同時期の遺物包含層より縦長剝片素材の石匙なども出土しており、断定的に考えるのはやや危険である。

それでは次に今回分析された剝片が、剝片のままである理由を考えてみたい。便宜的に表面積が10cm²

以上のものを比較的大きな剝片と考えると、該当する横長剝

片は15点、縦長剝片は14点である(Tab.86)。横長剝片の場合、末端部(二次加工のある剝片では刃部が作出されることの多い部位)の形状に着目すると、折れ、スッテヌ、肥大など、エッジの形状が乱れ、障害になるであろうと思われる剝

片は15点中9点(60%)であり、残り6点(40%)はなぜ放棄するのか理解できなものである。しかし、エッジの状態を観察すると、そのうちの3点には連続する微小剝離が観察され、そのままの利用が推定される。従って、横長剝片に関してみれば全体の80%のものは剝片のままである理由を推定することができる。一方、比較的大きな縦長剝片の場合を考えてみると、素材の長軸である側縁に障害の認められるものは2点、末端に障害のあるものは1点、障害の認められないものは11点ある。障害の認められないもののうち、連続する微小剝離が認められるものは4点で、14点中7点(50%)のものは剝片のままである理由が推定される(Tab.87)。

以上にあげたような理由から、比較的大きな横長剝片は目的剝片であり、小さな剝片の大半は非目的剝片と位置づけることが可能であろう。ただし縦長剝片に関しては、横長剝片ほど明瞭にはその傾向をうかがうことができない点でやや問題が残るが、仮説1を棄却すべき、さほど大きな矛盾は認めがたい。

それでは、横長剝片と縦長剝片とでは、残された属性から質的な違いをみることができるか、という点から仮説の2を検討してみる。先の場合と同様の基準で比較的大きな剝片にのみ注目し、その打面構成を集計するとTab.86のようになり、打面形状の違いによる構成比には変化が見られない。しかし、大きさという要素を加えてみると様相は多少異なってくる。Tab.88は自然面を打面とする剝片を大きさ別に集計したものである。10cm²未満のものを小型、10cm²以上20cm²未満のものを中型、20cm²以上のものを大型と

Tab.86 剥片の形状と打面

	自然面	剝離面	
横長	10	5	15
縦長	9	5	14
	19	10	29

Tab.87 剥片の形状と縁辺部の状態

	障害(下)	障害(側)	微小剝離	その他	
横長	9	0	3	3	15
縦長	1	2	4	7	14
	10	2	7	10	29

Tab.88 剥片の形状と大きさ(自然面打面)

	大型	中型	小型	
横長	8	2	10	20
縦長	4	5	4	13
	12	7	14	33

Tab.89 剥片の形状と大きさ(剝離面打面)

	大型	中型	小型	
横長	0	5	2	7
縦長	3	3	1	7
	3	8	3	14

Tab.90 剥片の形状と背面の状態
(自然面打面)

	同軸(単)	同軸(複)	直交	求心	自然
横長	4	2	0	0	4
縦長	1	0	4	1	3

Tab.91 剥片の形状と背面の状態
(剝離面打面)

	同軸(単)	同軸(複)	直交	求心	自然
横長	3	0	0	1	1
縦長	0	0	5	0	0

4. まとめ

してみると、横長剝片は大型と小型が数量的に卓越しているが、縦長剝片はおおむね一定である。一方、剝離面を打面とする剝片を同様にみてみると(Tab.89)、横長剝片は中型が卓越しており、大型はみられず、小型は少ない。縦長剝片ではやや小型が少ないが、自然面を打面とする場合と同様にはほぼ一様に出現している。次に背面の構成をみると、数量化III類の項でも触れたように、横長剝片の背面には主要剝離面と同じか対向する方向の剝離面が残っていることが多いが、縦長剝片の背面には剝離の進行に伴って打点が石核の縁辺を巡るような剝離面が残されていることが多い(Tab.90,91)。従って両者の間には、剝片剝離工程で若干の質的な差を認めることが出来る。

4. まとめ

これまでに述べたことをまとめると以下のようになる。まず生産される目的的な剝片には横長と縦長がある。横長剝片は、トゥールの素材、あるいはテンポラリートゥールとして積極的に活用する意図をうかがうことができる。一方縦長剝片に関しては、横長剝片に比べてやや性格は不明瞭であるが、数量的な割合、剝片剝離工程での違いなどから考えて、単なるバイ・プロダクトとは考えにくい。縦長剝片自体を現象的にながめると、鋭利かつ滑らかに連続する刃部が得やすいようにも見受けられることから、そのまま切削具として利用されたり、旧石器時代の翼状剝片などに代表されるように、打点側からみた上面観が屈曲しやすい横長剝片より、精緻な加工を要するトゥールの素材として（従って素材の原形が残りにくい）利用された、などの性格を想像することもできるが、今回の分析資料からだけではこれ以上は言及できない。

2 系統の剝片が生産されるという技術に関してみれば、石核に対する加撃方向が固定的であるか、変動的であるかの違いはあるが、ここでは単にその違いが観察されたということが述べられただけであって、それぞれを排他的に記述できる背景も技術的な必然性も、そのほかのデータからは抽出することはできなかった。従って現在のところは、むしろこの違いは系統的なテクニックとしての差ではなく、スキルの差に帰着せざる方が妥当であると筆者は考えている。ただし、ここで若干注目しておきたいのは旧石器時代の西日本に特徴的にみられる、横長剝片の生産に際して高度にシステム化された剝片生産技術の存在である。瀬戸内技法の獲得によって規格性の高い剝片の量産に一時成功したわけであるが、その後時間の経過とともに、その技術は埋没してしまった。しかし、今回の資料を概観してみると、確かに洗練されたテクニックとしての横長剝片生産技術はその片鱗も認められないが、意識としての横長指向は、なお色濃く残っているように感じられる。従って、その背景には

- 瀬戸内技法以来の伝統的剝片剝離の残影(知識や意識の連續性)
- 横長に剝離しやすいという物理的・岩石構造的特性を技術の熟練の過程で習得したもの(知識や意識の不連続性)
- 分析結果の恣意的な解釈による事実誤認(もともと横長指向など存在しない)

のいずれが横たわっているのか、という問題に対する追求が必要になってくるのである。今回の少ない資料の中ではこれ以上のことは述べられないが、今後、より広範な検討が必要になってこよう。また、分析結果のクラスタリングに関するフィードバックの必要性を指摘することもできる。今回の主成分分析では大きく3つのクラスターを設定した。しかし散布図でみると中型でやや寸詰まりの一群の剝片を第4のクラスターとしてみることもできそうであるが、今回はそういうフィードバックの作業を行っていない。結論の精度を上げるためにには、属性の再検討なども含めた様々な試行が必要であろう。

最後になるが、今回の資料にみられる構造から出土地点の「場の機能」にも一部言及しておきたい。

周縁部の障害などから剝片剝離の段階で放棄された可能性を指摘できる剝片が比較的多数認められたことや、非目的的な剝片の中には、剝片剝離の際に同時に剝がれたものほかに、石器製作時や使用時に副次的に生じたものがかなり多数含まれていると考える方が自然であることなどは先に述べたとおりである。こうした状況と、ピエス・エスキューや二次加工のある剝片、微小剝離のある剝片の存在などをあわせて考えると、石器の製作と使用が時間的にも空間的にも近接していた蓋然性を指摘することができる。従って検出地点周辺における「場の機能」としては、単に石器製作を行っていたとしてとらえるよりも、木材加工などの作業に際して、それぞれの作業に適した石器を適宜作成していたとみる方が妥当であろうと考えている。この場合作業の目的は石器の製作ではなく、あくまで何らかの被加工物を加工することであるから、製作に時間がかかる定型的な優品がほとんど存在せず、単に機能部のみを作出した二次加工のある剝片や、微小剝離のある剝片が優越するという出土状況も合理的に説明できる。ただし今回は遺棄と廃棄の問題に関しては全く言及していない。仮にこれらの資料が一括して廃棄されたものであるならば、上記の「場の機能」は論拠を失うこととなる。また、石器そのものを対象とする「機能」へのアプローチも行っていないため、説得力に欠ける面もある。しかし、こうした問題点を含みながらも、当該期における利器としての石器の機能的なセット関係を考える上では、単なる剝片あるいは単なる二次加工のある剝片などの、いわばテンポラリートゥールというものの存在の比重を非常に大きくみていく必要があるのではないかと筆者は考えている。

Tab.92 属性一覧

長さ	加撃軸長	幅	加撃軸幅	定量的属性				定性的属性													
				重量	投影面積	厚さ指数	軸角度	打面			背面剝離方向				背面剝離面数						
								①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	
1	2.0	1.9	2.3	2.3	0.9	3.2	0.3	13	-0.02	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
2	2.2	1.8	2.3	3.8	2.6	5.3	0.5	78	0.6	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
3	2.9	2.7	3.0	4.1	7.1	8.0	0.9	68	-0.34	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
4	3.5	3.5	3.2	3.2	7.9	7.2	1.1	0	-0.1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
5	3.3	3.2	3.9	3.9	7.0	8.5	0.8	4	0.02	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
6	5.0	4.2	5.6	6.3	43.5	23.8	1.8	34	-0.34	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
7	3.2	2.6	2.8	3.2	4.0	5.6	0.7	20	-0.12	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
8	2.2	1.7	2.3	2.8	2.1	3.7	0.6	43	0.08	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
9	6.7	6.4	4.5	4.3	23.9	18.7	1.3	5	0.52	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
10	5.5	5.0	6.1	6.8	31.4	20.8	1.5	67	-0.52	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
11	3.5	2.4	3.3	4.3	9.2	9.0	1.0	46	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
12	5.8	5.6	7.2	8.2	38.5	28.9	1.3	29	0.26	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
13	5.7	5.3	6.5	6.4	87.5	27.1	3.2	32	0.04	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
14	3.1	1.9	2.8	4.3	5.2	7.1	0.7	41	-0.18	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
15	3.1	3.1	2.4	2.4	2.5	4.8	0.5	0	-0.42	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
16	4.7	4.5	4.9	6.6	18.5	20.2	0.9	49	-0.14	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
17	5.0	4.6	4.4	5.0	18.7	17.3	1.1	40	0.26	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
18	5.0	3.3	5.6	5.6	51.3	22.5	2.8	43	-0.18	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
19	5.3	4.2	3.5	3.9	18.3	13.7	1.3	19	-0.32	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
20	3.9	3.1	5.5	6.4	27.9	20.5	1.4	51	0.2	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
21	1.6	1.6	2.7	2.7	2.3	3.7	0.6	0	-0.02	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
22	5.9	4.2	4.3	4.7	30.4	15.9	1.9	20	0.24	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
23	9.7	9.4	4.7	4.3	38.3	30.0	1.3	12	0.08	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
24	5.6	5.0	4.2	4.2	14.3	16.2	0.9	13	0.14	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
25	6.7	6.7	5.8	5.8	43.8	27.7	1.6	0	0.02	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
26	3.3	2.0	3.4	4.4	9.0	8.1	1.1	60	-0.3	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
27	3.7	3.3	4.5	4.7	20.3	13.3	1.5	18	-0.24	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
28	5.4	3.8	5.9	6.4	41.0	22.9	1.8	24	-0.16	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
29	5.4	2.8	4.0	4.0	15.3	13.1	1.2	23	-0.42	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
30	2.7	2.5	2.8	3.1	2.9	4.4	0.7	20	0.08	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
31	2.5	2.2	2.3	2.2	2.5	4.3	0.6	13	0.24	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
32	6.7	6.6	5.3	5.2	65.3	25.5	2.6	5	0.12	1	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
33	5.3	3.6	4.5	5.3	26.8	16.8	1.6	38	-0.46	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
34	3.7	3.2	2.4	2.2	4.1	5.2	0.8	10	0.18	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	1
35	2.7	2.3	3.4	3.4	8.9	6.5	1.4	40	0.16	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
36	4.8	4.2	4.9	5.1	41.7	20.8	2.0	12	-0.12	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
37	4.8	2.5	3.8	5.8	13.0	13.3	1.0	47	0.02	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
38	3.6	3.2	3.5	4.8	9.5	9.8	1.0	44	-0.2	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
39	5.7	5.1	4.0	4.0	31.7	18.2	1.7	10	-0.34	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
40	1.8	1.6	2.3	2.6	2.5	3.6	0.7	44	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0
41	4.1	3.9	4.2	4.1	11.1	12.7	0.9	28	-0.08	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1
42	7.5	7.4	4.0	4.1	65.7	22.2	3.0	3	-0.2	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
43	4.7	4.6	3.4	3.4	8.3	10.0	0.8	1	0.26	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
44	4.0	3.8	5.6	5.8	21.6	17.8	1.2	11	0.14	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
45	3.9	3.7	5.8	5.9	10.6	13.9	0.8	12	-0.12	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1

※定性的属性のカテゴリーに関してはTab.82参照

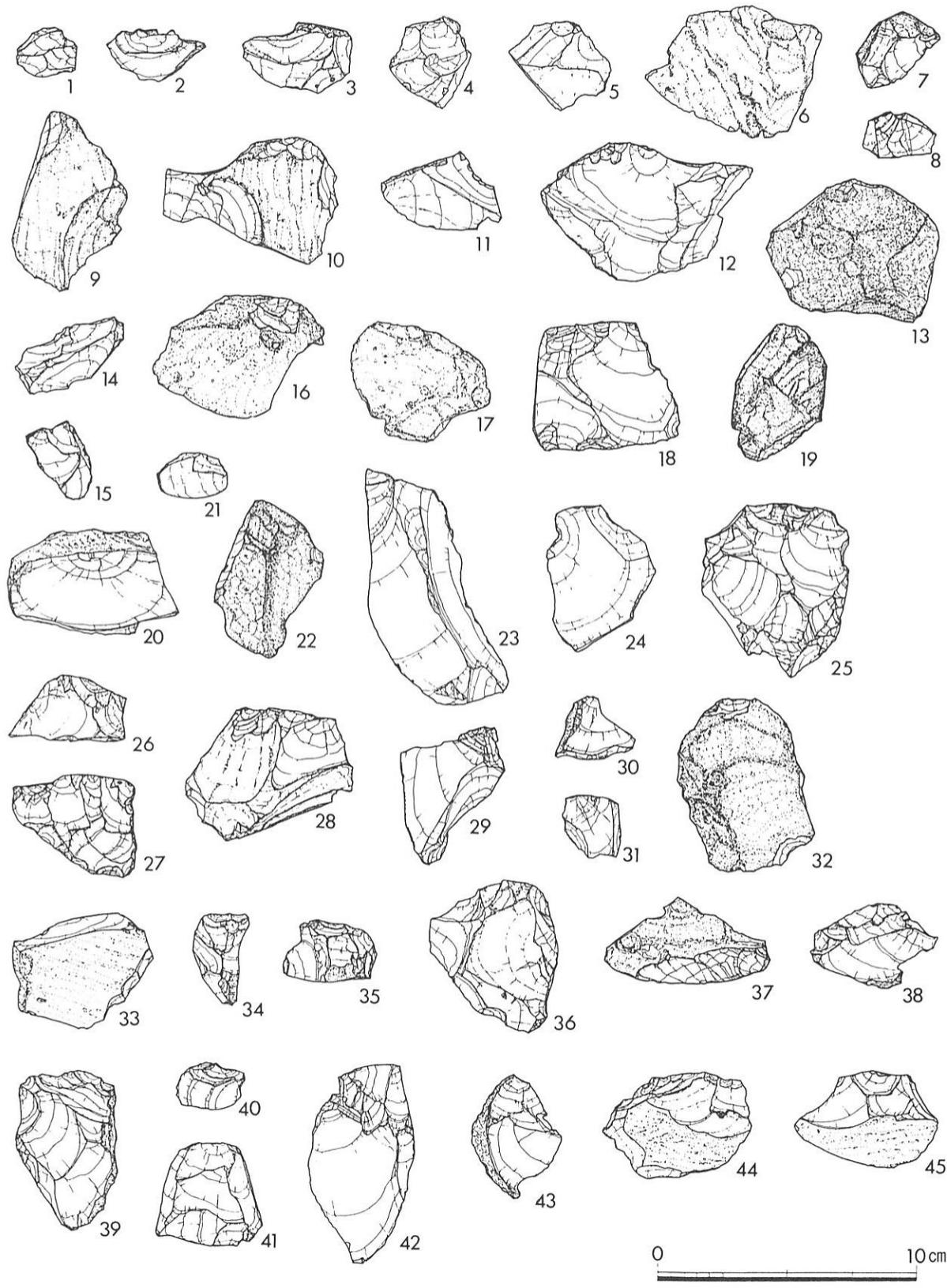


Fig. 471 出土剥片

第2章 北白川C式土器について

一小阪遺跡出土土器を中心として

合田幸美 [(財)大阪文化財センター]

1. はじめに

大阪府堺市小阪遺跡では、1985年から1990年の調査において縄文時代中期末から後期初頭の土器がまとまって出土した。小論ではこの土器群を整理し、これを他遺跡出土資料と比較、検討したうえで土器群の年代的、平面的な位置付けを考えてみたい。具体的な作業としては、まず小阪遺跡出土土器を含む当該年代土器の器種分類を行う。次に小阪遺跡出土資料の器種ごとの序列を組み、型式として把握した後、年代的な位置付けを考える。次に同年代に位置付けられる資料がまとめて出土する他遺跡の土器群を、器種構成を中心に概観する。この成果に基づいて器種の存否や多寡にあらわれる地域色を明らかにし、これら土器群のなかにおける小阪遺跡出土土器の位置付けについてみる。近畿地方における中期後葉の土器型式は北白川C式であり、小阪遺跡出土土器も大きくはこの範疇に含まれるものである。北白川C式は京都市北白川追分町遺跡出土土器をもとに設定された型式である（泉 1985）。近畿地方で中期後葉の土器を扱うにあたり、この北白川追分町出土土器は土器量と器種の豊富さにおいて他の資料を凌駕するものであり、現時点においては比較の基準とすべき資料である。今回小阪遺跡出土土器の型式分類や他遺跡出土資料との比較を行うにあたっては、この北白川追分町遺跡出土土器を基におこなわれた諸作業に依るところが大きい。次項では北白川C式が設定されるに至った経緯および近畿地方縄文時代中期後半の編年における北白川C式の位置付けを学史のなかで明らかにし、その後諸作業に移ることとする。

2. 北白川C式の位置付け

近畿地方の縄文時代中期後半の土器区分は、古段階として醍醐III式・星田式、新段階として番ノ面式・天理C式の二時期区分が過去に提唱されていた（岡田1965）。岡田氏の区分に従って各型式内容を概観してみる。醍醐III式は隆帯によって口縁部に文様を描き、胴部には縦位の磨消縄文を施すキャリパー形の深鉢が指標となるもので、近江の西部から山城の東部および大和での分布が顕著である。星田式（桜井1963）は、大阪府交野市星田遺跡出土土器が標識であり、キャリパー形の器形で口縁部に沈線文で弧状の短直線を描き、頸部に波状沈線文、胴部に平行する垂下沈線文間に縄文を施す土器が特徴である。山城から摂津、河内、和泉における出土例が多い。番ノ面式は醍醐式の影響のもと、太い沈線による文様を施文する土器が主体である。天理C式は布留遺跡出土土器（島田・小島1958）を指標とする、口縁部に横位縄文、胴部に縦位縄文を施す土器である。この中期後半の土器群のうち、新段階である番ノ面式・天理C式にほぼ並行する土器群として北白川追分町出土土器が捉えられていた。その後北白川追分町遺跡の調査成果が蓄積されるなかで（中村1974）、それまでまとまった資料のなかでなかった中期後半新段階の番ノ面・天理C式にかわる型式として北白川C式が設定されるに至った（泉 1982）。しかし、その後の北白川追分町遺跡の調査成果（中村1975）・（清水1984）・（泉・家根ほか1985）の整理、検討の

2. 北白川C式の位置付け

結果、同遺跡出土の土器の4期細分が可能となり「1・2期を醍醐III式、4期を北白川C式と呼ぶことを提唱したが、本資料（略）が一連の土器であることを認め（略）北白川で出土した中期の土器という意味」で北白川C式が再設定された（泉 1985）。すなわち、醍醐III式、星田式をも含む、近畿地方における里木II式以降の中期の土器として北白川C式が設定されたのである。以上のことから北白川C式土器が更に細分されることは明らかであり、近畿地方のなかでも特に河内については「星田—恩智—馬場川O=大官大寺下層SK370」とする土器の推移が指摘されている（宮野1983）。

北白川C式土器は前段階の土器と器種構成や文様構成が大きく異なり、東日本系、すなわち加曾利E式系の影響を多分に受けていることは明らかであるが、東海地方の型式や加曾利E式系の諸型式間の並行関係はどうであろうか。まず東海地方との対比をみると、船元IV式・里木II式と中富式・咲畠式がほぼ並行し、船元IV式と中富式は加曾利E I式と、里木II式と咲畠式は加曾利E II式と対応すると考えられている（泉 1985）。咲畠式につづく取組式は、加曾利E III式と酷似する（増子1981）ことから、北白川C式は、中津式と称名寺式が並行する型式とみれば、東海地方では取組式、島崎III式、山ノ神式と、関東地方では加曾利E III式、E IV式と並行することとなる。しかし、里木II式と北白川C式は継続するものではなく、東海地方の型式と比較した場合その間には幾つかの型式が設定されるべきであるとする見解が一方にあり、それによれば、北白川C式は取組式を含まず島崎III式、山ノ神式と並行する（増子1988）。また、北白川C式の成立については、北白川C式は加曾利E III式のとき、もっと具体的にいいうならば東京・埼玉第5段階と長野県の唐草文第4時期の一挙的流入によって成立したとする見解（泉 1985）と、東海地方の島崎III式・北陸西部の大杉谷式などの二次的な影響下において北白川C式は成立したとする見解（増子1988）がある。

以上北白川C式の年代的な位置付けについて学史を通して見直し、おおむね中期後葉に位置付けられることがわかった。なお、加曾利E式、曾利式の影響を強く受けた渦文系の土器群を指す様式名として「咲畠・醍醐式土器様式」が提唱され、北白川C式は、この第2様式b期以降に位置付けられている（泉 1988）。小論では、これらの成果に導かれつつ、北白川追分町遺跡出土土器である「北白川C式」を基準として同年代の資料を扱いたい。

Tab.93 各型式間の並行関係

近 畿	東 海	関 東
船 元 IV	中 富 I	曾 利 I
	中 富 II	
	中 富 III	
	中 富 IV	
里 木 II	咲 畠 (中 富 V)	曾 利 II
	(神 明)	曾 利 III
	(取 組)	
北 白 川 C		加 曾 利 E II
	島 崎 III	
	山 ノ 神	加 曾 利 E IV
中 津	林 ノ 峰	称 名 寺

3. 器種分類

小阪遺跡出土土器から得られた2、3の私見を加えながら、小阪遺跡出土土器を含む北白川C式土器の器種分類を示す。なお、報告文中では本土器群はIV群14~24類としたが、ここではより微視的に見、また、他遺跡出土資料との比較作業における利便上、北白川追分町遺跡報告書で用いられた分類名を使用する。

深鉢A類 口縁部文様帯をもち、水平口縁もしくは主文様部は波状文を呈する深鉢。口縁部と胴部とを区分する手法より6類に細別される。

深鉢A 1類 口縁部と胴部とを隆帯で区分する土器。隆帯を境とし、わずかに器壁が内折し、口縁部が立つ。

深鉢A 2類 A 1類と同様の器形をなすが、口縁部と胴部がより直線的につながる土器。隆帯で区画された口縁部は文様帯をもつものと、縄文主体のものがある。

深鉢A 3類 口縁部と胴部の境が「く」の字状に屈曲する土器。

深鉢A 4類 口縁部と胴部とを多重沈線による連弧文、波状文、短位直線文で区分する土器。星田式系＝胴部に垂下沈線を施さず縦位縄文が主体と、東海系＝胴部に垂下沈線を施すものの2つの系統がある。

深鉢A 5類 口縁部と胴部とが文様帯の相違だけで区分される土器。

深鉢A 6類 口縁部文様帯を消失した土器。

深鉢B類 口縁端部から一段下がったところに隆帯で橢円形区画文を横に連ねた文様を施す土器。胴部文様は垂下沈線文とその間の縦位縄文である。橢円形区画文のつなぎ部の違いから2つに区分できる。

深鉢B 1類 橢円形区画文のつなぎ部が橋状把手となる土器。

深鉢B 2類 橢円形区画文のつなぎ部が突起となる土器。

深鉢A C類 山形口縁と水平口縁が組み合わさった口縁部で、胴部がややくびれた器形をもつ土器。

深鉢C類 突起状山形口縁をもつ胴部がきつくくびれた深鉢。

深鉢C 0類 口縁部が筒状を呈する土器。

深鉢C 1類 口縁部文様が橢円形区画文を基調とした文様の土器。

深鉢C 2類 口縁部に1本の沈線文を施す土器。

深鉢C 3類 口縁部文様が省略された土器。

深鉢D類 縄文だけで器面を飾る土器。

深鉢D 1類 直口口縁ないしやや外反する口縁で不定方向の縄文を施す。

深鉢D 2類 口縁部に横位の、胴部に縦位の縄文を施す土器。口縁部と胴部の境に隆帯をめぐらすものと文様だけで区別するものがある。

深鉢E類 横描条線文だけで器面を飾る土器。

深鉢F類 無文の粗製土器で、a 粗いナデを施すものと、b 条痕を施すものがある。

浅鉢A類 「く」の字形に内折した口縁部の有文浅鉢。

浅鉢A 1類 多条の沈線文で口縁部文様を描く土器。主文様部に渦文や多重三角形文を配し、それを多重の橢円形区画文でつなぐことが多い。主文様部の口縁は波状を呈する。

浅鉢A 2類 つなぎ部の文様が1・2条の区画沈線文で、主文様部に渦文、つなぎ部に橢円形区画文を描く土器。

4. 各器種の分析

- 浅鉢 A 3 類 つなぎ部の文様に刺突文を用いる土器。
- 浅鉢 A 4 類 A 1～A 3 類に含まれない浅鉢 A 類。
- 浅鉢 B 類 口縁部が「く」の字形に内折した、無文で研磨の著しい土器。
- 浅鉢 B 1 類 口縁部の幅が広く口縁と屈曲部が肥厚する土器。
- 浅鉢 B 2 類 幅の狭い口縁部の上下が凸帯状に肥厚し、数カ所に橋状把手状の突起がつく。
- 浅鉢 C 類 外反する口縁の浅鉢で、口縁部内面に文様帶を有する土器。
- 浅鉢 C 1 類 内面に沈線文を施す土器。
- 浅鉢 C 2 類 肥厚した内面に縄文を施す土器。
- 浅鉢 C 3 類 内面肥厚帯が無文の土器。
- 浅鉢 D 類 無文の浅鉢で皿形を呈する土器。
- その他の器種 無文鉢など。

4. 各器種の分析

各器種の分析を試み、小阪遺跡出土土器の整理をする。器種毎に施文技法と文様意匠の二要素からなる「文様」によって、主にその省略化の方向性から器種内の序列を組み、器種間の「文様」の比較によって同時性を示す。こうして得られた小阪遺跡出土土器型式の年代的な位置付けをみることとする。

深鉢 A 1 類では、口縁部と胴部文様を区画する隆帯と口縁部文様が注目される。隆帯は(34)(44)の断面台形→(37)(38)の断面三角形→(45)のなだらかにつながるものへと、痕跡的に残る傾向がうかがわれる。口縁部文様は区画内に施される横位羽状沈線文が刺突文となり省略化される。また、区画内文様も沈線文が1条描かれるのみである。各要素の退行現象にともない、器壁が薄くなり器形がなだらかな曲線を示す傾向がうかがわれる。

深鉢 A 2 類は、口縁部が外反して開き、隆帯は痕跡的あるいは口縁部を肥厚させ隆帯に変えるものがみられる。口縁部文様は縄文のみであり、口縁部の幅が狭くなる。

深鉢 A 4 類は、口縁部文様が渦文と区画文が一連のもの(49)→渦文と区画文が独立したもの(54)→沈線文間充填縄文(55)といった省略化の傾向が追え、これとともに口縁部と胴部を区画する文様が連弧文(49)(54)→波状文(55)となり、後者はさらに横位短直線文(47)(48)(44)(45)へ省略化される。

深鉢 B 2 類は、口縁部から一段下がったところに施文される区画文内に刺突文を施すもの(73)(74)→無文のもの(72)(642)への文様退行現象が認められる。

深鉢 A C 類は完形もしくは大きな破片でなければ水平口縁と山形口縁が組み合わされる器形であることが確認できず、類例としては大阪府河内長野市三日市遺跡出土例を知るのみである。(75)は隆帯と隆帯下の沈線文より、口縁部と胴部内文様帶を区画する意図がうかがわれ、口縁部には区画文が、胴部には「J」字文が施文される。これに比べ三日市遺跡出土例は簡略化された文様が新しい要素を示す。

深鉢 C 類は分類の要素として大きく口縁部の形と口縁部文様の2つがあげられる。口縁部の形では、筒形口縁、断面台形になる口縁、波頂部をもつ口縁があり、口縁部文様では区画文、沈線文、無文がある。この2つの要素のうち退行現象が明らかなものは後者の口縁部文様である。先述した分類は目安となりやすい器形からC 0 類を別類とし、口縁部文様の退行現象より深鉢 C 1 (区画文)→C 2 (沈線文)→C 3 (無文) 類としたもので、2つの要素より分類している。C 0 類は口縁部文様が沈線文(77)→縄

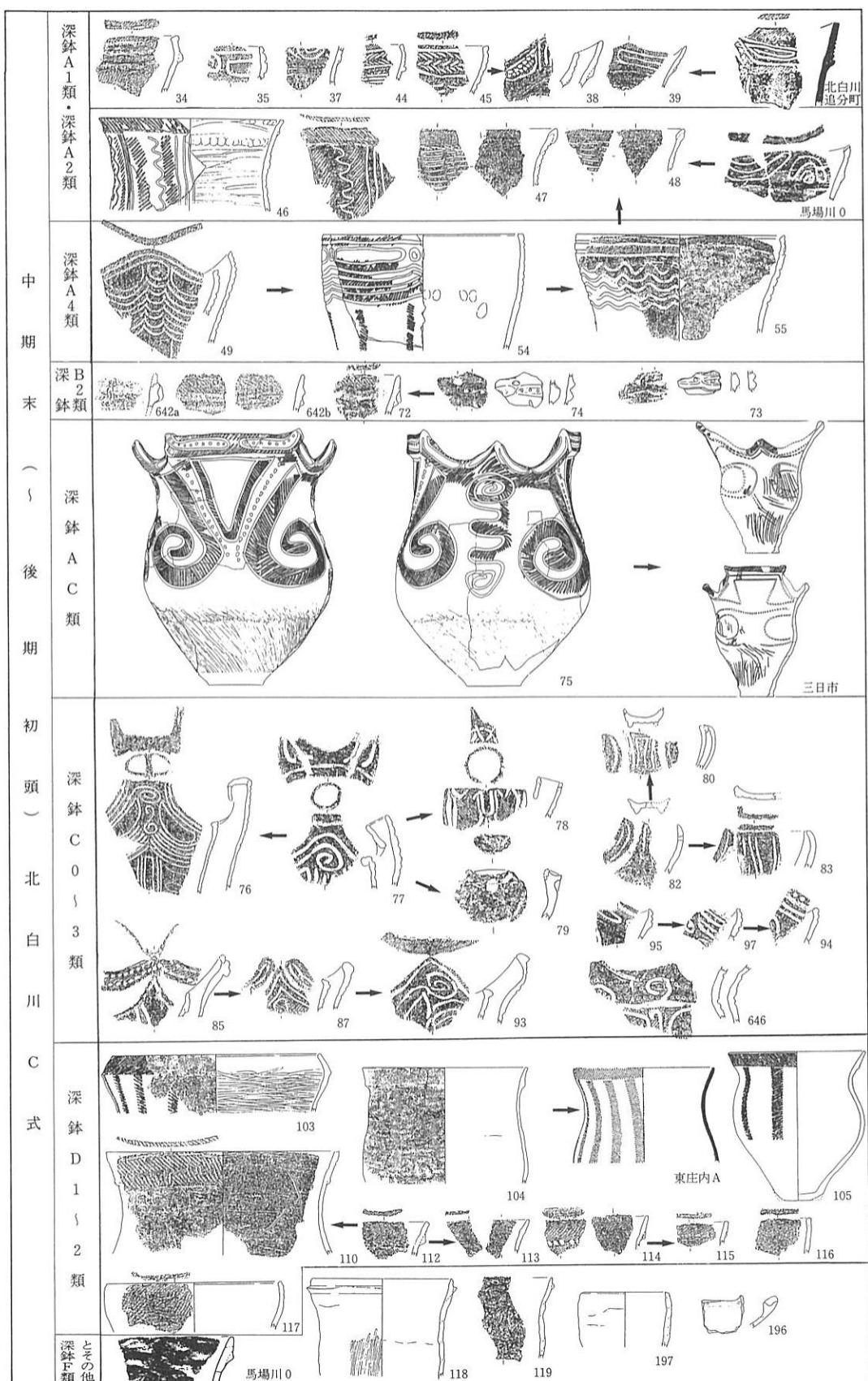


Fig.472 小阪遺跡出土北白川C式土器の各器種

5. 資料の整理

文のみ(76)となり、器形的には、筒形口縁がより突起する(78)ものと筒の上部がふさがり窪み状となる(79)の相反する2つのものがある。断面台形の口縁部では口縁部文様の後退(82)→(80)(83)と口縁部と胴部文様を区画する隆帯の退行(80・82)→(83)がうかがえる。波頂部をもつ口縁部では口縁部文様の退行(85・87)→(93)と隆帯の退行(85)→(93・87)がみられる。

深鉢D 2類では隆帯の退行がみられ、しっかりした断面三角形のもの(112・114)→痕跡的なもの(110・115)→口縁が肥厚するもの(113)の変化が想定できる。

小阪遺跡出土資料では以上の器種内に於ける序列がうかがえる。器種間に共通する点は、

- i. 器形はゆるやかにくびれたものが主体である。
- ii. 隆帯の様相が、深鉢A、C、D類において共通する。
- iii. 文様は沈線文による施文であり、隆帯による施文はみられない。
- iv. 口縁部文様の渦文、区画文の連続性や省略の仕方が共通する。

以上4点がみられ、主に河川出土の土器であるが、小阪遺跡出土北白川C式土器はほぼ同一型式内におさまるものと考える。ここで、器種構成をみた場合、深鉢A 1類5%、A 2類14%、A 4類14%、B 2類5%、A C類2%、C 0類5%、C 1～3類30%、D類24%、F類3%、浅鉢B 2類1%である。

深鉢C類、D類が多く、これにA 1類、A 2類がつづき、深鉢B類は少ない。

ここで先述した器種分類の全器種を網羅する北白川追分町遺跡出土土器における各器種内の序列を概観してみる。深鉢A類では渦文が区画文と一連の文様であったものが次第に区画文から切り離され独立した文様になる。また、渦文が省略され隆帯のみのものもある。A 4類は器形がきつくくびれたキャリパー形からゆるやかなくびれをもつ器形へと変化する。深鉢B類ではつなぎ部が橋状把手のB 1類から突起であるB 2類へと退行する。文様も、楕円形区画文があり「ハ」の字形羽状沈線文を充填するものから、楕円区画文が省略され充填される文様が沈線文のみや無文になったものへと変化する。深鉢C 1類は口縁部の文様が胴上部へと移行する現象がみられる。すなわち口縁部文様渦巻区画文から横「C」字文に変化し口縁部の文様が消失する一方で、渦文と区画文が胴上部に施されるようになる。浅鉢A類は主文様を隆帯で囲む土器から隆帯がない土器へ、そして口縁部の幅が狭くなる土器へと推移する。浅鉢B類は口縁部の幅が広いものから狭いものへと変化する。以上より器種をこえた文様で推移が迫るものには、隆帯区画文、羽状沈線文、橋状把手、多重区画文の4種があげられ、それぞれに概観したような退行現象がみられる。

北白川追分町遺跡報告では、このような器種をこえた文様の類似をもとに各器種の序列が組まれ、北白川C式1期～4期の型式変遷が示されている。小阪遺跡出土土器はこれとの比較では北白川C式4期に、咲畠・醍醐土器様式内では北白川C式3様式b段階に相当する。

5. 資料の整理

本項では、各地域のまとまった資料を中心に、器種分類→各器種内出の序列→文様からみた他器種間との共時性=型式の把握を念頭におき、器種構成を主に概観する。

大阪府馬場川遺跡O地点 深鉢A 2類と深鉢D 2類が多い。隆帯によって口縁部と胴部を区画するものの、口縁部文様帶が簡略化し縄文だけを施す土器が多く、深鉢A 2類とした土器も深鉢D 2類に口縁部文様あるいは胴部文様を施すものである。深鉢D 2類のなかで隆帯の押圧文もしくは刺突文を施す土器

が注目される。中津式土器が多く出土している。

大阪府恩智遺跡 深鉢D 2類のなかで口縁部が「く」の字状に内折する土器がある。深鉢B 1類が1点含まれる。北白川C式土器とともに中津式土器が多く出土し、双耳壺が含まれる。

大阪府森の宮遺跡 深鉢A 1類が多いが、文様はすべて沈線文で施文され隆帯を用いた文様はない。深鉢C類のなかで口縁部が断面橢円形の筒状の土器がある。また、中津式土器の範疇に含まれる土器と考えられるが、なだらかな波状口縁の区画文が施される土器で「J」字文磨消縄文の直前の段階の可能性をもつ土器がある。

大阪府野畠遺跡1次 北白川C式土器は深鉢A 1類が1点あるのみでその他すべて磨消縄文土器である。中津式土器のなかには、波頂部に円形の区画文を施す土器や平行沈線文と押圧文を施す土器があり、典型的な中津式土器の前段階の土器と理解できようか。

大阪府野畠遺跡2次 4層が中期末を中心とする北白川C式の包含層、5層が星田式単純層であり近畿地方における中期後葉の土器を考えるにあたっては好資料を提供する遺跡である。また、5層上面では土坑をはじめとする遺構が確認され、石斧を伴って完形に近い土器が出土しておりプライマリーな出土状況を示す。4層出土土器は深鉢A 4類とC類が多く、C類のなかには突起状の山形口縁で口縁部が連結し筒状になる土器が含まれる。浅鉢ではB 2類の橋状把手が幅広くしっかりと付けられた土器があり古相を示す。またヘナタリによる擬縄文を施す土器片が数点含まれており中津式の前段階からの存在が注目される。中津式的な土器では「J」字文の先端部を描く胴部片が1つあるが、櫛描状の沈線文で区画内が充填されている。

大阪府西浦橋遺跡 D 2類が多く、文様が簡略化された土器が多い。A 1類のなかに隆帯で区画した口縁部に同心円状に沈線文で文様を描く土器があり縁帶文土器と類似する。キャリバー形の口縁部が含まれるが咲畠式であろうか。

大阪府仏並遺跡 中期末葉の遺構が検出され、出土土器より393-OU→354-OD→405-OO→195・196・247-OOの変遷が考えられている（松尾1986）。393-OUの土器は報告書では写真のみであり詳細は不明であるが、胴部に連続する紡錘文を施す。354-OO出土土器は深鉢A 4類とD 2類が多く、粗製土器には縄文を施す土器と条痕調整の土器がある。縄文を施す土器は縄文が深いものと浅いものが交互にあらわれ、小阪遺跡の縄文と共通の特徴をもつ。405-OOも354-ODと同様の傾向があるが深鉢C類は含まれずA 2類が存在する。196-OO出土土器は沈線文主体である。247-OOは深鉢A 2類が多く、文様構成が京都府平遺跡出土土器と類似する土器がある。

奈良県大官大寺下層遺跡 文様を密に施す古相を示す土器から文様が簡略化した新相を示す土器が含まれる。櫛描状線文が施される深鉢E類が3個体あるが、これらは中津式に帰属する可能性を残す。中津式とした磨消縄文を施す土器は水平口縁であり、深鉢A 6類との差異は微妙なところである。

和歌山県市脇遺跡 中津I式古段階の土器が多く、型式学的に北白川C式から中津への変遷を考えるにあたっての好資料が含まれる。器種では鉢の存在が特筆される。深鉢D 2類のなかでは、口縁部が肥厚せず直口する口縁に横位縄文、胴部に縦位縄文を施す土器が多い。

和歌山県下尾井遺跡 中津I式古段階の土器が多く、双耳壺の把手部が2個体含まれる。深鉢A 2類、A 5類には区画文なしで口縁部に羽状沈線文が施される。

京都府北白川追分町遺跡昭和31年採集土器 深鉢A 1類、B 1類の区画内には羽状沈線文が描かれる。また深鉢A 4類の連弧文は押し引き沈線文を用いる。

5. 資料の整理

京都府北白川追分町遺跡 非常に器種が豊富であり、型式的にも継続性が認められる。器種構成のなかでは深鉢A 1類、A 6類、B 1類、B 2類、C 1類が量的に多くを占める。無文の壺が1点含まれる。

京都府北白川追分町B F 33区 S B 1・2 深鉢A 1類のなかではA 1類、A 4類が認められ、A 2類とA 3類は出土していない。深鉢B 1類とともに深鉢C 0類が出土する。

京都府北白川追分町B E 32・33区 深鉢A 5類、A 6類とB 2類、D 2類が多い。北白川追分町各地点出土土器中最も新しい様相を示す。

京都府柳谷口遺跡 深鉢A 3類が卓越する。また文様の細部では外面から施文した沈線文に対応するかたちで内面が膨らむもの、沈線文内に刺突文を施すものが特徴的である。

京都府裏陰遺跡 ほとんどの土器が中津I式古段階に比定され、ゆるく内弯する器形の鉢が含まれる。深鉢C類が多く、これをはじめとして深鉢A 1類などに柳谷口遺跡同様刺突文や沈線文内に刺突文が施される。また、胴部片には垂下沈線文と斜行沈線文を施す土器があり、北陸地方との関連が注目される。

滋賀県滋賀里遺跡 隆帶のしっかりした深鉢A 1類が一定量含まれる。深鉢A 5類、A 6類としたが「H」字形の磨消繩文を施す中津式に類似する土器もある。

滋賀県葛籠尾湖底遺跡 星田式のキャリパー形口縁をもつ深鉢A 4類が、波状口縁を呈するA 6類とともにある。双耳壺にプロポーションが似る注口土器が注目される。

滋賀県醍醐遺跡 隆帶で文様を描き、口縁部と胴部を区画する隆帶がしっかりした深鉢A 1類が多い。橋状把手のつく深鉢B 1類も含まれる。加曾利E式や曾利式の影響が強い土器である。

滋賀県番ノ面遺跡 隆帶による文様は無いが、加曾利E式や曾利式の影響が強くうかがわれる土器群である。

三重県東庄内B遺跡 深鉢B類とC類が多い。深鉢B類では、口縁端部からの無文帯が幅広い土器があり、胴部片に繩文を施さず垂下沈線文と斜行沈線文からなる土器とともに曾利式土器の影響が色濃くうかがえる。深鉢C類の文様は2系統ある。1つは渦文あるいはS字文の両脇に区画文を配し繩文を施す土器であり、北白川C式に多い。1つは沈線文のみで多重の渦文を密に施す土器である。後者は深鉢A 4類においてもみられる。

三重県東庄内A遺跡 中津式を多く含む土器群である。SK 6では深鉢D類、E類および壺が共に出土している。深鉢A 1、A 2、A 3、A 4類と深鉢B類は出土せず、器種構成における年代差を考えるうえで好資料である。

三重県地蔵僧遺跡 沈線文が主体の土器が多い。深鉢B 2類やA 5類のほかに、深鉢A 2類とA 4類が含まれることから、東庄内B→地蔵僧→東庄内Aの変遷が考えられる。

三重県起A遺跡 SK 15出土土器である。隆帶がなく内弯する口縁部をもち、連弧文で文様帯を区分する深鉢A 4類が非常に多い。胴部文様は垂下沈線文と斜行沈線文からなるものが多く、曾利式の影響が強く現れている。

愛知県石瀬貝塚 深鉢A 5類が多く、深鉢C類は含まれない。文様は沈線文、櫛描文を多用し、区画内の充填も同文様を用いる。胴部片には斜行沈線文を施すものがある。特異な土器では鉢形土器が1点ある。口縁部を逆「L」字状に屈曲、肥厚させ、作り出した面に刺突文を施すもので、小阪遺跡出土鉢形土器の比較資料となり得る。

岐阜県宮之脇遺跡 深鉢A 2類が多いが、隆帶を除けば文様は簡素であり、深鉢A 5類に類似する。櫛描文を多用し、胴部には櫛描文で斜行沈線文を施すものがある。深鉢D 2類は隆帶に刺突文を施し馬場

川遺跡〇地点出土土器と類似する。刺突文は深鉢C類の口縁部文様にも多用され注目される。

愛知県林ノ峰貝塚H層 深鉢A 5類が圧倒的に多く、口縁部と胴部の区画に隆帯を巡らせるものはわずかにあるものの、口縁部を肥厚させる土器は含まれない。文様は沈線文主体であり、胴部片には垂下沈線文間に斜行沈線文を施すものが多い。深鉢A 6類としたものは中津I式古段階の文様構成に似るもの、縄文地に沈線文を施したり区画文の内外に縄文を施文しており、磨消縄文には至らない。山ノ神式2期に並行か。

愛知県林ノ峰貝塚G層 北白川C式と中津式の割合が半々であり、同貝塚のE層出土土器が全て中津式であることから、前述のH層山ノ神式2期とE層中津式との中間に位置付けられる土器群である。本層の北白川C式土器群と中津式土器群を比較すると、器種構成ではA 5類としたゆるやかな波状口縁もしくは水平口縁の土器が共通し、文様は前者が沈線文主体であり後者は「J」字形の磨消縄文が施される。また前者には深鉢A 1類、A 2類やB類が含まれるが、後者には含まれず深鉢A 5類、A 6類が主体である。両者をつなぐ漸移的な土器は認められない。粗製土器は帰属が明らかではないが、H層にはみられなかった、縄文あるいは条痕により調整された土器が含まれる。

福井県右近次郎遺跡 第16~17群土器とされる中期末葉から後期初頭の土器群のなかで、星田式類似土器を含む北白川C式土器が4片認められる。同土器群は中津式もしくは称名寺式の古相を示す土器が多数を占め、双耳壺も含まれる。

兵庫県丁・柳ヶ瀬遺跡 深鉢A 4類が多い。口縁部と胴部を区画する文様として、波状文や連続しない多重弧文、また波状文の特異なパターンと理解される波状の連続文が使用される。深鉢A 3類も含まれ、「く」の字に内折した口縁部に2列に刺突文を施す。

兵庫県片吹遺跡S B07 深鉢A 5類、A 6類が多いが、口縁部片であり中津式である可能性が大きい。深鉢C類は文様がかなり簡略化され粗雑な施文である。

兵庫県片吹遺跡S B08 深鉢A 3類が多い。深鉢C類が認められないものの器種はバラエティーに富み、磨消縄文が含まれないことからS B07に比べ古相を示す土器群である。胴部文様では紡錘文が目立つ。

兵庫県篠原A遺跡住居跡 深鉢A 2類とした土器はほぼ口縁部のみの残存であり、口縁部を肥厚させ口唇部と隆帯に刺突文を施す無文の土器である。深鉢D 1類のうち1個体は口縁端部から1段下がったところに2列の刺突文を巡らせる。

岡山県日羽健行田遺跡 中津I式古段階と北白川C式土器が出土する。北白川C式土器は深鉢A 1類、A 2類とC類からなる。深鉢B類、D類は含まれず、また文様は沈線文が主体である。深鉢C 1類の土器は頂部に円形の区画をもち、中津式土器の文様構成の前段階にあたるものと考えられる。

岡山県里木貝塚 中津I式古段階にあたる。北白川C式土器はA 6類が多く文様は沈線文主体である。なかでも深鉢A 4類は波状文が胴部最大径付近に粗く施文され、最終段階にくだる可能性がある。胴部に紡錘文を施すものが多い。

広島県洗谷貝塚 中津I式古段階に比定できる土器が多い。北白川C式土器では深鉢A 6類、C 3類が多く、C 3類は中津式への文様の変遷を考えるにあたって重要な資料である。深鉢D 2類とした土器は口縁部が逆「L」字状に屈曲し、沈線文で区画した口縁部にRL縄文を施す土器であるが、近畿地方にみられる深鉢D類とは系譜が異なるかもしれない。文様は沈線文主体であり、粗製土器は条痕調整である。

香川県大浜遺跡 中津式および中津式の可能性をもつ深鉢A 6類が多いものの、深鉢A 1、A 2、C 1、C 3類が含まれる。深鉢C 1類は屈曲する口縁部に区画文を施し、山形口縁の波頂部の下に「J」字に

6. 器種構成と文様からみた地域差

近い意匠の区画文を描く土器であり、注目される。

鳥取県桂見遺跡 深鉢A 3類、C 3類が多い。深鉢C 3類は沈線文が主体であり、区画文を多用するものと渦文を多用するものがある。

6. 器種構成と文様からみた地域差

各地域の器種構成を年代幅を包括したうえで比較すると、器種の組み合わせとそれぞれの器種の量の多寡という2点によって地域差が存在するらしい。すなわち、愛知県、三重県を中心とする東海地方は、深鉢A類からF類まで存在し、A 5類が多くを占める。なかでもゆるやかな波状口縁をもち、胴部の屈曲が弱い土器が目立つ。京都府南部、大阪府、和歌山県、奈良県、滋賀県西部を含む近畿地方では、北白川追分町遺跡が量的にも、また器種のバラエティーにおいても他を凌駕する。全体的に器種が多くそろい、各遺跡において深鉢A 4類やC類がみられる。近畿地方のなでも微視的にみると、京都府南部と大阪府では、A 1、A 2、C類の比率が高いようである。また、D類についても大阪府小阪遺跡、馬場川遺跡〇地点、西浦橋遺跡、奈良県布留遺跡、和歌山県市脇遺跡、三重県東庄内A遺跡などで多く出土しており他地域では少ない。鳥取県、兵庫県北東部、京都府北部、福井県南部からなる山陰、丹後、若狭の日本海側から中国地方にかけては、深鉢A 3類、A 4類が主体であり深鉢B類の出土はみられない（玉田1985）。また粗製深鉢についてもD 1類が主体を占め、E類の櫛描文は含まれずF類の条痕文は稀である。岡山県、広島県、香川県を中心とする瀬戸内地方は船元、里木II式系の土器のもと里木III式が主体を占める地域であるが、北白川C式が客体的に存在する。北白川C式土器では、中津式に近い深鉢A 6類を除けば深鉢C類が多く、A 2類がこれにつづく。粗製土器はD類である。この器種構成は近畿地方に類似し両地域の関連が注目される。これに類似する状況が福井県北部においてもうかがえる。資料が右近次郎遺跡に限られるものの、中期後葉の大杉谷式の土器が主体を占めるなか、北白川C式土器が客体的に存在し、深鉢C類は含まれないが、深鉢A 4類が出土している。

文様においても、年代幅を包括したうえでの地域差がうかがえる。縄文土器の場合、文様は器形と密接に結びついており、先に検討した器種構成からみた地域差と重複する部分が多い。文様は施文技法と意匠の2要素からなり、ここでは主に沈線文と縄文の割合と文様意匠についてみていく。近畿地方では連弧文、波状文、多重の横位短直線文が器種をこえて多用される（深鉢A 1類、A 4類、C類）。また、隆帶を用いて文様を描く土器（深鉢A 1類、B類）や磨消縄文を用いる土器が多い。ここでいう磨消縄文は、深鉢A 5類、A 6類でみられるような比較的節の細かい縄文を用い、区画文の内（外）を丁寧に磨り消すものではなく、区画文の施文後中期末葉に普遍的な節の縄文をころがすものと、縄文地に区画文を施すものの2者である。两者とも縄文と区画文の境界において丁寧に磨り消すものは少なく、縄文がはみでた状態のものが多い。東海地方は沈線文を多用する点が特徴的である。文様では、口縁部に多重の渦文、胴部に縦位の斜行沈線文または逆「U」字状の垂下沈線文を多用し、曾利式の影響が窺える。また、粗製土器は櫛描文が主であるが、条痕文の土器も含まれ、近畿地方周辺の縄文主体の粗製土器と対照的である。山陰、丹後、若狭から中国地方および瀬戸内地方の土器文様は、東海地方には及ばないものの近畿地方に比べ沈線文のみで施文する土器が多い。また、この地域では、深鉢C類の頂部下に渦文、その両脇に区画文を配する土器が多い点、胴部文様が垂下沈線文が少なく紡錘文が多い点も共通する。特に鳥取県では、深鉢C類中C 1類が多いものの、胴部文様は簡略化しており、文様は新相を示す。

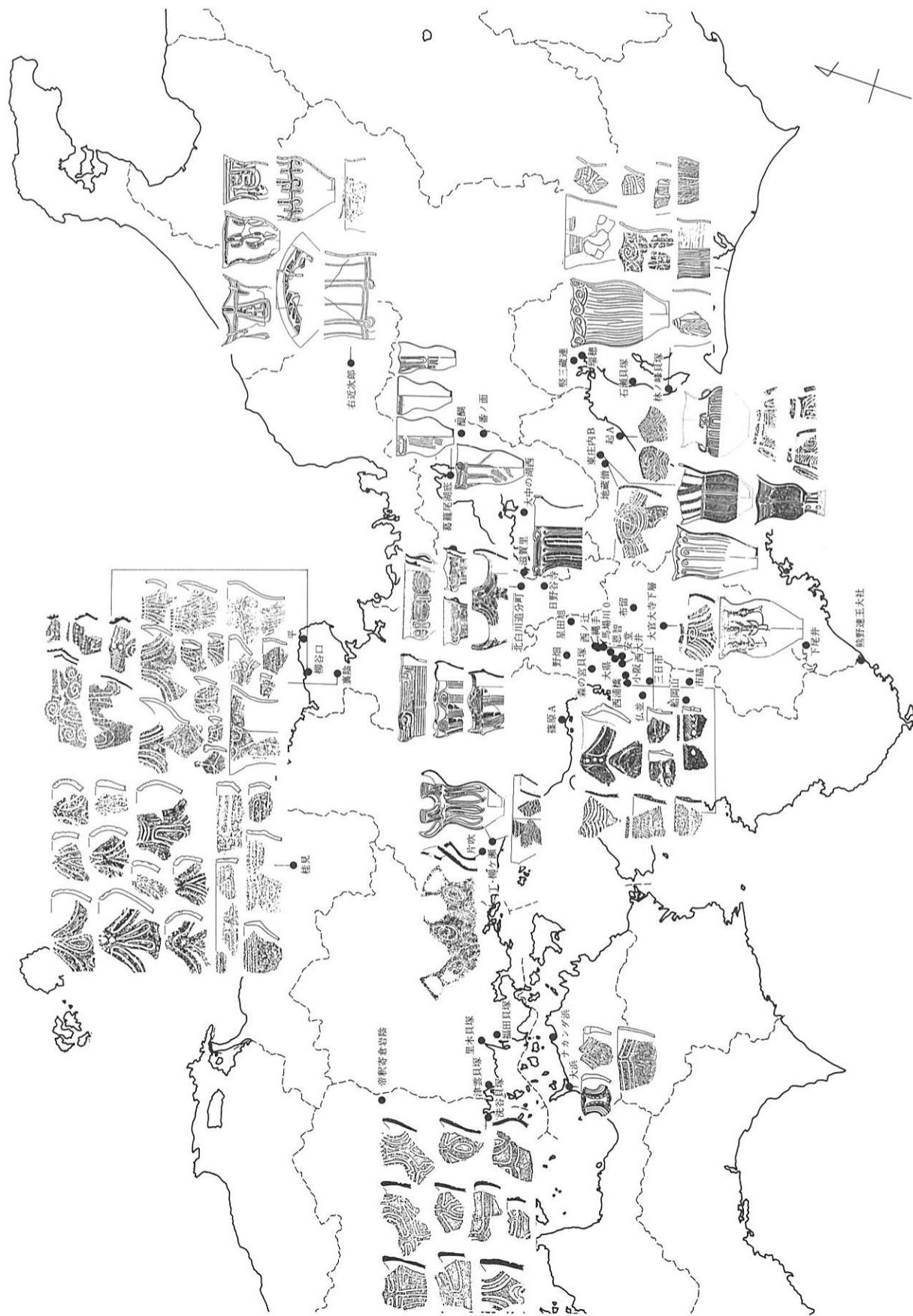


Fig.473 各遺跡出土の北白川C式土器

Tab.94 各遺跡における北白川C式土器の器種構成

遺跡名	深鉢												浅鉢												備考		
	A1	A2	A3	A4	A5	A6	B1	B2	C0	C1	C2	C3	D1	D2	E	F	A1	A2	A3	A4	B1	B2	C1	C2	C3	D	
小阪	3	9	9				3	3	14	5	1	2	14		2						1					北白川C66:中津10双耳壺ヘナタリ有	
1 馬場川O	3	6							2				10	1												北白川C31:中津23中津に鉢有	
2 恵智	1		1		1								2	2							1					北白川C13:中津10双耳壺有	
3 森の宮	6	1			1		1		2																	北白川C18:中津5里木田出土(1片)	
4 野畠1次	1																										北白川C1:中津28
5 野畠2次	3	1	17				3	2	2	7	2	2	2	2	1					1	4	2	1		4層中末5層星田中津?1		
6 西浦橋	3	1	1	1				1	1				8													北白川C21:中津7	
7 大県	1																										
8 安堂							1																				
9 三日市									1																		(75)に類似(完形)
10 西ノ辻			1	1																							ほぼ完形キャリバー形プロボーション星田式
11 仏並393OU																											胸部連続する紡錘文
11 仏並354OD	2		5	3	2				1				2	4	1						1						
11 仏並405OO	2		2										2														
11 仏並196OO				1	1																						B1は浅鉢B2の可能性有
11 仏並247OO	3		2										2														鉢形土器有
12 西大井			1																								プロボーション星田式
13 星田旭			1																								
14 繩手		3											1														平式に似た口縁部有沈線胸部山ノ神式と類似
15 大官大寺下層	3		5	1				1					3														北白川C14:中津3深鉢Eは中津に含まれるか?
16 布留																											
17 市脇	4	1		1									1	8													中津古北白川C15:中津32鉢有中津への変遷辿れる土器有
18 船岡山							1								1												鉢有充填櫛描有北白川C2:中津5
19 下尾井	1	1		5																							北白川C7:中津19双耳壺2
20 熊野速玉大社									1												1						磨消繩文浅鉢1
21 北白川追分町31年	4		3		1		1													2							
22 北白川追分町	33	9	4	9	11	19	20	16	21	7	8	13	6	2	4	12	9	7	5	2	6	1	4	3	2	壺1(無文)	
23 北白川追分町SB1.SB2	7		2		2	2											1			2							
24 北白川追分町BE32.33	4	10		2	2	5	6	9	4	3	2		3						4	1							
25 北白川小倉町	1																										波状D
25 北白川上終町	1																										プロボーションは古相
26 日野谷寺SK428	1	1			1																						北白川C3:中津3充填繩文?
27 柳谷口			5	1			1																				A3多:北白川C13
28 平			1							1																	胸部紡錘文(A3)
29 裹陰	2		3		4				3	2																	北白川C19:中津18中津1古鉢有
30 滋賀里	4	2	3	6	2	1	2	2					4													北白川C32(うち中津らしい土器5)	
31 葛籠尾湖底	2	1	2																								注入土器1
32 大中の湖西	1		1																								A5:紡錘文
33 酒醤	6	1		1	2	1			1																		
33 番の面	1				1					1																	
34 東庄内B			3	6		5	3	4	1				3						1	1						中津なし台付鉢有	
34 東庄内A				3			1						2	2	2											口唇部刻む浅鉢?有壺有北白川C33:中津18	
35 地蔵僧	1	2	2	1		1							1													全て北白川C	
36 起A	2	1	19					1	1	2																区画内の処理粗雑	
37 石瀬貝塚	1	2	1	7	1	1																				鉢形土器有	
38 宮之脇	1	6	1	1	1				3				3													Bに類似の土器有	
39 林ノ峰貝塚H層					11	2	1					1		2											全て北白川C(A5,A6多いが)H山ノ神2		
39 林ノ峰貝塚G層	1	17		9	9	1		2				3	3	1	1										北白川C60:中津61中津と共に		
40 積三歳通												1														深鉢C斜行沈線	
41 瑞穂			1																								
42 右近次郎16~17群	1		3																								中津称名寺多い双耳壺有
43丁・柳ヶ瀬A・B地区	1	2	2	5					1	2																D地区磨消繩文	
44 片吹SB07				3	9		1	1	1				6			1									壺双耳壺把手部分(?)有		
44 片吹SB08	1	4	1	3	2							1					2									SB07よりも古	
45 篠原A住居跡	3	1	2									2	2	2					1							壺有	
46 日羽建行田	1	1			1		1	1	2																	北白川C14:中津16中津1古	
47 里木	2		1	2	4									2												北白川C8:中津12中津1新	
48 福田	1	1																									波状文双耳壺有
49 津雲		2											2														北白川C6:中津20中津への文様変遷を考える際重要
50 洗谷貝塚	1				8				4	1									1							中津1式古北白川C12:中津44	
51 帝釈寄倉岩陰			1		3				1																	深鉢C沈線文	
52 大浜	2	2		1	11				1	2																北白川C26:中津8	
53 ナカンド浜	1	1			1				1																	A6はキャリバー形口縁	
54 桂見	1	1	12	1	1			3	1	7										1						北白川C36:中津11	

※ 小阪に関しては器種分類が確定できるもののみ記載

※ 1992年度出土資料は含まず

7. まとめ

以上、各地域の器種構成および文様を概観すると、近畿地方のなかでも京都府南部から滋賀県西端にかけての地域には深鉢A1類、B1類、C1類といった古相を示す土器が存在し、その周辺においてはA4、A5、A6、C2、C3類が多くみられる傾向がある。このことからやはり、北白川C式は加曾利E式の影響を近畿地方中心部が受容し、主導的な役割を果たしつつ周辺部へと波及していった（玉田1985）様相が想定できる。その波及の仕方をみていくならば、東海地方では、北白川C式の新しい段階の土器を受容しつつ、曾利系の影響のもと、ひとつの異なった土器様相をつくりだしたと言えよう。一方瀬戸内から山陰、丹後、若狭地方にかけての地域でもやはり新しい段階の北白川C式を受容し、特に日本海側では深鉢A3類や刺突文の多用、深鉢C類の比率の高さを特徴とする地域差を生みだす。この大きな2つの地域差の他にも、各地域において、それぞれ小さな地域差がうかがえる。

こうした北白川C式土器の波及のなかにおける、小阪遺跡出土土器群の位置付けについて触れておきたい。近畿地方においても、北河内や北摂では、滋賀県、京都府南部を経て流入したものと考えられる、星田式に代表される北白川C式土器のなかでも古い様相がみられる。一方、河内、和泉から紀伊、大和にかけては深鉢D類の存在に代表される器種構成などから、北白川C式土器は幾分遅れて受容されたものと考える。予察を述べるならば、星田遺跡と野畠遺跡第5層がいわゆる星田式で1段階設定でき、これに野畠遺跡第4層が続く。野畠遺跡第4層と小阪遺跡出土土器を比較すると、隆帶による文様の欠如などから小阪遺跡出土土器が新しく位置付けられ、少なくとも3段階の変遷は認められる。

以上より小阪遺跡出土土器は、加曾利E式の影響を強く受け滋賀県から京都府南部にかけての地域で成立した北白川C式土器が、日本海側、瀬戸内側、太平洋側へそれぞれの方向性をもって波及するなか、大阪湾沿岸沿いに摂津、河内、和泉へと南下するラインのなかで、幾段階かの変遷を経た北白川C式のなかでも末葉段階の土器群と考えられる。

最後に中津式への変遷について触れておく。北白川C式から中津式への文様変遷を考えるにあたっての好資料は、北白川追分町遺跡には希薄であり、広島県洗谷貝塚など比較的周辺部に多い傾向がある。これより、受容は1段階遅れるものの、受容後は各地域が主体的に北白川C式土器を消化していく可能性が考えられる。

実見した資料は限られたものであり、報告書においても全ての土器がとりあげられているとはいえないが、各遺跡出土土器の器種構成は確定的なものとはいえない。しかしながら、小阪遺跡出土土器の整理を端緒とし、現段階における資料のなかで北白川C式の成立と波及、およびそのなかにおける小阪遺跡出土土器の位置付けについての概括的なモデルを述べた。資料の蓄積に伴い再考していきたい。

引用・参考文献

- 泉 拓良 1982「西日本縄文土器再考—近畿地方縄文中期後半を中心に—」『考古学論考 小林行雄博士古希記念論文集』
- 泉 拓良 1985「北白川追分町遺跡出土の縄文土器 中期末縄文土器の分析」『京都大学埋蔵文化財調査報告3—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良・家根祥多ほか 1985『京都大学埋蔵文化財調査報告3—北白川追分町縄文遺跡の調査—』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 泉 拓良 1988「咲畠・醍醐式土器様式」『縄文土器大観』第3巻 中期II
- 岡田茂弘 1965「縄文文化の発展と地域性 7近畿」『日本の考古学』II縄文時代
- 桜井敬夫 1963「星田旭中期縄文遺跡」『交野町史』
- 島田暁・小島俊次 1958「布留遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報10』
- 清水芳裕 1984「京都大学北部構内B F 3 3区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 玉田芳英 1985「縄文時代中期末～後期初頭の土器について」『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書6』龍野市教育委員会

- 中村徹也 1974『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要 I』
 中村徹也 1975『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要 II』
 増子康真 1981『東海地方西部の縄文文化』『東海先史文化の諸段階（本文編）補足改訂版』
 増子康真 1988『近畿地方縄文中期後半土器編年の問題点－東海西部との対比から－』『巽三郎先生古稀記念論集求真能道』
 松尾信裕 1986『まとめ 仏並遺跡の縄文土器』『財大阪府埋蔵文化財協会報告第 5 輯 仏並遺跡発掘調査報告書』（財）大阪府埋蔵文化財協会
 宮野淳一 1983『河内における縄文後期文化の成立』『関西大学考古学研究室開設三十周年記念 考古学論叢』

資料文献（Tab. 94の番号を参照）

- 1 東大阪市教育委員会 1976『東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報16 馬場川遺跡発掘調査概要 IV』
- 2 瓜生堂遺跡調査会 1980『恩智遺跡 I』
- 3 難波宮址顕彰会 1978『森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告』
- 4 豊中市教育委員会 1981『野畠遺跡第1次発掘調査報告』
- 5 野畠遺跡発掘調査団 1986『野畠遺跡第2次発掘調査概報』に資料の一部が掲載されている。その他の資料については豊中市教育委員会 柳本照男氏、橋本正幸氏、酒井泰子氏（現大阪府教育委員会）、清水京子氏のご好意により資料を見せて頂いた。
- 6 財大阪文化財センター 1984『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 II』
- 7 柏原市教育委員会 1984『柏原市文化財報告1983～IV 柏原市所在遺跡発掘調査概報一大県・田辺・本郷遺跡－1983年度』
- 8 柏原市教育委員会 1987『柏原市文化財概報1986～VIII 安堂遺跡 1986年度』
- 9 三日市遺跡調査会 1988『大阪府河内長野市 三日市遺跡調査報告書 I』
- 10 大阪府教育委員会 1986『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査概要III－東大阪市東石切町・西石切町所在－』
- 11 財大阪府文化財協会 1986『財大阪府埋蔵文化財協会報告第5輯 仏並遺跡発掘調査報告書』
- 12 大阪府教育委員会 宮野淳一氏に教えて頂いた。
- 13 桜井敬夫 1963『星田旭中期縄文遺跡』『交野町史』
片山長三編 1970『交野町史 改訂増補 1』
- 枚方市史編纂委員会 1976『枚方市史』第1巻
- 14 縄手遺跡調査会 1971『縄手遺跡』
- 奈良国立文化財研究所 1987『飛鳥・藤原宮発掘調査概報 8』
- 16 港北ニュータウン埋文調査団 1985『称名寺土器に関する交流研究会資料集』
- 橋本市教育委員会 1984『市脇遺跡ほか発掘調査概報』
- 和歌山県教育委員会 1983『伊都郡かつらぎ町船岡山遺跡発掘調査概要 IV』
- 小野山節・清水芳裕編 1979『和歌山県北山村下尾井遺跡』
- 20 松崎寿和・間壁忠彦 1978『縄文後期文化 西日本』『新版考古学講座』3先史文化
- 21 泉 拓良 1985『北白川追分町遺跡出土の縄文土器 中期末縄文土器の分析』『京都大学埋蔵文化財調査報告3－北白川追分町縄文遺跡の調査－』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 22 京都大学埋蔵文化財研究センター 1985『京都大学埋蔵文化財調査報告3－北白川追分町縄文遺跡の調査－』
- 23 清水芳裕 1984『京都大学北部構内B.F.3.3区の発掘調査』『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』京都大学埋蔵文化財研究センター
- 24 中村徹也 1974『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要 I』
中村徹也 1975『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要 II』
- 25 梅原末治 1935『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告16 京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告』
- 26 16に同じ
- 27 玉田芳英 1985『縄文時代中期末～後期初頭の土器について』『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書 6』龍野市教育委員会
- 28 帝塚山大学考古学研究室 1966『京都府丹後町平遺跡調査概要』
- 29 大宮町教育委員会 1979『大宮町文化財調査報告第1冊 裏陰遺跡発掘調査概報』
- 30 湖西線関係遺跡発掘調査団 1973『湖西線関係遺跡調査報告書』
- 31 小江慶雄 1966『琵琶湖の湖底遺跡』『京都教育大学紀要』30
- 32 滋賀県立近江風土記の丘資料館 1984『近江の縄文時代』
- 33 京都教育大学考古学研究会 1989『考古学資料室所蔵の縄文時代遺物資料紹介』『史想』
- 34 小玉道明 1970『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』
- 35 亀山市教育委員会 1978『亀山市埋蔵文化財調査報告 I 地蔵僧遺跡発掘調査報告』
- 36 田村陽一 1990『鈴鹿市起A遺跡出土の縄文中期末葉の土器』『Mie history』2
- 37 16に同じ
- 38 16に同じ
- 39 山下勝年 1975『愛知県南知多町内海林ノ峰貝塚試掘概報』『古代学研究』77
- 40 名古屋市教育委員会 1989『名古屋市中区栄一丁目 竪三歳通遺跡 第8次・第9次調査の概要』
- 41 名古屋市見晴台考古資料館 1987『瑞穂遺跡 第4次調査の概要』
- 42 大野市教育委員会 1985『大野市文化財調査報告書第3冊 右近次郎遺跡 II』
- 43 兵庫県教育委員会 1985『兵庫県文化財調査報告書第30冊 丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書』
- 44 龍野市教育委員会 1985『片吹遺跡 龍野市文化財調査報告書 6』
- 45 古代學協會 1984『神戸市灘区篠原 A 遺跡』
- 46 倉敷考古館 1967『岡山県昭和町日羽ケンギョウ田（健行田）遺跡』『倉敷考古館研究集報』11
- 47 倉敷考古館 1971『里木貝塚』『倉敷考古館研究集報』7
- 48 奈良国立文化財研究所 1989『奈良国立文化財研究所史料第32冊 福田貝塚資料 山内清男考古資料 2』
- 49 島田貞彦・清野謙次・梅原末治 1920『備中国浅口郡大島村津雲貝塚発掘』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』5
- 50 小都 隆 1976『洗谷貝塚』
- 51 帝釈峠遺跡群発掘調査団 1964『帝釈峠遺跡群の調査研究』『広島考古研究』3
帝釈峠遺跡群発掘調査団 1965『帝釈峠遺跡群の調査研究 II』『広島考古研究』4
- 52 16に同じ
- 53 瀬戸内海歴史民俗資料館 1978『考古資料収蔵目録 I 縄文時代編・図版解説付』
- 54 鳥取市教育委員会 1978『鳥取市文化財報告書 V 桂見遺跡発掘調査報告』

第3章 西日本出土の浮線紋土器

三好 孝一 [(財)大阪文化財センター]

1. はじめに

縄紋時代晩期後半、近畿地方で設定された船橋・長原式土器に代表される凸帯紋系土器が汎西日本的に分布する時期から弥生時代前期にかけて、極めて稀ではあるが、中部・関東地方に発達した浮線網状紋（以下、浮線紋と呼称する）とされる紋様を施した土器が西日本でも出土することが確認されている。

畿内地域に弥生時代前期の土器様式が定着する時期、この地域以東にも遠賀川系土器が急速に浸透することが明らかにされている。また、これ以降の西日本では、各地方における地域色の萌芽が認められる弥生時代前期新段階を迎える前に浮線紋土器もその隆盛を過ぎることから、浮線紋土器の西方流入という事象は極めて一過的なものと考えられる。それゆえに、浮線紋土器を詳細に観察することにより、その細分を縦軸（時間）、地域的分布を横軸（併行関係）として捉えることが、各地域でこの時期分布する土器型式の併行関係を把握することに対し、有効な手段と捉えることができると考えた。

今回の小阪遺跡の発掘調査においても弥生時代前期の土器などと共に2点が出土し、新たな資料が加わったことを契機として、以下に先学の研究成果をふまえ、類例を含めた形での時期的、また、併行関係についての検討を行うこととした。

なお、浮線紋土器の細分、分布地域の把握に関しては、近畿地方以西ではまとまった資料に乏しく、各地域に分布する土器型式に対し従属的出土状態を示している。それゆえ、新たに分類する術がないため、ここでは、中部地方を中心に東海、近畿以西の資料を器形、紋様から分析し、編年的位置づけを行った石川日出志氏の論考（石川1985a）、関東地方を中心に、中部地方におよぶ紋様を分析し、各地方の併行関係を追求した田部井 功氏の研究成果（田部井1985）を参考として、両者の論考に則った形で論を進めて行くこととした。

2. 浮線紋土器の系譜と細分

浮線紋土器の特徴は、その紋様描出技法に読み取ることができる。即ち、器壁に対し、その上下縁を一段低く形づくり、さらにその中に細線を引くことによって紋様を表現するということである。表出された紋様は、器壁に対し陽出されたものとなる。南部東北から中部地方に広く分布し、この陽出技法を施紋の特徴とする一群の土器に対し、その成立と系譜を明らかにすべく論及したものに、以下の論者が見られる。ひとつには、浮線紋に着目し、大洞C₂式の工字状紋と杉田C類土器からの紋様変化とし、大洞A式併行の時期の土器と位置づけようとする考え方（杉原・戸沢1963）、同時期各地域に分布する工字紋を基本とした土器からの系譜を辿ろうとする考え方（西村ほか1965）がある。また、長野県下で出土する資料を分析し、散発的ながら大洞A式類似の工字紋が出土すること、浮線紋土器とその土器の分布地域が重なることから、その出自を同紋様に求める考え方を示し、西の突帶紋土器群、中部地方を中心として広がる複数型式を包括した浮線紋土器群、東北地方中・北部の亀ヶ岡式土器群の3つの大きな土器型式分布圏のなかで捉えようとする見解（石川1985a）も見られる。これらは、工字紋を基調とする点では基本的に同一とみなされよう。さらに、上記の見解を発展させたものとして、氷I式土器を設定した永峰氏が、中部地方の佐野II式土器がそのまま変化したのではなく、新たに大洞A式や西日本の土

2. 浮線紋土器の系譜と細分

器型式の影響を受けて成立したものとする見解（永峰1969）がある。これは、突帯紋土器分布圏と対峙する工字紋、変形工字紋を中心とする関東地方千網式土器の土器文化圏と位置づけるものである。

このほか、西日本との関係を論じたものには、汎西日本的に形成された突帯紋土器文化圏が形成され、その影響下に於いて成立した粗大な工字紋を持つ土器群が、氷I式の土器群の祖形となったとする見解（設楽1982）があり、晚期後半、西日本に分布する凸帯紋土器との関わりを認めるものには、これ以外に長野県御社宮司遺跡の調査成果（小林1982）などにも述べられている。

また、紋様の陽出技法に着目し、大洞B CからC₁式に位置づけられる亀ヶ岡式土器の中に、この技法が顕著に認められることから、これに系譜をもとめる考え方（田部井1985）がある。これは、後続する大洞A式土器では、沈線を紋様描出の基本としているものと捉える立場から、浮線紋とこれとの直接の系譜を認めず、工字紋、匹字紋の要素を受け入れていた特定地域が、在地に分布する土器型式に亀ヶ岡式土器の影響である陽出技法を採用し、浮線紋土器群を成立させたとする見解である。

浮線紋の細別に関しては、杉田遺跡の調査成果において、杉田D類土器の中に包括される浮線紋土器群が、杉田C類の特徴とする連続浮線橢円紋へと変化し、浮線紋の連結部に刻み目を施す段階を経て、つづく型式の沈線紋化し、三角形連繫紋と呼ばれる段階に移行することを示唆（杉沢・戸沢1963）する見解のほか、氷I式土器群に少なくとも二段階程度の細かい変遷を考える意見（設楽1982）が見られる。これ以外の研究成果としては、ひとつには、浮線紋のモチーフの変遷と紋様構成から第1段階から第3段階に分類し、第3段階の浮線紋土器が荒海式土器に少量伴出していることから、浮線紋土器が大洞A'式の後半に位置づけられるとし、さらにこの土器には弥生土器が伴うという考え方（中村1982）の提示がある。また、中部地方に分布する工字紋、浮線紋を持つ土器の器形と、浮線紋紋様の組み合わせの類別を行い、第1群から第3群の細分を提示し、これが即ち工字紋、浮線紋の1期から3期に該当すると述べた見解（石川1985）がある。この論考ではさらに、伊勢湾沿岸、近畿地方から出土した浮線紋土器の観察を行い、伊勢湾沿岸については、第2群土器と馬見塚式土器とを併行関係に置き、つづく第3群土器と櫻王式土器とが接点を持つと位置づけ、本稿で取り扱おうとする近畿地方については、第2群の新しい要素を持つ土器から第3群土器へと移行する時期の浮線紋土器を、長原式土器の時期と捉えた。そして東北地方の大洞式土器との関係については、論者が前半に位置づけられるとする第2群までを大洞A式併行とし、後半と位置づけた第3類を大洞A'式併行とする見解を示している。つぎには、関東、中部地方に分布する浮線紋の紋様に注目し、その変遷を系統づけることにより一類から五類の細別を行った論考がある。これは、関東・中部地方の編年との併行関係にまで論及し、氷I式土器の中心部分が、第四類に当てはめられるという見解を述べた。東北地方の大洞式土器との併行関係では、一類から四類までを大洞A式併行とし、最後の五類を大洞A'式併行とする論を展開した（田部井1985）。

また、近畿地方から浮線紋土器に関する検討を行ったものとしては、近畿地方の縄紋時代晩期を三期に分け、さらに、その第三期を第一段階、第二段階a・b、第三段階に小区分し、浮線紋土器はその第三期、第二段階後半より共伴して出土するという見解を述べた論考（泉 1990）がある。ここでは、北部九州の板付I式土器の成立を第二段階bの時期、畿内第I様式が第三段階の末に成立したものと考えている。また、弥生土器からの紋様系譜を遡って浮線紋に論及したものには、流水紋の出自に対して、浮線紋を介在した形で工字紋にまでその源流を辿ろうとした見解（國分1989）が見られるが、後述するように近畿地方の浮線紋の最終段階においては、紡錘形浮紋一段のものから鋸歯状を呈する紋様構成を持つものが出土していることから最終段階の浮線紋との直接的関係は希薄であると考えたい。

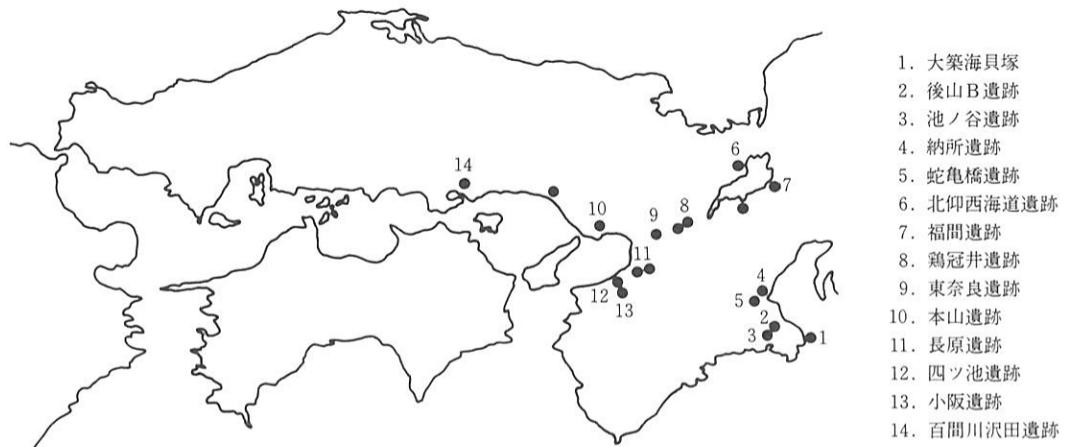


Fig.474 浮線紋（系）土器出土遺跡分布図

3. 近畿地方以西出土の浮線紋土器

これまで浮線紋土器の系譜と細分に関する研究成果を述べたが、ここでは資料収集を行った浮線紋土器に対し、出土状況、共伴遺物を詳細に検討し、先の研究成果に照らし合わせてみるとことしたい。近畿地方周辺を含めた地域で浮線紋（系）土器が出土している遺跡は、東は三重県、西は岡山県までの17遺跡である。時期的には古く位置づけられる例から終末の段階までの例を含むが、遺構に伴った形で検出された資料は少なく、共伴した遺物から明確に時期を決定できる例も少ない。

納所遺跡〔三重県津市〕

浮線紋土器は、B・C・D・E・F・G地区の、第5層上面に形成された不定型な形状を呈する自然流水路より2点が出土している（伊藤1985）。この自然流水路は、安濃川の一支流とされるもので、埋土は基本的に二層に分けて報告されている。上層の茶褐色砂質土層からは、多条沈線紋を施した畿内第I様式新段階後半の土器が多量に出土し、下層の青灰色粘土層からは杭列が検出され、それと共に少量の縄紋時代晩期の土器、数多くの木製品、畿内第I様式中段階から新段階にかけての遺物が出土した。

2点の浮線紋土器は、下層の青灰色粘土層から出土したもので、双方とも浅鉢の破片である。大きな方の破片は、口縁部から直接紋様帯が開始されるもので、口縁端部には紡錘形浮紋を施し、2条の細線を加えている。体部には、平行してめぐらされる浮線紋間に狭長な紡錘形浮紋を施しており、関東に多く分布する紋様構成である。器形・紋様は、石川分類の器形B2に属し、c2の施紋が行われている。田部井分類では二類に属す。

小さな方の破片は、前者と同様、口縁端部から直接胴部に繋がる浮紋を施すもので、浮紋は紡錘形浮紋を千鳥形に複数帶めぐらせるものである。紡錘形浮紋の中央部には、平行してめぐらされる浮線が加えられる。南東北、関東、中部にかけての広い地域に分布する紋様である。器形・紋様は、石川分類では器形B2に属し、a3の紋様が施される。田部井分類では三類に含まれる。

蛇龜橋遺跡〔三重県一志郡嬉野町〕

屈曲した肩部から口縁部にかけての部位が遺存する浅鉢の破片に浮線紋が施される例が出土している（新田1982）。口縁部には2条の浮線をめぐらせ、肩部には狭長な眼鏡枠状浮紋を施す。石川分類の器形Aに紋様c1を施したもので、田部井分類では一類に属する。形態的には他の畿内から出土した浮線紋土器より確実に古い要素を持ち、共伴した遺物にも五貫森式土器が見られる。

3. 近畿地方以西出土の浮線紋土器

福間遺跡〔滋賀県彦根市〕

石川氏が浮線文系（傍線筆者註）土器として紹介しているもので、1981年に調査された1トレンチ第6層とされる層位より出土し、晚期の凸帯文土器等と共に検出されている（本田1982）。土器は深鉢の破片で口縁部外面に沈線3条、内面に沈線1条をめぐらせ、口縁上端部は鋸歯状を呈している。

石川氏は、この土器を『本遺跡の突帶文土器は、「五貫森式」に酷似すると共に、彦根市という位置が、杉沢・川崎・尾上湖底といった湖北地方の馬見式土器分布地域に接していることは、その流入経路を示している。』（石川1985）と位置づけている。

鶏冠井遺跡〔京都府向日市〕

長岡京跡左京第82次（7ANEIS地区）～左京二条三坊一町・鶏冠井遺跡第2次～の調査で、浅鉢の破片が出土している（山中・亀割1982）。出土地点は、第1トレンチ5AG区、河SD-8214、灰色砂礫層（下層）で、縄紋時代晚期長原式を主体とした滋賀里I式土器から、弥生時代畿内第II様式の遺物と共に混在して出土している。下層の灰色砂礫層が埋没した時期は、畿内第I様式中段階から第II様式とされる。浮線紋土器は、口縁部から体部の破片で、口縁部上端面に沈線1条を施している。口縁端部外面には凸帯がめぐり、部分的に細線が加えられる。体部には2本の平行浮線によって区画された面に一帯の弯曲の強い紡錘形浮紋が設けられ、その中をさらに5本の細線によって浮紋を形成している。上位の平行浮線と紡錘形浮紋の接点部には、刻み目紋が施されている。この紋様パターンは、神奈川県、長野県に類例が認められる。器形・紋様については、石川分類の器形D、紋様ではc4に属し、田部井分類の四類となろう。

東奈良遺跡〔大阪府茨木市〕

浮線紋土器はII-A区の溝28から出土（奥井ほか1981）したもので、共に出土した遺物には、畿内第I様式中段階から新段階前半のものがある。土器は浅鉢の破片で、口縁部には細線が施されいくつかの単位で結束している。体部には曲線的な紡錘形浮紋の中に4本の細線を加え、紋様の結束部には刻み目紋が施されている。さらに下方にも浮線紋帯が続いているが、上方と同様の紋様パターンが繰り返されるのか、平行の浮線が5条以上めぐらされるのかは破片からでは判断しかねる。器形・紋様について、石川氏は弯曲の強い器形Cに紋様の構図b1あるいはc4が加えられたもの（石川1985）とし、田部井分類に従えば、下方の浮線帯が平行にめぐるのなら三類、紡錘形浮紋中の細線の数に着目するのなら四類に属するものと見られるが、口縁部紋様帯から直接浮線紋帯につづくこと、細線の数が4条と多いことから、後者の可能性が高いと考える。同様の紋様構成を持つ例は群馬県、長野県から出土している。

なお、この資料に関しては、森田氏が混入と見なしている（森田1989）が、私見としても、当遺跡ではこれまでの調査においてもほとんど凸帯紋を施す縄紋土器の出土が見られず、共に出土した遺物からも石川氏の指摘（石川1985）どおり、やや隔絶したものと考えられるため混入と考えたい。

長原遺跡〔大阪府大阪市〕

近畿地方縄紋時代晩期末の土器型式である長原式土器の標識遺跡となった長原遺跡より、ほぼ全形とうかがえる浅鉢が出土している（永島・松尾1983）。浮線紋土器は長原遺跡（NG81-10・NG82-6次）の発掘調査において、第9層とされた黒紫色シルト質粘土を主体とした土層で検出され、同一層から出土した遺物には、多量の凸帯紋土器と微量の畿内第I様式中段階から新段階の土器がみられる。浅鉢の形態は、やや凹んだ底部から上外方に内湾しながらのびていく体部を持ち、口縁端部は欠損している。紋様は、口縁部外面端部に凸帯を1条めぐらせ、2条の平行浮線の間に狭長な紡錘形浮紋を2帯重

ねるものである。なお、内面には赤色顔料が付着していると報告されている。近似した紋様構成を持つものは、南東北、関東にある。浅鉢は、石川分類の器形Eに、紋様a4（d2二段？）が施されたもので、田部井分類では四類に近似した例が認められる。

四ッ池遺跡〔大阪府堺市〕

四ッ池遺跡からも浅鉢の出土（山中・亀割1982）が報告されている。出土した地点・層位は、H地区、砂礫層を中心とした堆積が見られる自然流水路内からで、同一層内からは縄紋時代晚期の土器と共に弥生土器が出土し、「壺形土器でみる限り、古段層を含む中段層が中心となって、新段階の前半（a形態）までの土器」（第2阪和国道内遺跡調査会1970a）の時期の遺物と共に検出されている。土器片には「口縁部に2個1組の局部圧痕列、頸部に浮線網状文」（第2阪和国道内遺跡調査会1970b）が施されると報告されている。紋様は口縁部に前記紋様が施され、体部には2本の浮線を平行にめぐらせており、さらにその間に紡錘形浮紋を1段施し、浮紋上には細線3条を加えている。同様の紋様を持つ例は群馬県、長野県より出土している。器形は断面図が公表されていないため明確ではないが、石川分類の器形Dに属するものと考える。紋様は、石川分類のe4、田部井分類の四類に分類される。

小阪遺跡〔大阪府堺市〕

2点が出土しているが、いずれも遺構に伴ったものではない。体部の小片は、D地区灰褐色砂質土より出土し、縄紋時代晩期末の長原式土器、畿内第I様式中段階の土器と同一層位で出土（長谷川1987）している。この層上面に形成された自然流路からは、畿内第I様式新段階末の太・細併用の籠描き多条沈線紋を施す壺が出土している。口縁部が遺存する破片は、I地区の完新世段丘面基本層序第7層とした自然地形に堆積する緑灰色粘土層より出土している（三好・市本1989）。どちらの土器の胎土も、この遺跡で出土する凸帶紋土器の主流を占める生駒西麓産のもの、共に出土した畿内第I様式土器とも異なったものである。

体部の小片は、浅鉢の一部と考えられるが、口縁部が残存していないため形態は不明である。紋様構成は、平行にめぐる2条の浮線紋間に三角形の沈線を鋸歯状に配し、さらに三角形の長辺にあたる部分の中央部には大きな双頭突起が見られ、さらにその両側には細線が加えられる。反対方向の頂点部には、刻み目紋が施される。紋様は石川分類のeに近く、第3群と見られ、田部井分類では、五類に近似する。

口縁部が遺存する破片は、浅鉢の上半分から体部にかけてが遺存しており、I地区の第6面とした沼状の自然地形に堆積した層位から出土した。この層中には縄紋時代晩期末の長原式土器、畿内第I様式中段階新相の土器が包含されていた。紋様構成は、口縁端部外面に低い断面三角形の隆帯をめぐらせ、下方に幅の広い無紋帶をはさむものである。体部には、平行にめぐらされた2本の浮線紋間に狭長な三角形の浮線を鋸歯状に配し、各々の浮線上には細線が加えられ、さらに浮線の結節部には円形の刺突紋が施されている。器形・紋様については石川分類の器形Dに該当し、紋様はeに近似したものとなる。田部井分類に従えば五類に分類される中に含まれると考える。

以上の2点の土器の紋様構成は、関東から、中部地方にかけて広範囲に分布していることが指摘されており、後者については、群馬県、長野県より近似した例が報告されている。

本山遺跡〔兵庫県神戸市東灘区〕

自然流路内より浅鉢の口縁部から体部の破片が出土している（南 1984）。土器はこの流路最下層（第4層）とされた砂層と有機分の高い黒色砂混じり粘質土から出土したもので、縄紋時代凸帶紋土器、畿内第I様式中段階から新段階を中心とした遺物と共に検出された。また、この上部の下層と報告され

3. 近畿地方以西出土の浮線紋土器

る層中からは、畿内第Ⅰ様式を主体として畿内第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の遺物が出土している。土器は上下2本の平行にめぐらされる浮線の間に、ゆるやかに屈曲する紡錘形浮線紋を施すもので、紡錘形浮線紋の中央部には、2本の細線により陽出された横方向の浮線がみられる。同様の紋様構成を持つ土器は、南東北から関東・中部地方にかけての広い地域に分布している。石川分類では器形Eに分類され、紋様はa3となるが、紋様の特徴からその中でも新しい傾向を持つとされる。田部井分類では三類に近似する。

百間川沢田遺跡〔岡山県岡山市〕

同一個体の可能性が考えられる浮線紋を施した浅鉢の小片4点（岡田・中野1984）が出土している。土器が出土した地点は、百間川沢田遺跡2、高繩手B調査区の微高地上、210Q区、210R区の北辺境界

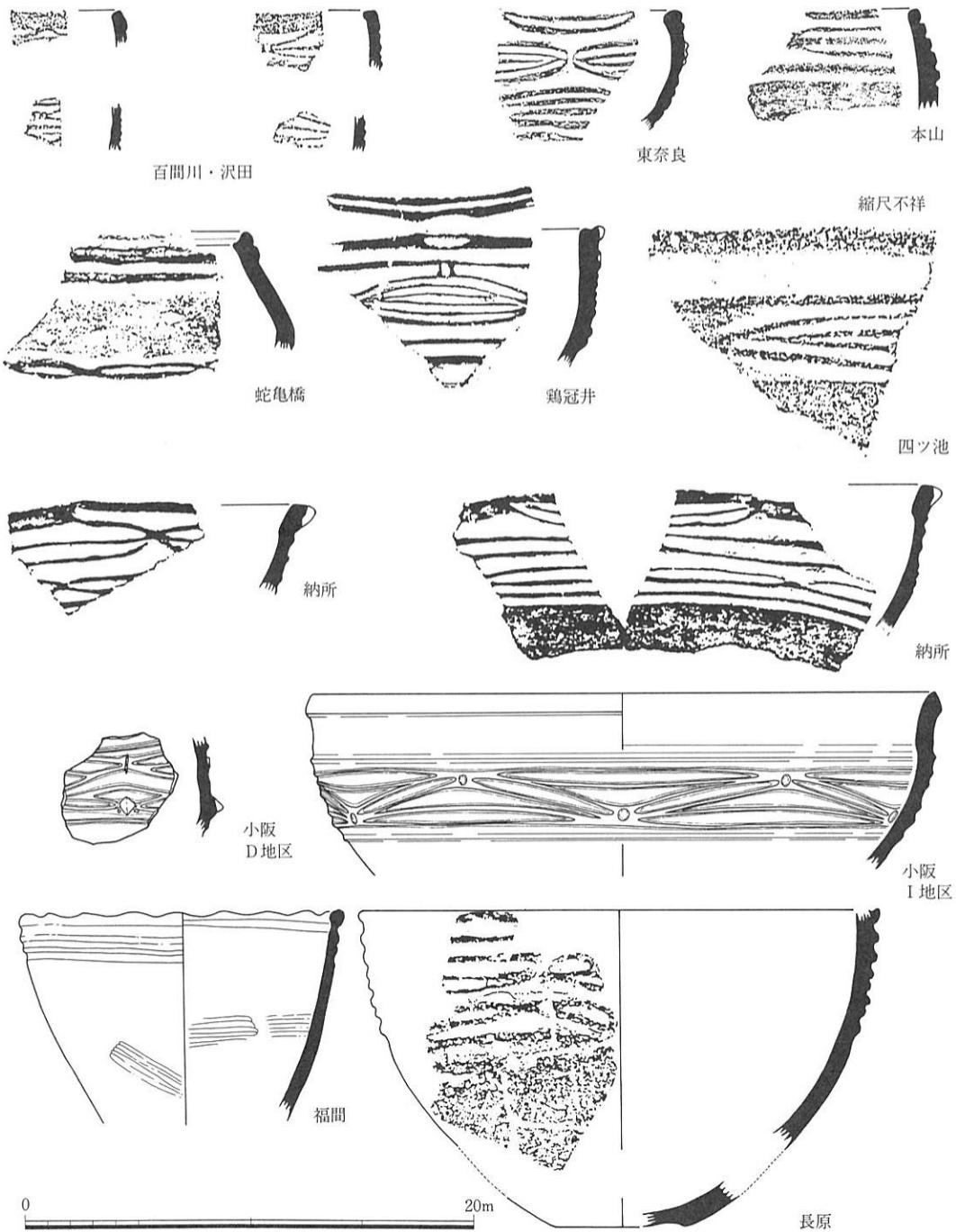


Fig. 475 西日本出土の浮線紋（系）土器（各報告書より引用、一部改変）

付近で検出された土器溜りー13とされた遺構からである。この遺構の埋土は木炭細片、焼土片、焼土塊を含む黄褐色を基調とした微砂質土層である。遺物の出土状態からは、居住域の近辺に形成された可能性が指摘されている。共伴した遺物は、近年提唱された中部瀬戸内地方の縄紋晩期終後半の土器型式である沢田式土器の基準資料となるものであり、さらにこの遺構上には、畿内第I様式中段階に併行すると考えられる遺物を包含する土層が堆積し、資料的価値を確実なものとしている。

出土した浮線紋土器は小片のため判然としないが、口縁部から体部にかけての部位が遺存し、紋様は菱形を呈する浮紋の長軸に対し、平行浮線をめぐらすものと考えたい。また菱形浮紋の長軸と平行浮線の結束部には刺突紋が施される。同様の紋様は、茨城県、新潟県に類例がみられる。器形は口縁部紋様帶を欠いていることから、石川分類の器形Eに相当し、紋様はb3となる。田部井分類では四類に属す。

以上、西日本出土の浮線紋（系）土器の紹介をおこなってきたが、上記以外にも、詳細は不明ながら次に掲げる諸遺跡で浮線紋土器が出土している。

- ・大築海貝塚 三重県鳥羽市答志町大築海貝塚（立教大学博物館学講座ほか1966・紅村ほか1987）から2点が出土している。石川氏は第2群に分類している（石川1985a）。
- ・池ノ谷遺跡 三重県多気郡勢和村池ノ谷遺跡から弥生時代前期に属する土器と共に表面採集資料（奥1987）が確認されている。
- ・後山西B遺跡 三重県多気郡大台町後山西B遺跡から表面採集（奥1987）されている。
- ・北仰西海道遺跡 滋賀県今津町北仰西海道遺跡から、浅鉢の破片2点が出土（葛原1987）している。

4. まとめ

西日本における浮線紋土器についてその類例を述べたが、それらに対し、石川・田部井分類の比較・検討を行い、各地域における土器型式の中の位置づけについて検討したい。まず最初に、西日本出土の浮線紋土器に対し、その前後関係について分類と対照させながら検討を加えたい。

前提として問題になるのは、石川・田部井分類の相対的関係である。浮線紋に対する系譜論が両者ともに異なるため、矛盾を生じることは明白であるが、大洞式土器からの捉え方を勘案し、工字紋を持つ石川分類第1群をここでは浮線紋土器群とし、また、紋様の変遷から勘案した両者の対応関係を検討して、大系統的に石川分類第1群が田部井分類二類に、石川分類第2群が田部井分類三類に相当するものとして考え、さらに、氷I式土器に対する両者の見解を考慮して、石川分類第3群を田部井分類四類から五類に相当するものとして暫定的に捉えて考えていくこととした。

まず、西日本出土の浮線紋土器の中で、最も古く位置づけられると考えられるのは、蛇龜橋遺跡出土の浅鉢である。石川分類では器形的には古い要素をもつが、紋様を根拠に第1群ないし第2群に含まれると述べられ、田部井分類では一類に属する。共伴した土器を見た場合、五貫森式土器とともに出土していることから、近畿地方周辺部の出土例では最も古く位置づけられるものではないかと考えたい。

つぎに納所遺跡の例がつづく。小片の方は、田部井分類の紋様構成では古い段階に該当するが、紋様が施される位置に注目した場合、肩部と体部の区別が不明瞭となっていることや、器形に注目した場合でも共伴したもう1点の土器とほぼ同じ形態を呈すると考えることから、石川分類第2群、田部井分類三類に属するものと考え、これらの中でも古い段階に位置づけられるものと捉えたい。

同様の紋様構成を持つが、器形に注目してやや時期が下ると位置づけられるものに本山遺跡出土例があげられる。本例は、紋様構成に注目するならば、田部井分類では納所遺跡出土例と同時期となるが、口縁部紋様帶が省略され、体部最下段の浮線もやや沈線に近い状態となっており、石川氏が紋様のモチー

4. まとめ

フの観察から新しく位置づけられると指摘するように、納所遺跡出土例よりも後出する第2群でも新しい要素を持つものと見なしたい。

続くものには百間川沢田遺跡出土例がある。これは紋様が小片のため不確定な要素を多分に残すが、紋様を見た場合、石川分類のb3に近似していることがうかがえる。器形Eに紋様b3が組み合わさる例は論考では示されてはいないが、口縁部紋様帯を欠く器形Eが、器形Bからの発展形態として後出的要素を持つ器形と考えた場合には、第2群の中でも末葉に位置づけることが可能となる。田部井分類に該当させるならば、長原遺跡出土例とほぼ同時期の四類に属し、これは、先の考えを支持しているものと考えたい。

これとほぼ同時期か後出するものに長原遺跡出土例が見られる。紋様が不明瞭なため石川分類の紋様c2二段と考えるならば第2群に、a4に対応するならば第3群に分類されるが、器形Eに分類されることから、これもさきほど示した器形変化として理解すれば、第2群の新しい部分から第3群の中でも古相を示すものと考えられ、石川分類との齟齬をきたさない。また、田部井分類に対照させて考えた場合でも、百間川沢田遺跡出土例とほぼ同時期か、後出するものと見なすことが可能である。

さらにこれにつづく例として東奈良・鶏冠井・四ッ池遺跡出土例がある。これらの特徴としては、口縁部と体部の間に存在する無紋帯が先の諸例よりも広くなっていることをあげうる。以上の例はほぼ同時期のものと捉えられるが、東奈良遺跡出土例が石川分類の器形Cに紋様c4の可能性が高い紋様を施す点でやや古い傾向といえるが、それ以外は、器形Dに紋様c4を施すもので共通する。田部井分類では、これらを一括して四類の終わり頃に分類することとなり、石川分類では、平行浮線と紡錘形浮紋が接する部分に紋様を持つ一群が設定されているため、第3群に相当するものと考えられる。しかし、口縁部と体部の無紋帯の間隔からすれば、四ッ池遺跡出土例の方がより後出的要素が強いものとなる。

最終段階には小阪遺跡出土の浮線紋土器があげられる。特にI地区出土例は、口縁部紋様帯が凸帯1条となり紋様は施されない。そして、口縁部と体部の無紋帯は東奈良・鶏冠井・四ッ池遺跡出土例よりも広くなる傾向が見られる。体部の紋様も、鋸歯状に配した中に細線を加えるだけのものとなり、簡略化される傾向が看取されよう。石川分類でも第3類の器形Dとこの紋様が組み合わさる例があげられ、田部井分類では五類と位置づけていることから、浮線紋の最終段階に属するものと考えたい。

以上に西日本出土の浮線紋土器に対しての型式的位置づけを行った。それでは、これらのうち時期決定を行いうる共伴資料の明らかなものについての検討を加えることとしたい。

まず、出土状況に関して層位的に一定の信頼が持てるものとして、百間川沢田、長原、小阪遺跡出土例があげられる。これらと共に伴する遺物に関しては、百間川沢田遺跡より中部瀬戸内における縄紋時代晩期末の沢田式土器がみられるることは先述した。長原遺跡では、一部畿内第I様式の土器が共に出土する形で、近畿地方縄紋時代晩期末の長原式土器が検出されている。小阪遺跡I地区では、長原式土器と共に畿内第I様式の頸部と体部に不明瞭な段を持つ壺、体部上方に沈線2条と段を組み合わせた甕などが検出されており、畿内第I様式中段階新相を示す土器が出土している。さらに、D地区の成果から畿内第I様式新段階末以前に浮線紋土器が伴うことが一つ事実として確認されている。

上記の出土状況に比較的信頼度がもてる浮線紋土器を検討した結果、蛇龜橋遺跡出土例を第1群土器と見なし、百間川沢田遺跡より第2群末葉の土器、長原遺跡より第2群から第3群の土器、小阪遺跡I地区より第3群末の土器が出土していることとなり各々の相互関係が導きだされる。混在して出土している西日本の他の浮線紋土器に関しても、以上の観察結果と照らし合わせると、納所遺跡出土例が第2群の古い段階と考えて畿内縄紋時代晩期末の船橋式の時期に、第2群の本山遺跡出土例が畿内船橋、長原

式段階に、紡錘形浮紋を持ち第3群に属する東奈良・鶴冠井・四ッ池遺跡出土の諸例は、縄紋時代晚期末から畿内第I様式初頭以前へと、おのずとそれぞれの相互関係が導き出されることとなる。

東に目を転ずれば、先に述べたように蛇龜橋遺跡出土の第1群土器が五貫森式土器と共に出土し、また、馬見塚式土器と第2群土器が併行関係にあり、櫻王式土器と第3段階の土器が接点を持つ（石川1985a）とされる。そして、各地のこれまでの研究成果の蓄積を検討した結果、浮線紋土器を媒体として近畿地方と各地域との関係を連鎖的に辿れば、大局的にTab.95に示すような様相を示す結果となつた。

以上が、西日本出土の浮線紋土器の資料収集を行った結果から導き出された結論である。大方の御批判、御叱声を賜りたい。

(1991年5月31日成稿)

Tab.95 縄紋時代晚期から弥生時代前期編年対応関係試案

地方 分類	東 北	越 後	関 東		中 部	東 海 (伊勢湾沿岸)	近 畿	中部瀬戸内	北部九州
			北・西部	東・南部					
石川1985a 田部井1985									
C ₂	大洞 C ₂	上野原	安行 Ⅲ d	杉田Ⅱ C類	+ (佐野Ⅱ)	西ノ山	鬼塚H地点		長 行
X									
第1群 A	二類	鳥屋 1	古			五貫森	口酒井15次 •蛇龜橋	前 池 (黒土BⅡ)	山ノ寺
第2群 A	三類	大洞 A	干網 I	杉田Ⅲ D類	+ (樋口五反田)	船橋			
X		鳥屋 2a				•納所			
第3群 A'	四類	大洞 A'	新			馬見塚	滋賀里V •本山	沢 田	夜臼 I
	五類 A'	鳥屋 2b					•長原 長原 東奈良 鶴冠井 •四ッ池 -----第I様式 古・中段階 •小阪	•百間川沢田	夜臼 II 板付 I
		砂 沢	緒 立	干網 II	荒 海	櫻 王		津 島	
					+ 水 II (新井南)	水神平 I	a 第I様式 新段階 b	門 田	板付 II

※右側のラインは両氏の大洞式土器に対する併行関係を示す

十は相当する土器が検出されているが
型式名称が設定されていないもの

※ 本稿は、財団法人 大阪文化財センター研究助成金の交付を受け、平成元年度研究助成 個人研究『浮線網状紋出土遺跡の資料収集』の成果を骨子として作成したものである。

引用・参考文献

- 愛知県考古学談話会 1985 『<条痕文土器>文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—』資料編 I
 石川日出志 1985a 「中部地方以西の縄文晚期浮線文土器」『信濃』第37巻 第4号 信濃史学会
 石川日出志 1985b 「関東地方初期弥生式土器の一系譜」『論集日本原史』 論集日本原史刊行会
 石川日出志 1988 「第一節 土器」『鳥屋遺跡 I・II—新潟県豊栄市鳥屋遺跡発掘調査報告—』 豊栄市史編纂委員会・豊栄市教育委員会・鳥屋遺跡発掘調査団
 石川日出志 1991 「縄文時代晚期浮線文土器出現期の編年と諸様相 —新発田市村尻遺跡B区資料紹介を兼ねて—」『北越考古学』第4号 北越考古学研究会

- 泉 拓良・家根祥多 1982 「縄文時代の終末」『日本歴史地図』原始・古代編（上） 柏書房
- 泉 拓良 1986 「縄文と弥生の間に」『歴史手帖』14巻4号 名著出版
- 泉 拓良 1990 「西日本凸帯紋土器の編年」『文化財学報』第八集 奈良大学文学部文化財学科
- 伊藤久嗣 1980 『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県埋蔵文化財調査報告35-1 三重県教育委員会
- 岡田 博・中野雅美 1985 「高縄手B地区」『百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2 旭川放水路百間川改修工事に伴う発掘調査』VI 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59 建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- 奥 義次 1978 「原始社会」『大宮町史 歴史篇』 大宮町
- 奥 義次 1990 「三重県における凸帯文土器出土遺跡の分布相」『Mie history』vol. 1 三重歴史文化研究会
- 奥井哲秀・井上直樹・宮脇 薫・大野恵三子・石田治雄・高田敬子 1981 『東奈良発掘調査概報』 II 東奈良遺跡調査会
- 金関 恕・佐原 真 1986 『弥生文化の研究』3 弥生土器I 雄山閣出版株式会社
- 金関 恕・佐原 真 1987 『弥生文化の研究』4 弥生土器II 雄山閣出版株式会社
- 葛原秀夫 1987 「北仰西海道遺跡の調査」『今津町文化財調査報告書』第7集 今津町教育委員会
- 紅村 弘 1963 『東海の先史遺跡』総括編 名古屋鉄道株式会社
- 紅村 弘 1986 『中部日本』『弥生文化の研究』3 弥生土器I 雄山閣出版株式会社
- 紅村 弘 1987 『西日本・中部日本における弥生時代成立論』
- 紅村 弘・増子康真・山口 克・和田英雄 1987 『東海先史文化の諸段階』資料編II
- 國分政子 1989 「弥生土器地域論—畿内第II様式の系譜をめぐって—」『滋賀考古』第2号 滋賀考古学研究会
- 小林秀夫 1982 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市その5・御社宮司遺跡』 長野県教育委員会
- 設楽博己 1982 「中部地方における弥生土器の成立過程」『信濃』第34巻 第4号 信濃史学会
- 杉原莊介・戸沢充則 1963 「神奈川県杉田遺跡および桂沢遺跡の研究」『考古学集刊』第二巻 第一号 東京考古学会
- 須藤 隆 1987 「東日本における弥生文化の成立と展開」『弥生文化の研究』4 弥生土器II 雄山閣出版株式会社
- 第2阪和国道内遺跡調査会 1970a 『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』3
- 第2阪和国道内遺跡調査会 1970b 『第2阪和国道内遺跡発掘調査報告書』4
- 田部井 功 1985 「縄文晚期・浮線文土器の研究—文様の構造と系統について—」『古代探叢—早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集—』 早稲田大学出版部
- 中島栄一・渡辺朋和 1989 「浮線網状文系土器様式」『縄文土器大観』4 小学館
- 永島暉臣慎・松尾信裕 1983 『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書III—(仮称)大阪市立第8養護学校建設に伴う発掘調査報告書—』 (財)大阪市文化財協会
- 永峰光一 1969 「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』9 石器時代文化研究会
- 中村五郎 1982 『畿内第I様式に並行する東日本の土器』
- 中村五郎 1986 「東日本」『弥生文化の研究』3 弥生土器I 雄山閣出版株式会社
- 中村五郎 1988 『弥生文化の曙光 縄文・弥生文化の接点』 未来社
- 西村正衙・馬目順一郎・原 信之・戸田 健・江崎 武・平野吾郎・大久保 進 1965 「関東における縄文式最後の貝塚—千葉県成田市荒海貝塚—」『科学読売』 第17巻 第10号 読売新聞社
- 新田 洋 1982 「一志郡嬉野町蛇龜橋遺跡」『昭和56年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』 三重県教育委員会
- 日本考古学協会編 1961 『日本農耕文化の生成』 東京堂出版
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1987 『小阪遺跡(その4)—調査の概要—』
- 平井 勝 1988 「岡山における縄文時代晚期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集
- 平井 勝 1989 「縄文時代晚期における中・四国の地域性」『考古学研究』第36巻 第2号 考古学研究会
- 福井県 1986 『福井県史』資料編 第13 考古 本文篇 福井県史編纂委員会
- 本田修平 1982 『福満遺跡—発掘調査概要報告書—』 彦根市埋蔵文化財調査報告 第4集 彦根市教育委員会
- 増子康裕 1965 「尾張平野における縄文時代晚期後半期の編年的研究」『古代学研究』第40号 古代學研究會
- 南 博司 1984 『神戸市東灘区本山遺跡発掘調査報告書』 財團法人 古代學協會
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡(南その1)—調査の概要—』
- 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1990 『小阪遺跡(南その2)—調査の概要—』
- 森田克行 1989 「三島地方の縄文土器」『高槻市文化財年報 昭和61・62年度』 高槻市教育委員会・高槻市立埋蔵文化財調査センター
- 山崎純夫 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』 鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会
- 山中 章・亀割 均 1982 「鶴冠井遺跡第2次発掘調査報告」『向日市埋蔵文化財発掘調査報告書』第10集 向日市教育委員会
- 立教大学博物館学講座ほか 1966 「大築海貝塚の発掘調査」『ムゼイオン』12号 立教大学博物館学講座

第4章 和泉における古式土師器の様相

鈴木陽一（泉佐野市教育委員会）

1. はじめに

小阪遺跡では、F地区・G地区の土坑および溝から多量の古墳出現期の遺物が出土した。これらは、石器がわずかに含まれている以外は、すべて土師器（庄内式・布留式）である。これらの詳細については、第I部第3章において記されており改めてふれることは避けるが、大半が溝または河川からの出土である。また、そのなかでも出土地点が溝と河川の合流点であったり、同一の溝が埋没した後再掘削されているものなどといったような状況から、良好な一括資料として、古式土師器の編年資料としてとりあげるには躊躇することを余儀なくされる。しかしながら、和泉北部地域の古墳時代前期における土器の一様相を示すものとして、資料的価値は大きく位置づけられるものである。

古墳発生期前後から古墳時代前期における新たな社会状況の急激な変化は、当然のことながら土器様式にも大きく反映されるところとなっている。これらは、いわゆる畿内第V様式に後続するものとして「庄内式土器」¹⁾、さらにそれに続くものとしては「布留式土器」²⁾として注目され、数多く研究・論議されるところとなっている。今日では、「庄内式」・「布留式」とともに、その編年作業は極めて精度の高いところで分類されており、とくに、大和・河内地域においての編年的分類作業は、精緻を究めた感がある。

さて、和泉地域においても当該時期の土器の分類作業は精力的に進められており、近年では、堺市「四ツ池遺跡」³⁾および「船尾西遺跡」出土土器⁴⁾を基準とした樋口吉文氏による詳細な分類作業が試みられており、土器全体の変化についてはおおよその標識となり得るものと考えられる。このように、近年の発掘調査の増加による、新たな資料蓄積は確実に認められるものの、酒井龍一氏⁵⁾による業績以来、体系的な編年分類の研究は未だ不十分であると言わざるを得ない。とくに、庄内式土器の所属時期を弥生時代とするのか、古墳時代とするのか。また布留式土器を、須恵器出現後においても継続する土器型式として認めるのか否かの問題も、氏の研究以降論究されておらず、不十分な点が多く残されている。また、本報告書にも掲載されているように、近年頻繁に出土が報告されている「初期須恵器」は、布留式土器の下限問題を解決する上で重要な資料であると言える。このような中、本稿では現時点において、弥生時代終末期の土器と認識される北鳥池下層式（上田町第1層出土土器）から始まる→上田町第2層出土土器（庄内式）→小若江北式（布留式）といった土器型式の変化において、古墳出現期後の古相を呈する土師器という意味から、庄内式土器および布留式土器を含めて、「古式土師器」と呼ぶこととする。

なお、布留式土器の下限については、須恵器の出現によって、土師器の様式および構造上に大きな変質が見られる直前までの土器型式とする、安達厚三・木下正史⁶⁾、置田雅昭氏⁷⁾の論に同意するものである。

ここでは、和泉北部地域において良好な出土が報告されている、東雲遺跡⁸⁾、池上遺跡⁹⁾、豊中遺跡¹⁰⁾、府中遺跡¹¹⁾、の古式土師器をここに再掲して簡単な検討を行なうことで、小阪遺跡出土土器群の実体を明確にして、その編年的な位置づけを行っていく作業過程での一助となることを目標としたい。

2. 泉大津市東雲遺跡出土の土師器

泉大津市中央より、西端部、泉大津市東雲町に所在する遺跡である。調査では、古墳時代前期の溝、土坑、住居址等が多く検出されている。この中でも溝1および2からは、まとまって古式土師器が多量に出土しており、当遺跡の時期を知る上では重要なものとなっている。以下、溝1・2出土の遺物を簡単に紹介しておきたい。

溝1出土土師器

壺

1. 球形の体部と大きく開く口縁部を持つ、小型丸底壺である。体部に比して口縁部はかなり発達しており、大きく凌いでいる。器面調整は丁寧なヘラ磨きを施している。
3. 1同様のものであるが、1に比して口縁部の発達は少ない。剥離が激しく、器面の調整は内外面共不明である。

鉢

2. 球形の体部に、短く外反する口縁部を持つものである。底部は欠損しており不明である。

甕

4. やや肩の張った球形の体部に、「く」の字状に外反する口縁部を持つ。調整等は不明瞭であるが、色調は赤褐色を呈し、在地産であることがわかる。
5. やや短く上方に外反する口縁部を呈するもので、器壁等はかなり厚い。

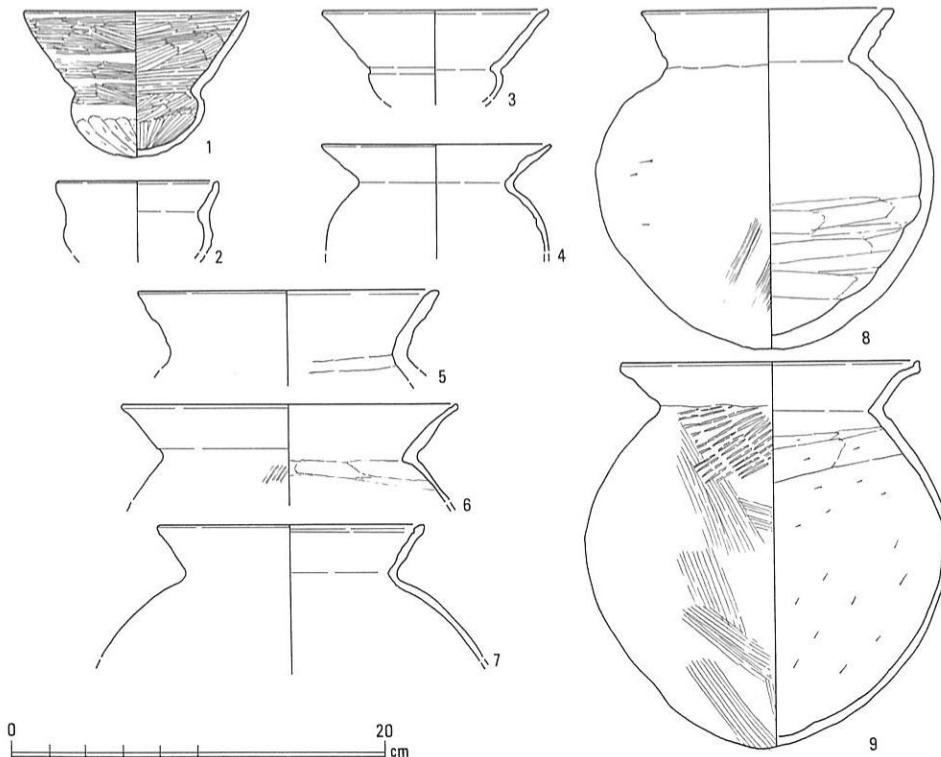


Fig.476 東雲遺跡 溝-1 出土土師器

6. 体部の内面を横方向の細かなヘラ削りによって、非常に薄手に仕上げたものである。口縁部は、屈曲が強く「く」の字状に外反し、端部はやや上方につまみ上げている。体部の外面には細かい叩き目がみられる。
7. 球形に延びてきたと思われる体部に、直線的に外反する口縁部を持つ。口縁端部は、内側にやや肥厚している。内外面の調整共不明瞭である。
8. 体部は球形丸底で、短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。体部・口縁部ともに、器壁はかなり厚く、とくに体部の内面にはヘラ削りが施されているが、あまり薄くなってはいない。体部の外面にもヘラ削りの痕跡がみられるが、その後刷毛目を施している。在地産の模倣した土器と考えられる。
9. 球形の体部と丸底の底部に、「く」の字状に強く外反し、端部を上方につまみ上げる口縁部を持つ。体部の内面は、丁寧なヘラ削りによりかなり薄手に仕上げられている。体部には、細かい叩き目が施されるが、その上に底部から口縁部に向かって刷毛目が施される。色調は茶褐色である。

溝2出土土器

甕

1. 体部から「く」の字状に外反し、やや内弯しながら広がる口縁部を持つものである。口縁部の内外面はナデによる。
3. 球形に延びてきた体部に、直線的に広がりその端部を内側に肥厚させる口縁部を持つ。体部の内面は、ヘラ削りによって薄く仕上げられている。外面は、細かな横方向の刷毛目により調整を行っている。
11. やや厚手の球形丸底の体部にやや内弯しながら広がり、端部を内側に肥厚させた口縁部を持つ。体部の外面は、縦あるいは横方向に粗い刷毛目を施す。体部の内面には、指頭圧痕とヘラ削りが顕著にみられる。布留式甕の模倣である。
12. やや胴長の球形丸底の体部に、内弯しながら内側を肥厚させた口縁部を持つ。体部内面には、ヘラ削りが顕著に施され、かなり薄手に仕上げている。外面には、縦あるいは横の方向に細かな刷毛目が施されている。口頸部と体部の境には、指頭圧痕がみられる。

壺

2. 直立して短く真直ぐに延びる口縁部を持つものである。口縁端部は、やや内側に肥厚させ、方形状に治めている。器面調整は、ナデによって仕上げている。
4. 外反しながら延びてきた口頸部に、直線的に上方に延び、端部をやや内側に肥厚させた口縁部を持つ二重口縁壺である。内外面の調整はかなり磨滅しており、不明瞭である。
5. 体部から強く屈曲し、やや内弯しながら短く広がる口縁部を持つ。端部の内側への肥厚はみられない。
6. 球形の体部に大きく開く口縁部を持つ小型丸底壺である。口縁部と体部の比率はほぼ同一である。口縁部の内外面には、横方向に丁寧なヘラ磨きが施され、体部の内面には縦方向のヘラ磨きがみられる。
7. 4と同様の形状を呈する二重口縁壺である。体部の外面には、横方向の刷毛目が、内面にはナデまたは指頭圧痕が顕著にみられる。

2. 泉大津市東雲遺跡出土の土師器

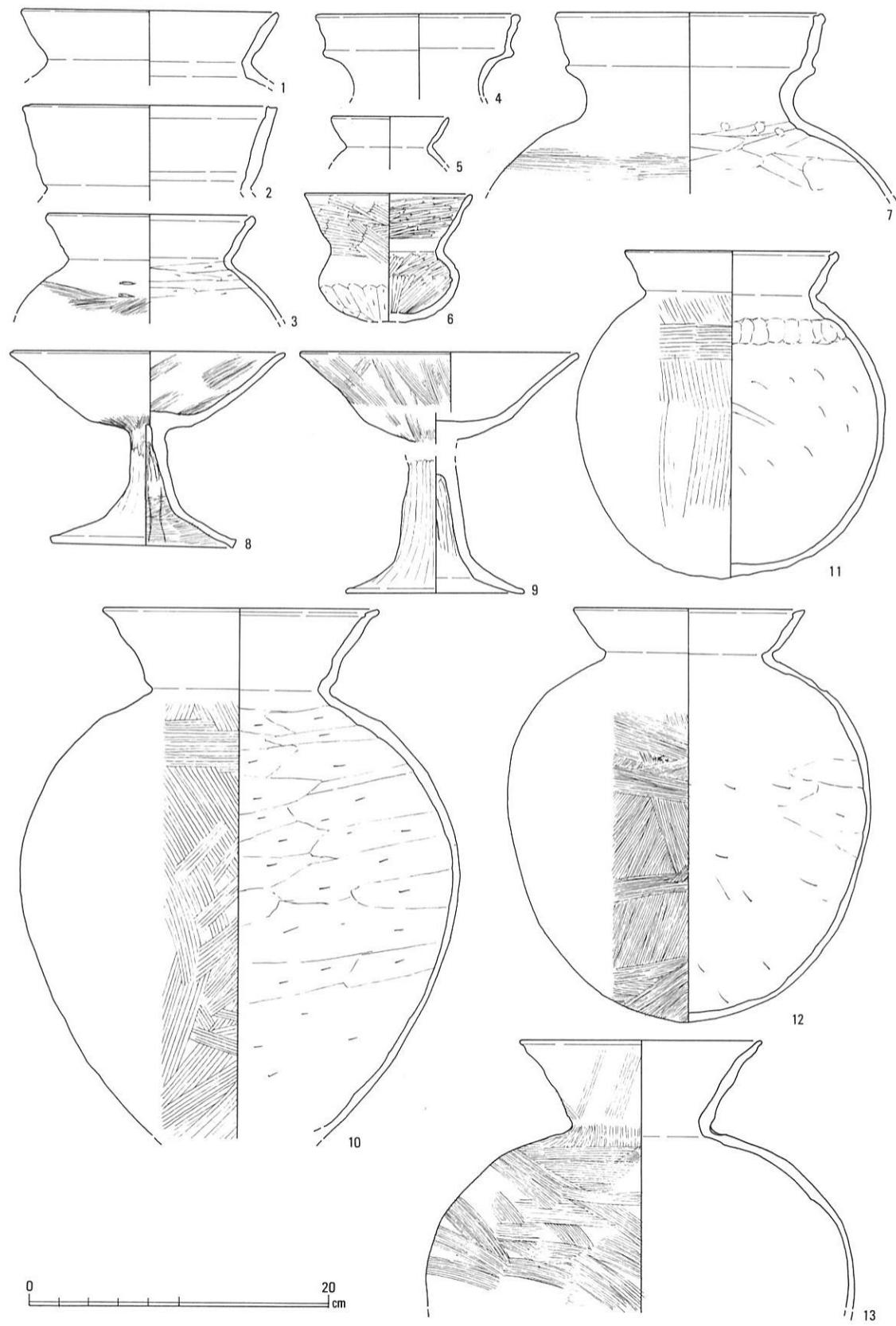


Fig. 477 東雲遺跡 溝-2 出土土師器

10. やや胴長球形の体部に、直立して真直ぐに広がる口縁部を持つものである。体部外面には斜めあるいは横方向に粗い刷毛目を、また内面には横方向にヘラ削りが施され、薄い仕上げとなっている。口縁端部はやや内側に肥厚させている。
13. 10同様の直口壺であるが、口縁端部は内側への肥厚は認められない。体部および口縁部の外面には細かな横あるいは縦の方向に刷毛目が観察される。内面の調整は確認できない。

高坏

8. 坏部は屈曲して開くものの、屈曲部の稜線はなくなり、丸みを帯びた形状を呈する。脚部は比較的高く、裾はなだらかに広がっていく。坏部の内外面には縦方向の刷毛目が、裾部の内面にも横方向に刷毛目がみられる。脚柱部の外面には、縦方向のヘラ磨きがみられる。
9. 8よりもさらに坏部の屈曲部の稜線が不明瞭となっている。脚部の裾径はあまり開かず、大きくはならない。脚部の外面には縦方向にヘラ磨きがみられるが、坏部の器面には縦方向の刷毛目による調整が行われている。

3. 泉大津市池上遺跡出土の土師器

池上遺跡は、和泉市および泉大津市の両市にまたがって広がる、和泉地方を代表する弥生時代の集落遺跡である。調査では、包含層内ではあるが完形品である甕をはじめ古式土師器がまとめて出土している。

以下、出土品のうちの主要なものについて紹介しておきたい。

甕

1. 肩部の張ったやや長手の体部に、「く」の字状に外反する口縁部がつくものである。逆円錐台部には、突出した底部がつき、外面には粗い叩き目、内面にはナデによる調整が施されている。
2. 肩部の張らない胴長の体部に、ゆるやかに外反する口縁部がつく。逆円錐台部には、平坦面を持つだけで突出しない底部を有するが、正立は不可能である。外面の調整は、同一原体による叩き目が施され、口縁部中途までは「叩き出し」による。また内面はナデ上げによる調整がみられる。
3. 1同様に肩部の張った体部に、「く」の字状に外反する端部をややつまみ上げた口縁部がつくものである。底部は欠損しているが、外面には粗い叩き目が、内面にはナデ上げがみられる。
4. 肩部の張った体部に、「く」の字状に外反する口縁部がつく。重心は、中心よりやや上である。逆円錐台部には、ほとんど突出しない輪台状の平底がつく。体部外面の叩き目は、逆円錐台部とその接合部以上においては、溝幅の違う原体の異なったもので施されている。内面はナデによる調整が施されている。
5. 肩部の強く張った球形の体部に「く」の字状に外反した口縁部がつく。逆円錐台部につく底部は、輪台状の突出したものである。外面の叩き目は、同一原体による粗く溝幅の広いものである。内面の調整は、逆円錐台部がナデ上げによるもので、接合部以上では横方向のナデである。
7. 重心が体部のほぼ中心にあるもので、口縁部がゆるやかに外反するものである。外面の叩き目は、全て同一の原体によるもので、口縁部中途までは「叩き出し」によっている。底部は欠損しており不明である。内面の調整は、ナデによるものと思われる。
8. 球形の体部に、「く」の字状に外反し短く上方につまみ上げた端部をもつ口縁部がつく。器高の

3. 泉大津市池上遺跡出土の土師器

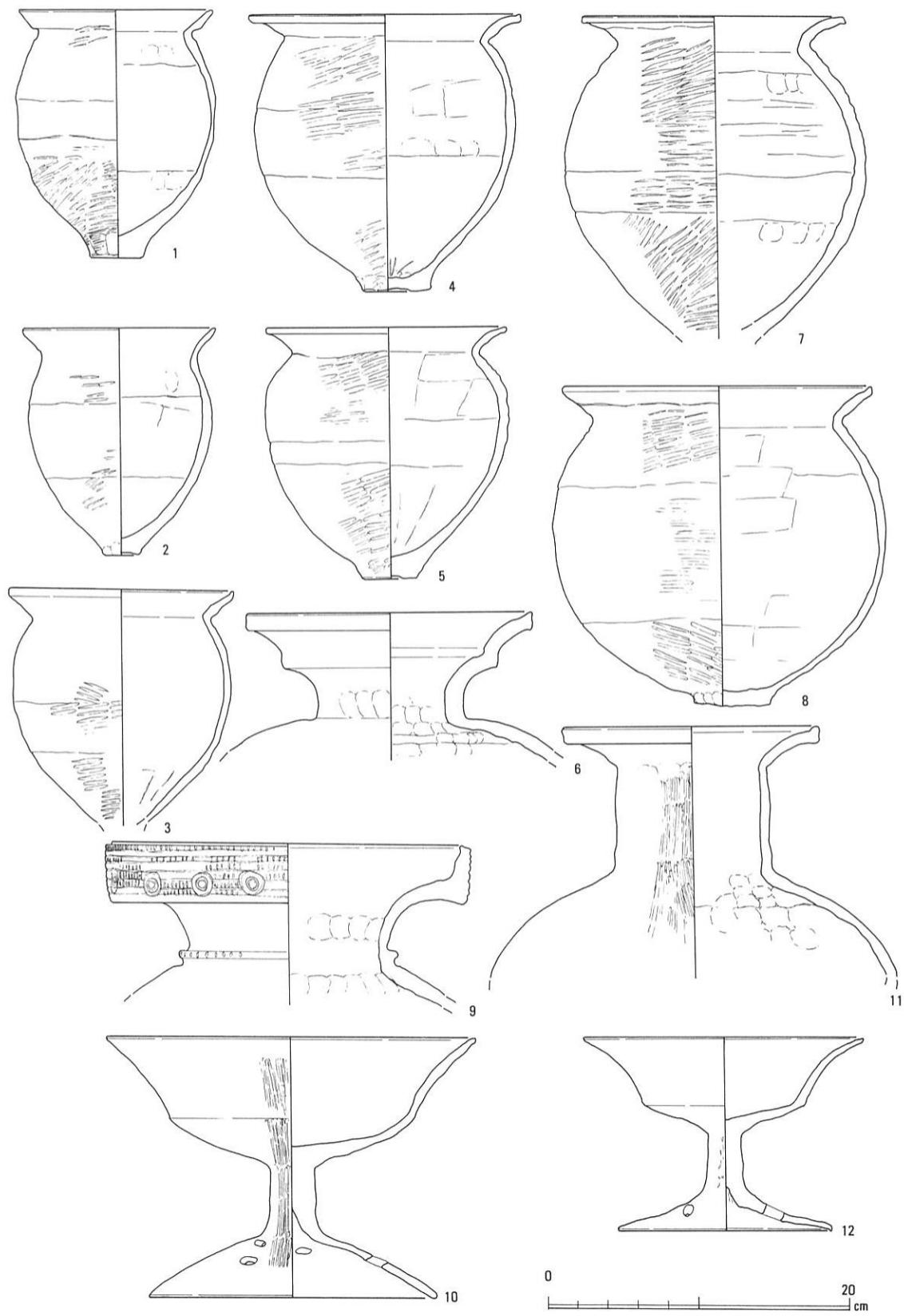


Fig. 478 池上遺跡出土土師器

ほぼ1/3も占めない逆円錐台部の底部は、短く突出した平底を呈するが、ほとんど正立不可能である。外面の叩き目は、逆円錐台部と接合部以上では溝幅の違った原体のものを使用しているが、口縁部中途までは、「叩き出し」状に施されている。内面は、前面横方向のナデがみられる。

壺

6. いわゆる二重口縁壺である。短くややゆるく外反する頸部から、再びゆるく外反し短く上方につまみ上げる端部を有する口縁部を持つ。調整は、不明な点が多いが頸部の内外面には、指頭圧痕がみられる。
9. 体部と頸部の境に刻み目突帯をめぐらせ、大きく外反する頸部に上方に短く延びる口縁部をつけて二重口縁壺に仕上げているものである。口縁部の外面には、竹管による7本の凹線文と、その間には刺突文が施され、口縁部の下半には円形浮文がみられる。
11. 丸く肩部の張った体部に長く直線的に延びる口頸部と、短く外反し、やや上方につまみ上げた端部を有した口縁部を持つ。口頸部の外面には、細かな縱方向のヘラ磨きがみられる。体部および頸部の内面には、顯著に指頭圧痕がみられる。おそらく、外来系の土器と考えられる。

高坏

10. 坏部の上半部がやや外反ぎみに広がって、下半部とほぼその長さが等しいものである。中実の脚柱にゆるく内弯しながら外に広がる下半部をもつ。外面の調整は、縱方向に細かなヘラ磨きが施されているが、あまり丁寧ではない。
12. 直線的に延びた坏部下半と、大きく外反しながら延びる上半部は、10同様にその長さはほぼ等しいものである。中実の脚柱部には、屈曲が明瞭で直線的に広がる下半部を持つ。外面の調整は刷毛目がややみられるが、やはり丁寧ではない。

4. 豊中遺跡出土の土師器

豊中遺跡は、泉大津市の東南部にあたり、和泉市との市境に位置する。調査では、最終遺構面において堅穴住居址、ピット、大溝、小溝、落込み等の遺構が検出されている。このうち、大溝からは古式土師器が多量に出土しているが、上層および下層との明確な分類が詳しくはされておらず、その土器の扱いについては慎重な型式学的な分類が必要である。しかし、和泉地域における古式土師器の一つの様相を示すものであり、以下にその特徴を記していくこととする。

甕

1. 重心が中心部よりやや下半部で、ゆるく外反する口縁部を持つものである。器高の約1/3を占める逆円錐台部は底部が突出し、外面には逆円錐台部と接合部以上において原体の異なった叩き目が施されている。内面はナデによるものであるが、比較的平滑に仕上げられている。
2. 肩部の張った、重心を体部の上半部に持ち、「く」の字状に外反する口縁部を有するものである。逆円錐台部は、平坦面を持つだけで突出しない底部を持つ。外面叩き目の原体は同一のもので、前面にわたって丁寧に施されている。内面は全てナデによる。
3. 肩部の張った体部に、鋭く「く」の字状に外反した後、再び水平方向に外折する口縁部がつく。器高の1/3を占める逆円錐台部は、底部が突出し、外面には同一の原体の叩き目が施されている。内面前面にはナデが施されている。
6. やや下膨らみの体部に短く「く」の字に外反する口縁部を持つ。器高の2/5と比較的割合の多い

4. 豊中遺跡出土の土師器

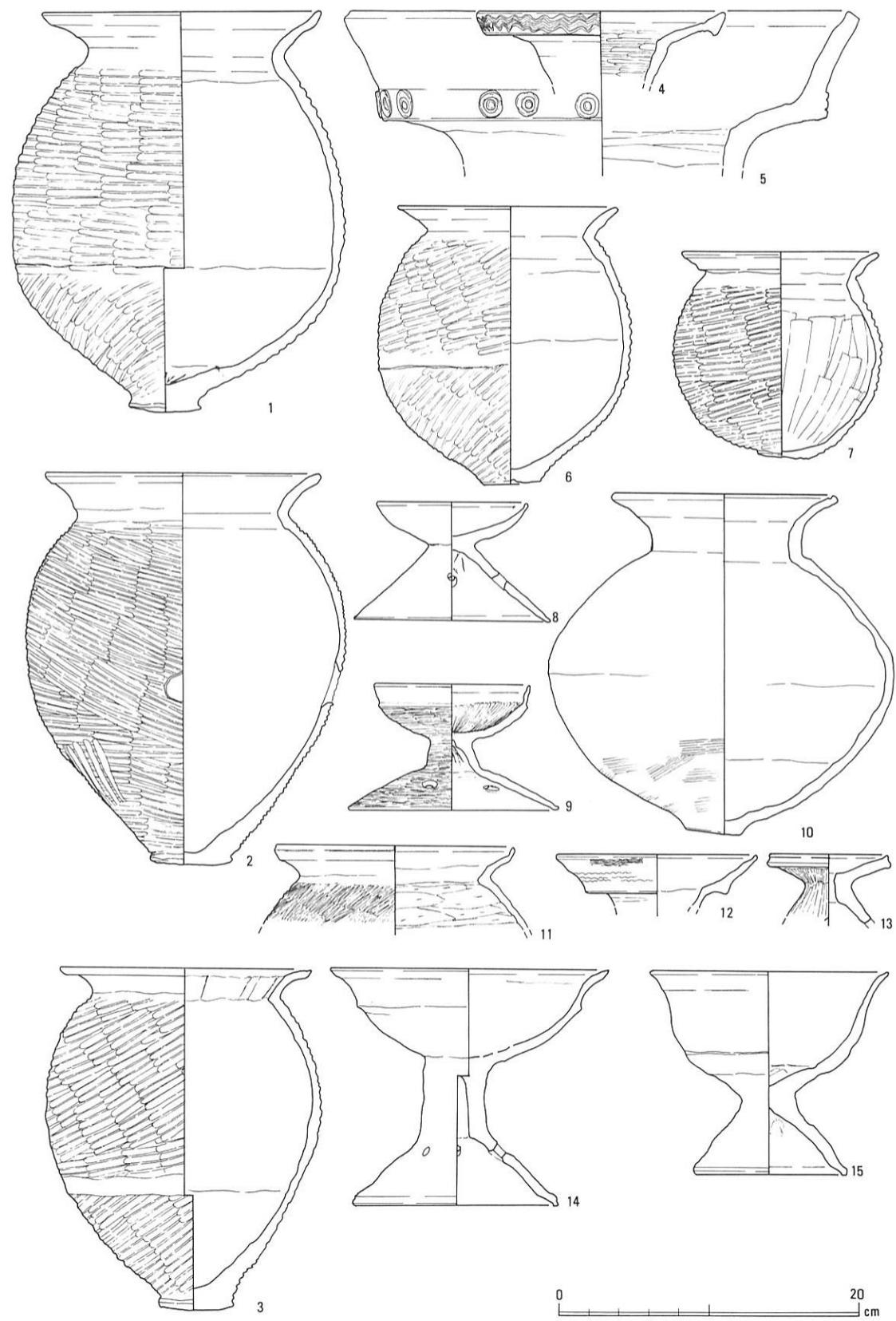


Fig. 479 豊中遺跡出土土師器

逆円錐台部は輪台状の突出した上げ底となっている。逆円錐台部と接合部以上では、やや異なった叩き目の原体を持つものと思われる。内面の調整はナデによる。

7. 球形の体部に短く「く」の字状に外反する口縁部を持つ、小型のものである。逆円錐台部は、器高の約2/5を占めており、底部は円盤状の粘土を貼りつけただけのもので、正立は不可能である。外面の叩き目の原体は、同一のもので、内面の調整はナデ上げによるものである。
11. 外面には細かい叩き目と内面には丁寧なヘラ削りにより、非常に薄く仕上げた体部に、「く」の字状に鋭く外反する口縁部を持つ甕で、口縁端部はつまみ上げ状の肥厚が非常に顕著である。色調は茶褐色を呈し、胎土には角閃石が含まれている。今回出土した甕のうち約10%の割合を占める。

壺

4. 二段に屈曲しながら直線的に外反する口縁部を持ち、端部は貼りつけにより玉縁状におさめられている。端部の外面には櫛状の工具により波状文が施されている。内面は、丁寧な横方向のヘラ磨きが施されている。小型のものである。
5. 口縁部が二段に外反する、大型のいわゆる二重口縁壺である。外面には竹管の円形浮文を施す。外面にはヘラ磨きが、内面にはナデによって調整がなされている。
10. 球形の体部に、ゆるく短く外反しながら延びる口縁部をもつ、広口の壺である。底部は、突出した平坦な平底のもので、体部の外面には叩き目を施した後、丁寧なナデによって消している。
12. 口頸部の境に断面三角形状の突帯を貼りつけることにより、外面からみて二重口縁状に仕上げている。外面には櫛描きによる波状文が施される。

器台

8. 端部をつまみ上げた椀状の受け部と、円錐状に直線的に広がる台部を持つ。器面全体の調整は、かなり磨滅しており不明瞭ではあるが、横方向の細かなヘラ磨きが施されているものと思われる。
13. 短く直線的に延びる漏斗状の受け部と、裾広がりの台部を持つ中空の小型器台である。器面の調整は、あまり丁寧ではない縦方向の細かなヘラ磨きが施される。

高坏

9. 椭状に延びてきた下半部と、上方に短く立ち上がる口縁部を持つ坏部に、短い脚柱部と裾部は、屈曲して平たく開く脚部がつく小型の高坏である。器面には横方向の細かなヘラ磨き調整を施し、坏部の内面には放射状の暗文を施している。
14. 弯曲した坏下半部と、短く外反する口縁部を持つものである。脚部は、比較的高く、柱部より屈曲して笠状に広がる裾部を持つ。内外面の調整は不明である。

鉢

15. 台付きの鉢で、椀状にゆるく外反しながら延びて口縁端部を短く外接する鉢部と、脚部は短くゆるやかに広がりながら裾部にいたるものである。内外面の調整は、共にナデによっている。

5. 府中遺跡出土の土師器

府中遺跡は、和泉市の府中町および伯太町にまたがって広がる、弥生時代中期から古墳時代にまで至る集落遺跡である。本調査では、主として古墳時代前期の竪穴住居址、溝、土坑、ピット等が検出されている。この中でも1号住居とされている竪穴住居址の床面からは、多量の古式土師器が出土している。

5. 府中遺跡出土の土師器

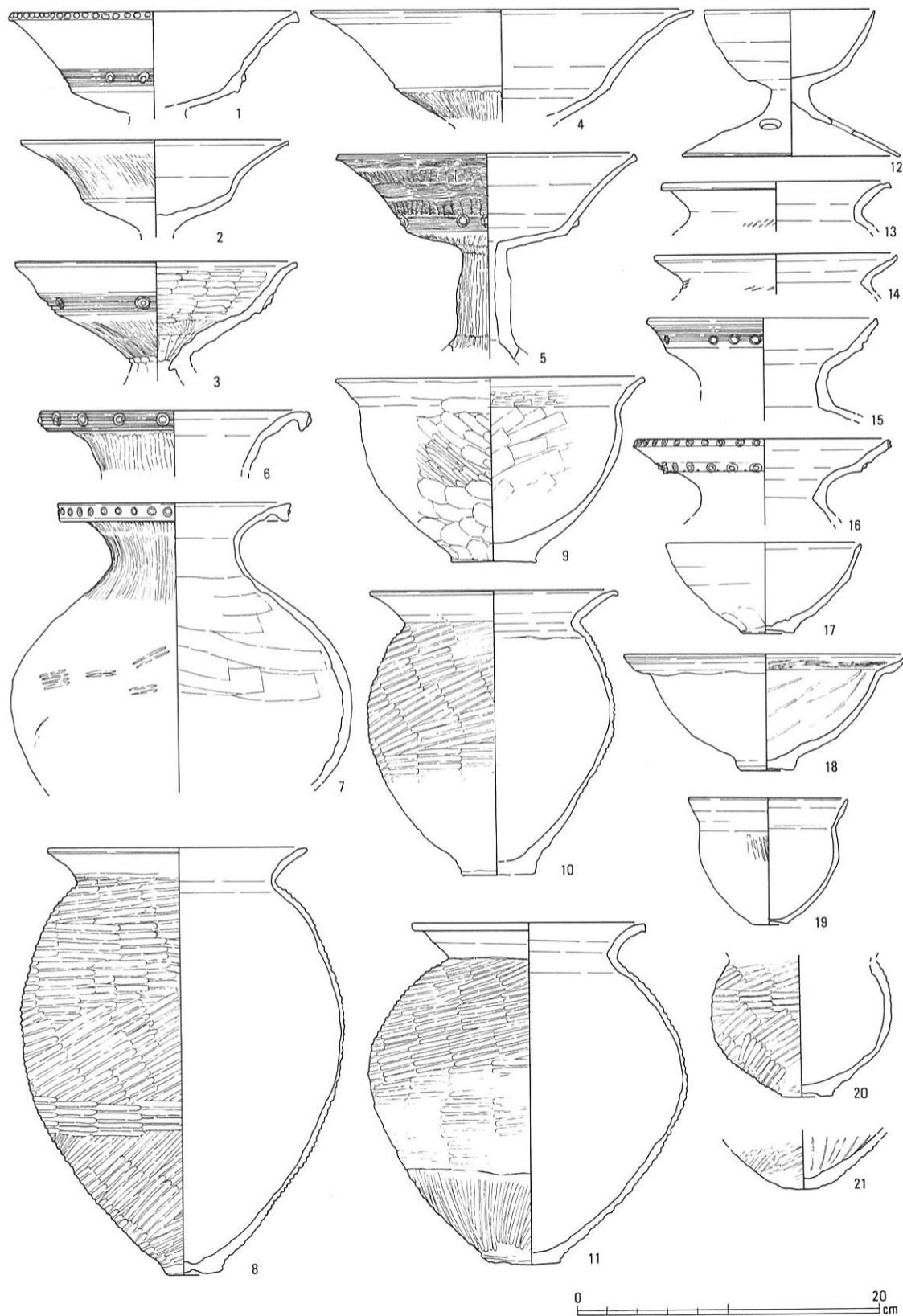


Fig. 480 府中遺跡出土土師器

以下、主要なものを述べていく。

高坏

1. 坏部上半部はやや内弯ぎみに広がり、下半部の長さを凌ぐものとなっている。口縁部の端部および下半部と上半部の境には、円形浮文が、また浮文下には擬凹線文がみられる。
2. 形状は1とほぼ同様のものであるが、口縁部の端部は上方につまみ上げず、面を形成しない。また文様等は加飾されず、器面には縦方向のヘラ磨きが施される。
3. 脚部と坏部の接合部より直線的に延びる坏下半部と、短くゆるやかに外反する口縁部を持つ、中空の高坏である。坏部口縁の下半部には、擬凹線が施された後、円形浮文上竹管文が施されている。坏下半部の外面には、縦方向の細かなヘラ磨きが、また内面では上半部に横方向のヘラ磨きが、下半部にヘラ削りの後、縦方向のヘラ磨きがみられる。脚部の外面には、若干ではあるがヘラ削りの痕跡がみられる。
4. 形状は2同様のもので、坏下半部に比してその長さは、上半部がかなり凌ぐものである。
5. 坏部の形状はほぼ1同様のもので、長さで上半部がやや下半部を凌ぐものである。脚部は、脚柱部と裾部との屈曲は明瞭なものとなっている。1同様に加飾の状態も顕著である。
12. 椭状に弯曲した坏部と、短い脚柱部に屈曲して平たく開く裾部の脚部を持つ。調整は、内外面ともに剥離が激しく不明である。

壺

6. 外反しながら広がる口縁部のみであるが、その端部は大きく拡張し、端面に円形浮文を付け加飾している。口頸部の外面には縦方向にヘラ磨きが施される。
7. 球形の体部に6同様に大きく外反する口縁部がつくものである。口縁端部はやはり拡張させて、円形浮文で加飾が施される。口頸部外面には縦方向のヘラ磨きが、体部には叩き目がみられる。内面は横方向のナデによる。
15. ゆるく外反しながら延びた口頸部に、短く直線的に外反する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部は円形浮文で加飾されている。
16. 「く」の字状に外反する口頸部に、強い稜をもって短く外反する口縁部を持つ二重口縁壺である。口縁部には二段にわたって円形浮文で加飾している。

甕

8. やや細長い卵型の体部に短く外反する口縁部を持つものである。器高の約1/3を占める逆円錐台部には、突出した輪高台の平底がつく。外面の叩き目は同一の原体を使用しているものと思われる。
10. 8同様にその重心が体部のほぼ中央にあるもので、口縁部は「く」の字状に外反し、やや端部を外折している。底部は突出した平底である。
11. 8、10同様に重心は体部の中央にあるものだが、その形状は球形状となっている。器高の約1/4程度の逆円錐台部は粘土盤を貼りつけただけの平底の底部を持つ。逆円錐台部と接合部以上では明らかに叩き目の原体は異なっている。
13. 口縁部のみであるが、前述した甕と同様の胎土を呈するが、わずかに残る叩き目がそれらに比して細かいことと、器壁をやや薄手に整形することを意識しており、庄内甕を模倣したものと考えられる。作りは粗い。
14. 口縁部は、直線的な「く」の字状に外反し、端部をやや上方につまみ上げられている。体部の内

6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置

面はヘラ削りによって非常に薄く仕上げられている。外面には細かい叩き目が施され、茶褐色系統の色調を呈する。

20. 口縁部は欠損しているが、球形の体部と割合を多く占める逆円錐台部に輪台部の上げ底がつくものである。外面の叩き目は同一の原体によるものと考えられる。

21. 底部のみの出土であるが、底部は円盤状の粘土を貼った丸底のものである。外面の叩き目は、弥生第V様式系統のものである。

鉢

9. 重心が下半部にある球形の体部に、短く外反する口縁部を持つ大型の鉢である。底部は突出した平底で、外面の調整にはヘラ磨きが施される。内面には、口縁部が横方向のヘラ磨き、体部には「ナデ上げ」による。

17. 逆円錐台形を呈し、上がりぎみの平底がつく直口の鉢である。器面はナデによる調整が施される。

18. 突出した平底と半球状の体部に、有段口縁がつくものである。口縁部の内面には若干のヘラ磨きがみられる。

19. 逆円錐台形の半球状の体部に短く「く」の字状に外反する口縁部がつく。底部は上がりぎみの平底である。器面にはヘラ磨きがみられる。

6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置

以上述べてきた、各遺跡より出土した古式土師器の様相と、小阪遺跡出土土師器の様相を概観し、その前後・並行関係を究明していきたい。特にここでは、小阪遺跡で検出されたG地区の土坑40、溝30-a、溝32出土遺物、F地区溝24出土遺物をとりあげ、2・3の問題点を指摘し、その位置づけを行いたい。

なお、その編年的指標とする土器としては、一瀬和夫氏がその編年的基準として取り上げ、分類されている、高坏A型式¹²⁾をみていきたい。従来、古式土師器の編年的作業を行う基準といえば、その出土量の豊富なことと、全時期にわたって普遍的に見られることなどから、資料として甕が取り上げられ、それを軸として論究されることが一般とされてきた。こうしたことから、現在、大和・河内地域では「庄内甕」を標式としたかなりの精度を極めて分類されている。また、それらと共に出土する他器種の編年的な位置づけも、最近では詳細さをもって論じられてきている。このような中、和泉においては出土する甕の様相は、先に述べた両地域との様相とはかなり異質なものとして展開している。従って一瀬氏の述べるように、モードに敏感であり、その形態的特徴の受け入れやすさと在地生産性の高い高坏を、編年分類上の基準資料として取り上げ、さらにその変遷を分析し、他器種をそれに組み込んでいくことに基本的には同意するものであり、その変化は当地域においても充分に活用可能なものといえる。しかし即、氏の分類に、当地域の各資料が組み込まれるものではないことは当然であり、当地域でのより詳細な分類作業が進められてこそ、それらの詳細な分析が可能となってくる。従ってここでは、あくまで氏の分類を認識的なものとして取り上げ、編年する上で一つの標式としておきたい。

G地区土坑40出土土器

本土坑からは、下層より一括して甕、壺、高坏が出土している。これらの土器は全て在地産のもので、甕には弥生系の長胴粗製のものがみられる。これらの資料は、内容があまりにも乏しく、様相を確認で

きる器種が甕のみであり、その時期等を究明するには慎重にならざるを得ない。しかし、船尾西遺跡 S G - 001¹³⁾出土の甕に同様の長胴粗製の甕が含まれており、唯一、本土坑出土土器解明への基準となり得るものである。

溝30-a 出土土器

溝30-a 出土土器は、その様相としては先に紹介した府中遺跡 1号住居址出土遺物に比べ、新しい様相を呈し、豊中遺跡出土土師器より古相の状況を持っている。府中遺跡ではあまり散見することのできなかった、庄内系の有段高坏が豊富に出土していることや、直口壺および二重口縁壺などは全て無飾となっている。なお、甕の大半は相変わらず弥生第V様式系統の甕が主流を占めるものの、庄内式甕が甕全出土量の2割を数えており、府中遺跡などと比較しても、圧倒的にその出土量は多くみられる。また、庄内式甕を模倣したと思われる在地産の甕も多くみられるようになっている。

溝32出土土器

出土した土器はあまり多くなく、時期を判断する上では慎重にならざるを得ないが、1点だけ出土している高坏A型式の破片を基準として検討するならば、庄内期の古段階に属するもので、先の溝30-a 出土土器より若干古相を呈するであろう。

溝24出土土器

溝24より出土した土師器は、先に紹介した東雲遺跡溝-1出土の土師器より古相を呈し、豊中・古池遺跡河川状遺構¹⁴⁾より出土した一括土器に比べ新相を呈している。小阪遺跡溝24出土の甕は、庄内型甕および布留系の甕が弥生第V様式系甕と共に伴して、甕全体の約1/3を占めている。これに対して、豊中・古池遺跡では、布留系甕および布留式甕がまったく出土していない。また東雲遺跡では、庄内式の甕もみられるものの、口縁部内面が肥厚する甕の出土することや、小型丸底壺に新しい形状を呈するものが現れている。

ただし、東雲遺跡出土土師器とはそのこと以外ではあまりその出土品の状況に大差はない。

以上のことから、記述した各遺跡出土の古式土師器をここでさらに比較し、並べてみると以下のようなことが考えられる。

古相順に並べるならば、次のようになる。

- | | |
|------------|-------------------------------|
| 1. 府中遺跡 | 第1号住居址出土土器 |
| 2. 小阪遺跡 | 溝32出土土器 |
| 3. 小阪遺跡 | 溝30-a出土土器 |
| 4. 豊中遺跡 | 大溝出土土器 |
| 5. 豊中・古池遺跡 | 河川状遺構出土土器 |
| 6. 小阪遺跡 | 溝24出土土器 |
| 7. 東雲遺跡 | 溝-1出土土器 |
| 8. 船尾西遺跡 | 井戸S G - 001出土土器、小阪遺跡 土坑40出土土器 |

6. 小阪遺跡出土土器の様相と占める位置

さらにこれに池上遺跡出土の土師器と、東雲遺跡溝-2出土の土師器および上町遺跡¹⁵⁾井戸出土土器を加えて検討し、これらの出土土器を基礎として弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての段階を大きくI～III段階に区分すると現段階では、次のようになるものと思われる。

1. 上町遺跡	井戸出土土器	(第I段階-1 弥生時代後期末)
2. 府中遺跡	第1号住居址出土土器(第I段階-2 庄内期古段階)	
3. 池上遺跡	出土土器	(第I段階-2～第II段階-1 庄内期中段階)
4. 小阪遺跡	溝32出土土器	(第II段階-1)
5. 小阪遺跡	溝30-a出土土器	(第II段階-2 庄内期新段階)
6. 豊中遺跡	大溝出土土器	(第II段階-2)
7. 豊中・古池遺跡	河川状遺構出土土器	(第II段階-2)
8. 小阪遺跡	溝24出土土器	(第II段階-2)
9. 東雲遺跡	溝-1出土土器	(第II段階-3 布留期古段階)
10. 東雲遺跡	溝-2出土土器	(第III段階 布留期新段階)
11. 船尾西遺跡	井戸S G-001出土土器、小阪遺跡土坑40出土土器(第IV段階 布留期新段階)	

以上、小阪遺跡出土土師器が、和泉北部地域における古式土師器の編年上で占めている位置を究明するところに主眼をおき、検討してきたが、あくまでこれらは大筋の流れであり、弥生第V様式→庄内式→布留式とみられる土器型式のなかで、具体的な編年を行えたものではない。さらに、上述したような出土状況および地点の様相が全く異なった各遺跡での出土資料を羅列していくことには、かなりの危険性が含まれている。しかし、大筋ではあるが和泉北部では、上述した変化をたどるものであることが想われる。今後、これらの各遺跡個々において改めて検討を加え、資料としては未だ少ない第I・III段階の資料の集積をまって、前後関係をより詳細な分類作業によって見通し立てるとともに、弥生時代から古墳時代での庄内式甕や布留式甕の流入が和泉地域でも個々にばらつきが確認できる実態を加えて、本地域におけるより精度の高い、移行期の並行関係と地域受容の実態を把握する必要性がある。

註

- 1) 田中 琢 1965 「布留式以前」『考古学研究』第12巻2号
- 2) 末永雅雄・小林行雄・中村春樹 1938 「大和に於ける土師住居跡の新例」『考古学』第9巻10号
- 3) 樋口吉文・土山健史 1984 「四ッ池遺跡第83地区発掘調査報告書」『堺市文化財調査報告書』第16集 堀市教育委員会
- 4) 樋口吉文 1980 「船尾西遺跡発掘調査詳報」『堺市文化財調査報告書』堺市教育委員会
- 5) 酒井龍一編 1976 「和泉における『伝統的第V様式』に関する覚え書き」『豊中・古池遺跡発掘調査概報』そのIII 豊中遺跡調査会
- 6) 木下正史・他 1980 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」III『奈良国立文化財研究所学報』第37集
- 7) 置田雅昭 1975 「大和における古式土師器の実態」『古代文化』第26巻第2号
- 8) 坂口昌男 1976 『東雲遺跡発掘調査概要』泉大津市教育委員会
- 9) 坂口昌男・原島麻実 1990 「泉大津市埋蔵文化財発掘調査概報8」『泉大津市文化財調査報告』20 泉大津市教育委員会
- 10) 石上 怡・他 1978 『大園遺跡・古池遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
- 11) 灰掛 薫 1978 『府中遺跡発掘調査概要・II』和泉市教育委員会
- 12) 一瀬和夫 1988 「久宝寺・加美遺跡の古式土師器」『八尾市文化財紀要』3 八尾市教育委員会文化財室
- 13) 4) と同じ
- 14) 5) と同じ
- 15) 灰掛 薫 1975 『上町遺跡発掘調査概要』 和泉市教育委員会

第5章 小阪遺跡出土土器の問題点

— 初期須恵器の時代 —

森屋美佐子 [(財)大阪文化財センター]

1. はじめに

小阪遺跡から出土した古墳時代中期の土器には、いわゆる初期須恵器（定型化していないもの¹⁾）が多量にあり、また、それらに伴う土師器がある。ここでは、それらの一群の土器について見ていただきたい。

2. 土器の特徴

小阪遺跡では、地区により土器の特徴に若干の差異がある。それは、当遺跡が自然河川による影響を多大に受けその河川の流路により、大きくは3地区²⁾に分かれることからもうなづけるものである。

まずその1は、現石津川から現陶器川の間のA～D地区で旧石津川の流れの影響下にある地域でC地区の集落が位置する。その2は、現陶器川以東のE～H地区で旧陶器川の影響下にある地域であり、H地区の灰原が位置する。その3は、伏尾丘陵から旧陶器川へ流入する支流の影響下にある地域のI地区で伏尾遺跡の一端の掘立柱建物が位置する。

以上の事を踏まえて、土器を見るならば、以下のような特徴を見出せる。C地区の集落出土の土器とG地区の河川出土の土器・H地区の灰原出土土器を取り上げて、以下に、土器の概略を記す。なお、I地区の出土土器については、この時期の遺構に伴うものがなく割愛した³⁾。

1) C地区出土土器

まず始めに、小阪遺跡の集落が検出されたC地区から出土する土器について概略すると、次のようになる。

① 遺構出土の土器

住居址からは、4棟あるうちの住居4のカマド内から完形の須恵器の高坏が1点と、住居6の埋土から須恵器の無蓋高坏片が1点のみであり、他は土師器が出土している。

出土量がわずかであり、確とはしがたいが、土師器では高坏の占める割合が高く、韓式系土器の甌ないし小型平底鉢もしくは回転ナデを多用する須恵器の影響を受けた高坏がある。また、住居5・6のように甌が出土しているにもかかわらず、それに見合う甌が無いのも不思議な感がする。

なお、住居6から精製された粘土の塊が2点、住居5から鉄鏹が4点出土している。

井戸1出土の土器では、須恵器対土師器が、ほぼ1:1である。須恵器では、生焼けぎみの土釜形の坏身や二重口縁壺、焼け歪んだ短頸壺等がある。土師器では、布留系の内弯する口縁部をもつ甌に加えて弥生第V様式系の甌および須恵器の形態・調整を真似た甌や、やや長胴化した甌等があり、小型平底鉢も出土している。

土坑では、各土坑により様子が異なり、須恵器対土師器の割合でみると、土坑19では8:2、土坑8では3:7、土坑14では約1:1である。土坑5には韓式系土器の甌や瓦質の甌等があり、他の土坑からも小型平底鉢や甌等が出土している。

なお、土坑19からは土師器を真似て作った須恵器の高坏や静止波状文を施した短頸壺の蓋等が出土している。

2. 土器の特徴

溝では、溝8および溝17からは須恵器と土師器が出土するが、溝3と溝11からは実測可能な土師器が出土していない。前者からは土師器の形態を真似た二重口縁の大型甕や体部に格子叩き目を施す甕が出土しており、後者からは、定型化した蓋壺や甕が出土している。

なお、溝11からは、須恵質の無文当て具と石製勾玉が各1点出土している。

②河川1出土土器

右岸側と左岸側の遺物群で若干の差異があるが、おしなべて見ると若干土師器が多いようである。

右岸側の須恵器では、無蓋高壺に方形透かしが11個穿たれるものや菱形の透かしを穿つもの、ゲタ痕を残す双把手付き蓋、土師器を模した小型壺や甕、並行叩き目と格子叩き目を施した甕等がある。

なお、繩蓆文を施した甕の体部破片と思われるものもある。土師器には、布留系の甕に加えて回転ナデを多用する高壺、小型平底鉢、須恵器を模した大型短頸壺、平底の小型壺等がある。

左岸側の須恵器には、定型化した壺蓋や甕等に加えて、瓦質の大型鉢や陶質土器に似た造りの小型壺等がある。土師器には、布留系の甕に加えて須恵器を真似た甕および壺、小型平底鉢等がある。

遺物群上層の土器には、6世紀代の土器も若干混じるが、ほぼ、遺物群と同時期のものと思われ、須恵器には土師器を模した二重口縁甕や小型壺等があり、土師器には回転ナデを多用する高壺や二重口縁壺、小型平底鉢がある。なお、瓦質の直口壺もある。

なお、河川からは、格子叩き目や斜格子叩き目を施す土師器の体部破片が出土している。

以上、C地区出土の土器を全体的におしなべて見れば、須恵器と土師器の比率はほぼ1:1になり、須恵器では蓋壺および高壺で約半数を占め、壺が2割強を占め、甕は1割にも満たない。土師器では、高壺が4割近くを占め、次いで韓式系土器の小型平底鉢・甕が3割弱、甕が2割強を占め、壺は約1割である。

全体的に、小型品が目立つ。須恵器には、今まで陶邑では類例の無いものが多く、土師器を模した須恵器や稚拙な造りの須恵器、2~3mmの砂粒を多く含むものがある事や、焼きの甘い淡灰白色や淡青灰色をしたものや、断面暗紫灰色の焼きの堅いもの、瓦質っぽいもの等バラエティーに富むものである。

ほとんどのものが、未だ定型化していない過渡的な段階と考えられ、陶質土器の影響を直接に受けたというよりは、土師器の影響を色濃く受けた須恵器の一群と捉えることができよう。

また、土師器には、伝統的な布留系の甕が多量に出現する一方、韓式系土器の小型平底鉢や甕といった新しい器種が加わり、さらに、須恵器の技法であるロクロ使用による回転ナデや、叩き板や当て具を用いる土師器の一群の出現が特徴づけられる。

2) G地区出土土器

次に、G地区的古墳時代中~後期の河川8出土のこの時期の土器を見ると、以下のようになる。

①河川8下層出土土器

須恵器では、蓋壺の蓋は天井部が平坦な定型化したものがあり、壺身には、それに伴うものの他、各器種バラエティに富む。鉢・壺、高壺、器台等の口縁部の端部に共通した特徴があり、丸く終わらせるものと、わずかに外反し内傾する面をもつものがある。高壺には、有蓋の壺形の把手付きのものや、やや大型の器台形のものがある。器台には、やや小型の高壺形のものが目立ち、壺底部に凸線文を1条施すものもある。壺・甕の口縁部の端部は丸みをもち端部下に凸線文を1条施すものが多い。

体部の調整は、内外面ともに丁寧にスリケシを施すものと内面に半スリケシを施すものがあり、外面の平行叩き目のなかには、成形のためというよりは文様として意図的に螺旋状に施すものもある。頸は小型の壺形のもので口径が体径のおよそ2/3である。

土師器には、布留系の甕が残るもののその口縁部は退化傾向を示し、外反する口縁部をもち体部が球形のものがある。須恵器を模した甕や鉢、高坏、頸等があるが、縄蓆文や平行叩き目を施すものがある。

②河川 8 上層出土土器

下層と同様の傾向を示すが、須恵器の甕に装飾性に富むものが出現する。土師器の甕に内弯する口縁部をもちながら、球形の体部に平行叩き目を施すものや、形態は須恵器に似せながら、体部の調整は外面ハケメ、内面ヘラケズリと土師器の技法をもつ壺や土師器の小型壺に穿孔して頸としたもの等がある。

③その他

他に、奈良～平安時代の河川 6 等からも、この時期の土器がわずかではあるが出土している。

C 地区の集落出土の土器と同様にバラエティーに富むもので、陶邑では類例のないものが多い。しかしながら、C 地区の土器と共に通するものが少なく、河川出土のため確とはしがたいが、時期差ないしは地点差および系譜差が考えられよう。

3) H 地区出土土器

さらに、H 地区の灰原出土の土器の一群に、この時期に属すものがわずかにある。

須恵器の蓋坏の蓋には、「ハ」の字形に開く口縁部に偏平な天井部をもつもので、天井部の外面に回転ヘラケズリないしは回転カキメを施すものがあり、それに対する坏身には、やや偏平な坏部に内傾する口縁の端部が丸みをもつものと、凹面をもつものがあり、坏底部外面に静止ヘラケズリ、回転ヘラケズリ・ナデ・カキメ等を施すものがある。他に、鉢・碗の類、高坏、頸、器台、壺、甕等がある。

以上の須恵器に共通する特徴は、概して、2～3mmの砂粒を多量に含み、暗緑灰色ないしは青灰色をするもので、やや焼きが甘い感がする。蓋坏および鉢・碗の類の外面に静止ヘラケズリを多用し、高坏、器台、壺、甕等に断面三角形の凸線文を多用し、丁寧な櫛描波状文を施す一群である。壺・甕の体部の調整に丁寧なスリケシを施すものもある。しかしながら、甕でみると口縁部の端部下を強くナデを施すことにより、見せ掛けの凸線文を施したように見えるものがあり、一考を要する。

以上、各地区出土の土器の特徴を概略してきたが、これらを総括して見た場合に、次の様な事が考えられよう。

i) 小阪遺跡の C 地区の集落から出土した土器から前述のような特徴を見出せたが、これらのことにも加えて、住居から水疎した粘土塊や工具（鉄鎌）、溝から須恵質の當て具等が出土していることからも、須恵器を製作していた集落と捉えることができよう。しかも、この集団は、前述の土器の特徴から類推して、すでに土器作りを知っていた集団、すなわち、土師器製作集団の須恵器生産への参入と考えられよう。さらに、このことは陶邑の中における須恵器生産の過程を如実に表していると思われ、韓半島からの窯窓導入による技術指導が一段落し、国内需要に伴う生産に向けて生産拡大する過渡期

3. 土器変化の細分

的な時期とおりしも一致すると考えられる。以上のこととは、集落の規模が小さく、不安定な河川の自然堤防上に立地すること等をも考え併せると生産→流出の窓口キャンプ場として頷けるものである。

ii) G地区の土器に関しては、河川出土のため一括性に欠けるが、須恵器では、未だバラエティーに富む器種があり、C地区の土器に時期的に重なりはするものの、鉢・壺、高坏等の口縁部の形態に丸みをもつものから、わずかに外反し内傾する面をもつものへと新しい要素が加わることから、時期幅があるようである。このことは土師器に関してもいえ、布留系の甕が残りはするものの、その口縁部が退化傾向にあり、それに加えて、外反する口縁部をもち球形の体部の甕が加わる事や、須恵器の技法を真似た土師器の体部の調整の叩き目に、格子叩き目を施すものが少ないと等からも頷けるものである。

しかしながらこの時期、土師器甕の長胴化が河内地方や四ツ池遺跡等でうかがえるが、ここ小阪遺跡では後出するようである。

iii) H地区の灰原に関しても、二次堆積資料のため一括性に欠けるが、バラエティーに富む器種がある。特に蓋坏に特徴があり、G地区の奈良～平安時代の河川6からも同様の坏蓋が出土しており、この灰原からの流出遺物であろう。全体的に見て若干の時期幅があるようであるが、陶器川の支谷でも初期須恵器の時期に窯が築かれていたことを裏づけるものである。

以上の土器の差異は、前述したように、C地区が石津川と陶器川の合流点に位置し、G・H地区が陶器川およびその支谷に位置することからも、陶邑の中における小地点差および集団系譜差として捉えることもでき、しかも、大きくは時期差に起因するものとも考えられる。

3. 土器変化の細分

そこで、これまで説明してきた土器の特徴を、土器の形態変化を縦軸に遺構出土の一括遺物を横軸に置くならば、次の様な分類ができよう。

1) 土器の形態変化

土器の形態変化を須恵器でみれば、大きくは、蓋坏および高坏、鉢等の類の口縁部の端部で捉えることができる。それは原則的に、丸みをもつものおよび尖りぎみに終わるもの→わずかに外反し内傾する面をもつものや内傾する面をもつもの→内傾する段をもつものへと変化していく様子がうかがえる。

もっとも、旧いタイプのものは残ってくるものとして、いかに新しい要素を拾い出すかが問題となる。

2) 土器の時期区分

以上の土器の微細な形態変化を遺構出土の一括遺物で主にみた場合に、大きくは、2段階に区分できる。

第一期

これまで培われてきた土師器作りをベースに新技術を導入して須恵器作りを始めたため、土師器に似せた須恵器(898.1010.1115.1028等)が出現したり、器形もバラエティーに富み器壁の厚さも一定せず、その焼きも均質でなく灰白色、青灰色、青緑灰色、茶灰色、暗灰青色、暗紫灰色等々様々である。

土師器にしても、主要なものは前時代的なものを受け継ぎながらも、韓式系土器の甕や小型平底鉢を使用し、須恵器の技法を取り入れた土師器をもつくり出している。

さらに細かく見れば、古・新と2区分できる。

古・新の差異は、須恵器の小型のもの（特に高壺、鉢等）に顕著な特徴を見せる。古段階の須恵器は、口縁部の端部がやや尖りぎみに丸みを持って終わるか平坦面をもつものである。新段階の須恵器は、口縁部の端部近くでわずかに外反し内傾する面をもつもので、壺・甕の類では口縁部の下部に付く凸線文より端部にかけて器壁が薄くなる傾向がなくなり、厚みを変えずに端部が丸みをもって終わるもののが増加する。

土師器は、高壺に顕著な差異が見出される。古段階のものは塊形ないしは外反する壺部の口縁端部が丸みをもち、屈曲する壺部をもつものは、面をもつ。新段階のものは、塊形および屈曲部をもつ壺部の口縁部の端部がわずかに外反する傾向を見せ、外反する口縁部をもつ壺部のものは端部が面を持つようになる。甕でみれば、布留系の口縁部が内湾ぎみに斜め外方へ伸び、端部が肥厚し内傾する面を持つものが、古・新共に主流をなすが、古段階のものは縦長な球形をし、新段階のものは縦長な球形でやや肩の張るものである。体部内面のヘラケズリの範囲が減少する傾向をみせる。

第二期

須恵器作りに慣れてきた段階で、器厚の均質化や調整技法の丁寧さ、さらに、焼成も一定しており、前段階のように色調も色々あったものから、青灰色系から青緑灰色系のものが増える。器形は未だバラエティーに富んでいるが、蓋壺等規格化されたものが見受けられ、定型化への段階である。

土師器を甕でみると、やや縦長な体部から球形の体部になり、全体的に寸詰まりの器形になり、口縁部も外反するものが主流をなし、須恵器と土師器が結合して作られたような器種(1503.1504)が出現する。

さらに細かく見れば、第一期と同様に古・新と2区分できる。

古段階のものは数量的に少なく、確実な特徴を見出せ得なかつたが、須恵器の甕で見れば口縁部の端部が明確な面をもち、わずかに垂下させるものがあり、頸部と体部の境目の屈曲が明瞭になる。体部はやや肩の張る球形になる。新段階のものは、蓋壺の口縁部の端部に内傾する段をもつものが出現し、天井部や底部がやや偏平になる。小型の器種の口縁部の端部に内傾する凹面をもつものがあり、甕の口縁部の端部が面をもちわずかに上下に拡張させるものが出現する。

土師器も須恵器と同様に古段階のものが少なく、甕でみれば、布留系の甕の口縁部の開きが大きくなり、端部が肥厚するものが減少する。体部はやや球形に近くなり、体部内面の調整も指ナデのみを用いるものが出てくる。

新段階の土師器は、高壺にハケメを多様するようになり、壺の口縁部の端部は須恵器と同様に内面に凹面をもつものが出現する。韓式系土器の小型平底鉢や叩き目を施す甕の口縁部の端部が面をもち内面に凹面をもつものが出現する。布留系の甕は、体部が球形ないしはやや偏平になり、小型化する。

以上の段階を設定したが、それらを、従来の編年⁴⁾に当てはめてみれば、つぎのようになる。

窯編年

• TK73 • • TK216 • ON46 • TK208

小阪遺跡

• 第一期 • 第二期
• 古 • 新 • 古 • 新

4. おわりに

陶邑古窯址群で一番古いとされているTK73型式並行の土器とも思われるものもなかにはあるが、総じて、TK73型式の土器よりは、新しい傾向を読み取ることができよう。

なお、小阪遺跡出土の土器で見るならば、TK208型式をも含めて定型化しつつあるものの、未だ過渡期的な様相が色濃く残っていると理解できよう。

4. おわりに

以上、小阪遺跡出土の古墳時代中期の土器について見てきたが、何分にも限定された資料範囲の操作であるため、推論を多く挟んでしまった感がある。遺構出土のものが少なく、河川出土のものに良好なものが多かったため、一括性に乏しいものとなってしまったが、同時期の集落資料の増加が進めば、小阪遺跡出土の土器の占める位置が確実なものとなると思われる。

今後、他遺跡出土の土器との比較検討を進めて行きたい。

この小稿を書くにあたり、一瀬和夫、岡戸哲紀、小田富士雄、尾谷雅彦、武末純一、田中清美、中井貞夫、萩本 勝の諸氏に御助言、御指導を賜った。記して、感謝したい。

註

- 1) いわゆる初期須恵器と呼ばれているものは、定型化していない土器を指すが、小阪遺跡出土の土器を説明するには、定型化した段階（TK208型式）を含めた方が理解し易いと思われるため、本稿ではそれをも含めて記述している。
- 2) 小阪遺跡の地理的分類は、高橋 学氏の御教示による。本稿 第II部自然科学編第2章を参照されたい。
- 3) 小阪遺跡I地区出土遺物は、伏尾遺跡からの流出遺物が多く、(財)大阪府埋蔵文化財協会 『陶邑・伏尾遺跡』1990 を参照されたい。
- 4) 従来の須恵器の編年は、窯の編年が主で、集落出土の土器による編年が余りなされていなかったので、小阪遺跡の遺物と並行関係を求めようとすると違和感があり、独自の編年を組み立てざるを得なかった。しかしながら、小阪遺跡出土の遺物のみでは、全体を埋める資料が得られないのも事実である。TK73型式と小阪遺跡の第一期との空白期を埋めるものとして、最近検出された大庭寺遺跡の灰原出土の土器があげられよう。

さらに、土師器との共伴関係を追うには、須恵器のみを出土する窯の資料では不可能である。また、地域によっては須恵器の出現に時間的な差異があり、土師器と須恵器の共伴関係を明確にするには、今少しの時間がかかりそうである。

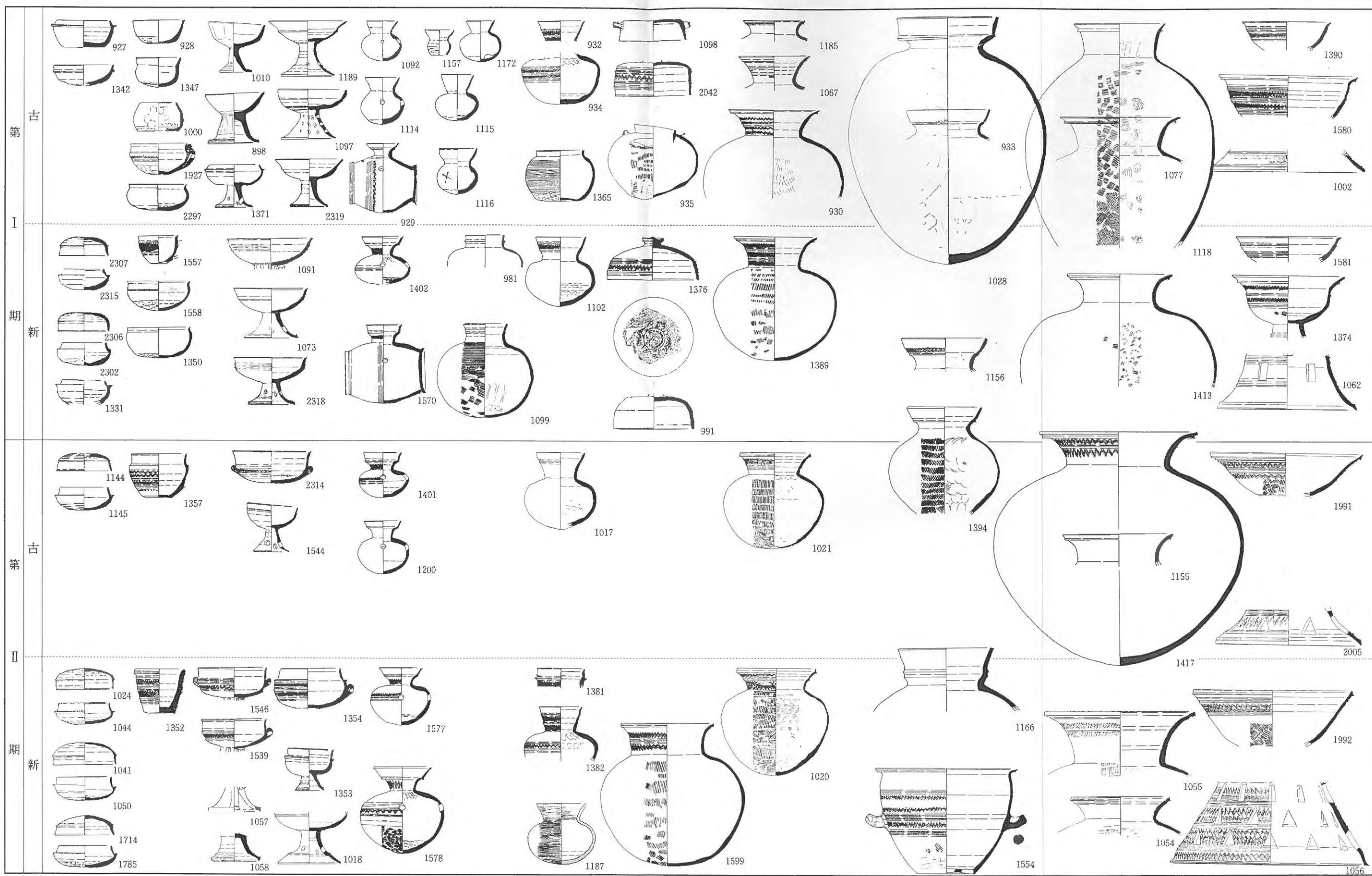


Fig. 481 小阪遺跡出土須恵器分類

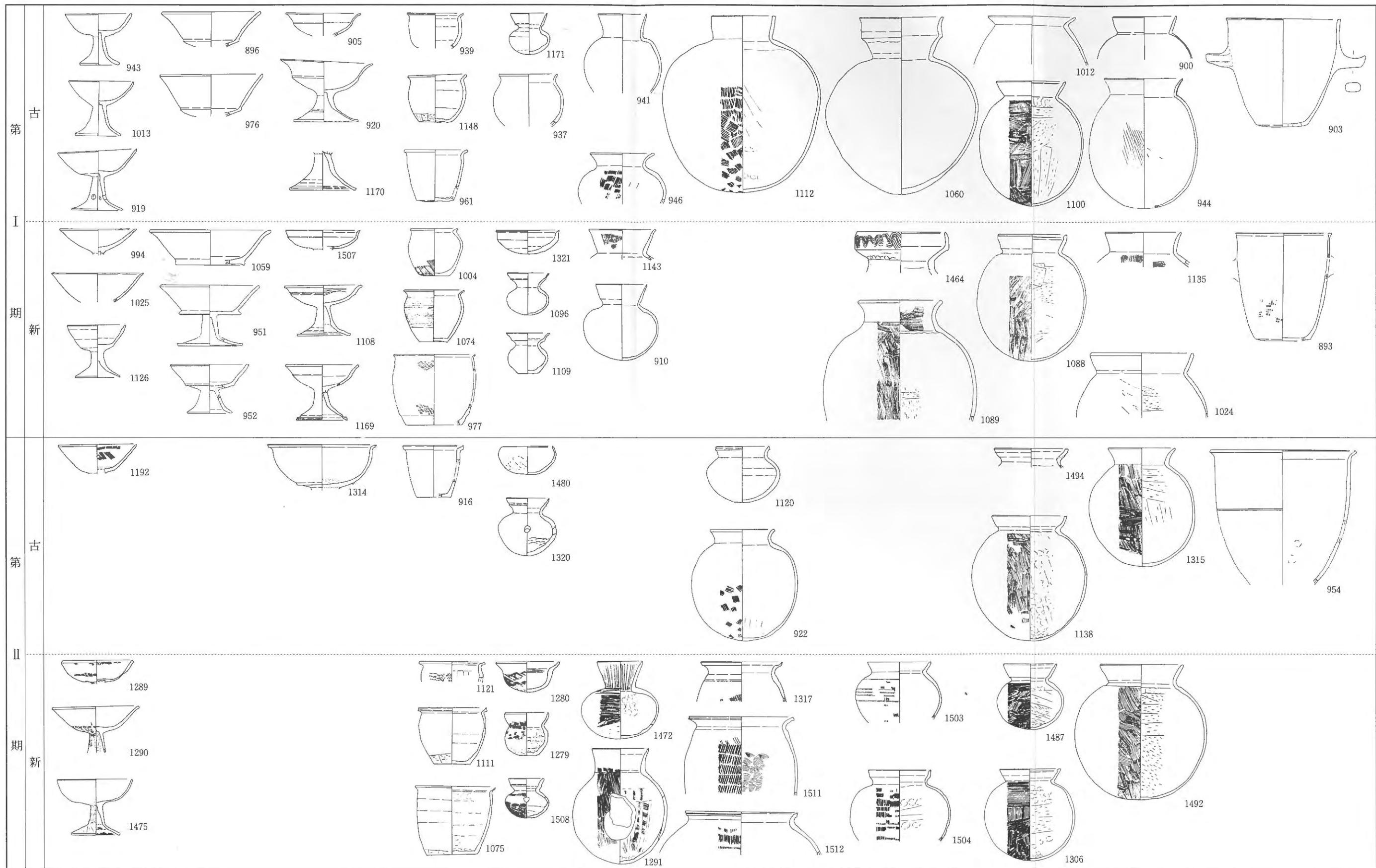


Fig.482 小阪遺跡出土土器分類

第6章 小阪遺跡出土の高坏型器台について

尾谷雅彦 (河内長野市教育委員会)

1. はじめに

陶邑の北側の丘陵端部に位置する小阪、伏尾、大庭寺の各遺跡から、現在まで調査された陶邑の窯跡出土の初期須恵器とは様相を異にする一群が出土している。これら的一群はまた各遺跡ごとに様相の相違を示している。

これらの須恵器の実態については、調査者により解明されていくと思われるが、共通の認識としてはこれらを生産した窯が現時点では未調査のまま遺跡近くに存在すると考えられているようである。

今回の本遺跡の調査から多くの初期須恵器が出土している。これらの出土品のなかで、調査者がヘルメット型の器台と称している須恵器の高坏型器台が出土している。この器台については筆者が知る限りでは国内での類例は見出せない。ただ、この器種に近似する器台が朝鮮半島の南部で出土しており、系譜をたどることができる可能性がある。当遺跡の初期須恵器の半島での系譜をこの器台からたどり、併せて半島と国内出土の陶質土器及び初期須恵器の高坏型器台について若干考えてみたい。

2. 出土の器台について

まず、今回出土の器台(Fig.483-4)について再度、観察したい。

① 器形

当器台は河川下層から出土している。口径24cm、残存器高13.5cm、台部高10.5cm、脚部基部径6.5cmを測る。

台部は脚部基部から内湾しながら外傾し、口縁部は外湾しながら外傾する。断面形は逆S字形を成す。口縁端部はやや丸みをもった面を成しながら終わる。口縁部に1条、体部に2条の凸線文が巡る。この凸線文によって2条の文様帯が構成され波状文が施されている。

脚部は欠損しているが基部付近が残存している。基部径は口径に比較して小さく、基部から直線的に広がっていくようである。

② 類例

当器台は、今まで出土例のある高坏型器台に比べ小型で台部が深く、口縁部の外形が大きく逆S字形を呈する特徴をもっており、前述のとおり国内での類例は筆者が知る限りない。

この為、この器形の系譜を半島南部に求めた。

玉田古墳群一慶尚南道陜川郡

陜川ダム建設に伴う一連の緊急発掘調査の一つとして慶尚大学校博物館が調査したものである。調査の結果、多くの成果を挙げ金銅製の冠帽や胄や胡ろくなどが出土している。

この古墳群の出土品の中で、調査者によって爐形器台に分類されている器台が木槧墓の17号墳・27号墳・54号墳などから出土している。

17号墳 (Fig.483-1) 直口短頸壺と共に伴している。台部は体部が内湾しながら外傾し、口縁部は大きく外反する。体部と口縁部の境に2条、口縁部の中位に1条の凸線文が巡る。また、台部と脚部の境

2. 出土の器台について

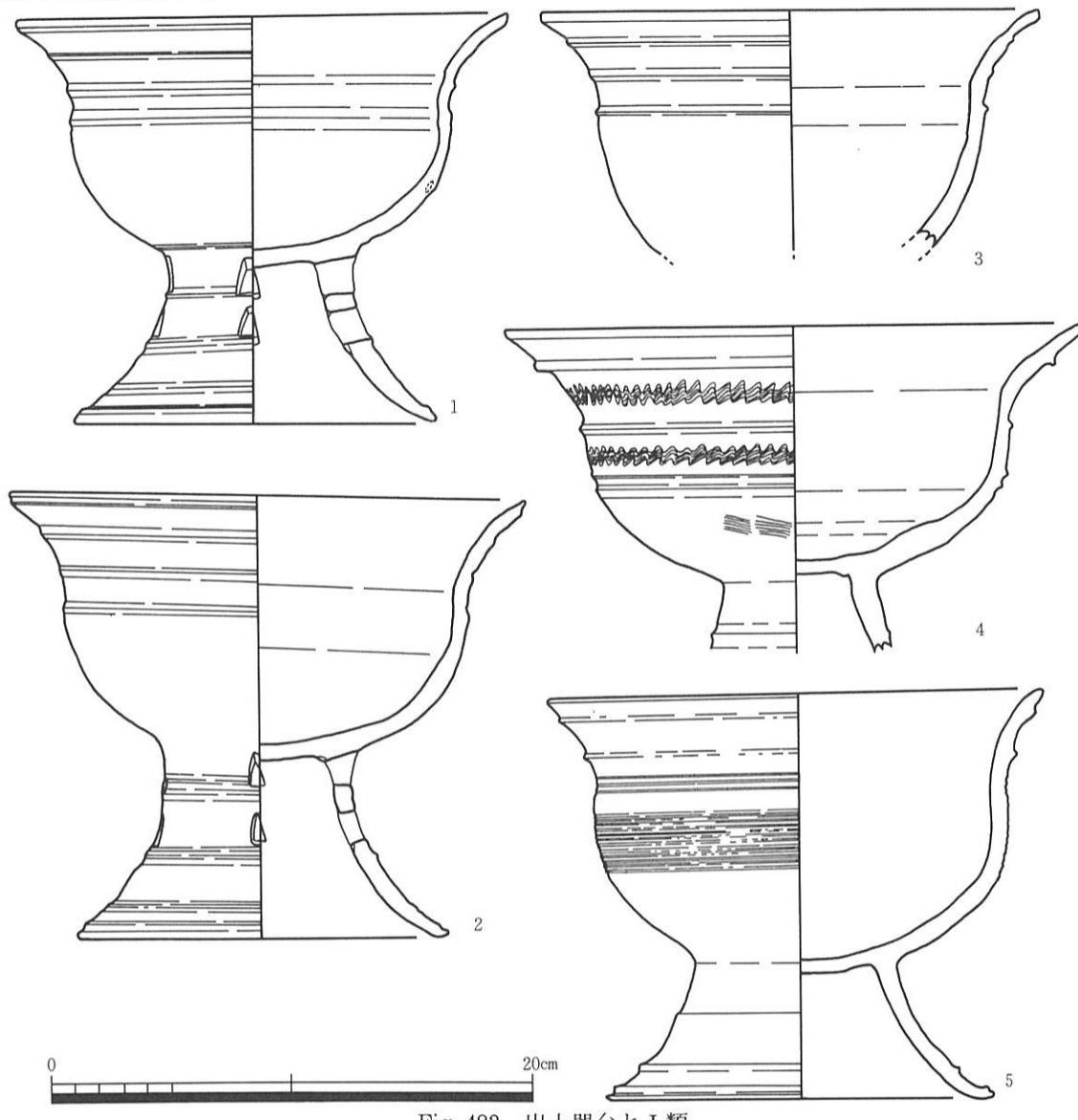


Fig. 483 出土器台と I 類

にも 1 条巡っている。脚部はやや外反氣味に広がる。脚部は 3 条の凸線文によって区切られ、最上段と上から 2 段目に三角形の透かしが 4 箇所上下 1 列に配されている。口径 21cm、器高 17cm、脚部径 14.5cm。

27 号墳 (Fig. 483-2) 17 号墳と同様であるが体部から口縁部にかけての凸線文は等間隔に巡らされ、口縁端部はやや鋭い。口径 21.5cm、器高 18.5cm、脚部径 15cm。

華明洞古墳群 慶尚南道釜山市釜山鎮区

5 号墳 (Fig. 483-3) 円底壺などと共に出土した。脚部など欠損している。台部体部はあまり内弯せず口縁部に至る。口縁部は外反し口縁端部は面を成す。口縁部には 3 条の凸線文が等間隔に巡っている口径 20.8cm、残存高 10cm。

福泉洞古墳群 慶尚南道釜山市東萊区

釜山市立博物館・釜山大学校博物館・東亞大学校博物館によって調査され、馬冑や多量の陶質土器など多大な調査成果が上がっている。

東亞大 10 号墳 (Fig. 483-5) 筒型器台と共に出土した。台部体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は外傾する。体部にはカキ目が見られ、口縁部には 2 条の凸線文が巡る。脚部は台部に比較して低く、

透かしを持たない。脚端部近くで2条の凸線文が巡る。口径20.5cm、器高17cm、脚部径16.5cm。

上記の器台は、共通して台部が内湾しながら外傾し、口縁部は体部の1/3を占め、大きく外反する台部体部から口縁部にかけて凸線文によって3区分されていることである。当遺跡出土品にはその部分が文様帶として波状文が施されていることが特徴であり、他の出土品には文様を施した例はない。脚部は台部と比較して低い特徴をもつ。

③ 爐形器台について

この特徴をもつ一群の器台は、瓦質土器段階の爐形土器が陶質土器発生前後に口縁部が体部最大径を凌駕し、器台として認識された爐形器台の一部である。（趙 1986）や（宋・安 1986）の研究によれば、爐形器台は4世紀代に入り地域的特徴をもつようになる。それは、（趙 1986）によれば、瓦質土器の爐形器台が古式陶質段階¹⁾になって東部慶南（Fig.484-1）・三東洞（Fig.484-2）・西部慶南²⁾

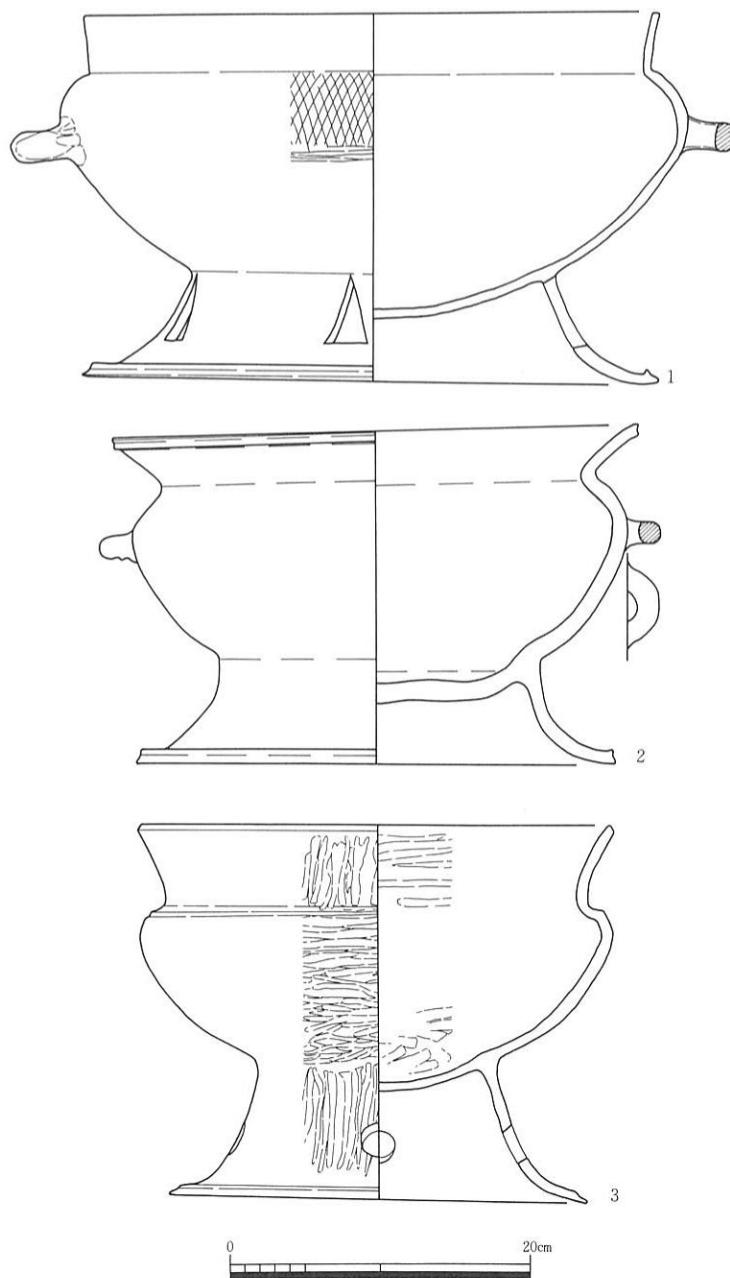


Fig.484 爐形器台

（Fig.484-3 及びFig.483・485）の3つの地域色が現れる。それは、従来陶質土器の地域色がないとされていた古式陶質土器段階に爐形器台については地域色がみられ、他の器種についても再考が必要であると言うことである。また、（宋・安 1986）によれば、4世紀代にはいり、釜山・金海地域群と西部慶南地域群とに認識でき、三東洞遺跡出土群は特徴的には釜山・金海地域群とは差異があり、西部慶南地域群に属すると言うことである。両者とも、爐形器台を含め他の器種にも古式陶質土器段階に地域色を認めている。

上記の状況のなかで、この一群は西部慶南タイプの爐形器台に属するものである。この西部慶南タイプの爐形器台は、大きく4類に分類される。A類—図示した大坪里出土品（Fig.485-1・2）のように台部体部が内湾気味に大きく外傾し、肩部は狭いが強調され、口縁部が台部の1/2を占めるもの。B類—鴨寺里出土品（Fig.485-3）のように外形はA類に近似し、口縁部に凸線文が巡るもの。C類

3. 日本と半島の高坏型器台について

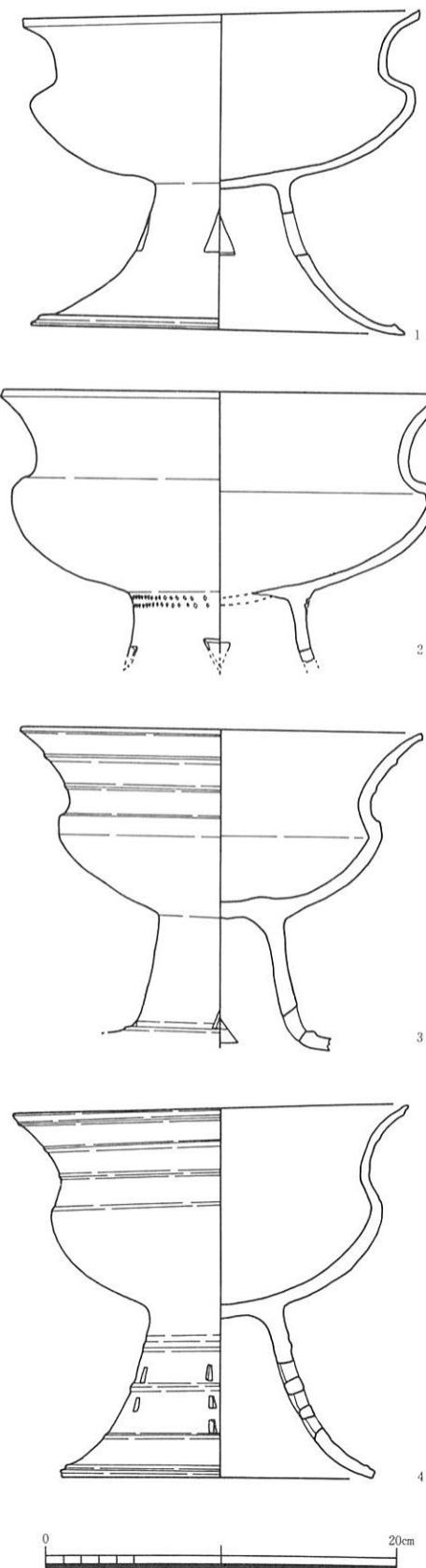


Fig. 485 西部慶南タイプ爐形器台

—鶴寺里出土品 (Fig. 485-4) にみられるように台部体部が半球形に近く口縁部が台部の1/3を占める。D類— (Fig. 483) 台部体部は内弯しながら外傾し、口縁部は大きく外反する。口縁部は台部の1/3を占める。

編年的には、D類の華明洞5号墳及び玉田17・27号墳の年代がまず問題となろう。玉田17・27号墳については（趙 1988）によれば玉田木柳墓I段階に相当する。特に17号・27号については華明洞5号墳の年代観から4世紀末から5世紀初めと考えられている。

この編年及び地域的特徴が当器台に直接該当するかは、半島及び日本での器台の状況について見なければ判断し難い。ただ、系譜的には器形上からまた時期的にも関連性を追うことが可能であると考えられる。

3. 日本と半島の高坏型器台について

前述のとおり、この器台はその系譜を韓国研究者の研究に照らし合わせれば半島南部の慶尚南道西部に求められる可能性が高い。そして、この器台の日本及び半島との関係で位置づけるために半島南部、国内出土の器台について大略的ではあるが包括的に若干考えてみたい。

現在、陶質土器、初期須恵器の器台は大きく筒型器台³⁾と高坏（鉢）型器台に分類される。今回、器形的にも高坏型器台が問題となるので、この器台について更に細分類し、半島の陶質土器と初期須恵器との関係を明らかにしたい。

高坏型器台の一部については、韓国研究者は鉢型器台⁴⁾とも称している。

①分類

I類—口径が20cm、器高が18cm前後の小型の器台で、台部の体部が内弯し、口縁部が大きく外反する。台部は深く、器高の2/3を占める。体部外面の装飾例は少ない。脚部は外弯気味に広がる。前章でのいわゆる西部慶南タイプの爐形器台⁵⁾の範疇に含まれるもの。前述のようにAからD類に細分される (Fig. 483-2・3)。

II類—台部の体部が内弯し丸みをもつ。口縁が短く外反する。脚部は外弯気味に広がる。脚部と台部の器高の比率は脚部が1/2以上を占める。このII類は特に台部外面に複合鋸歯文などの櫛描きの集線文などの文様や装飾が

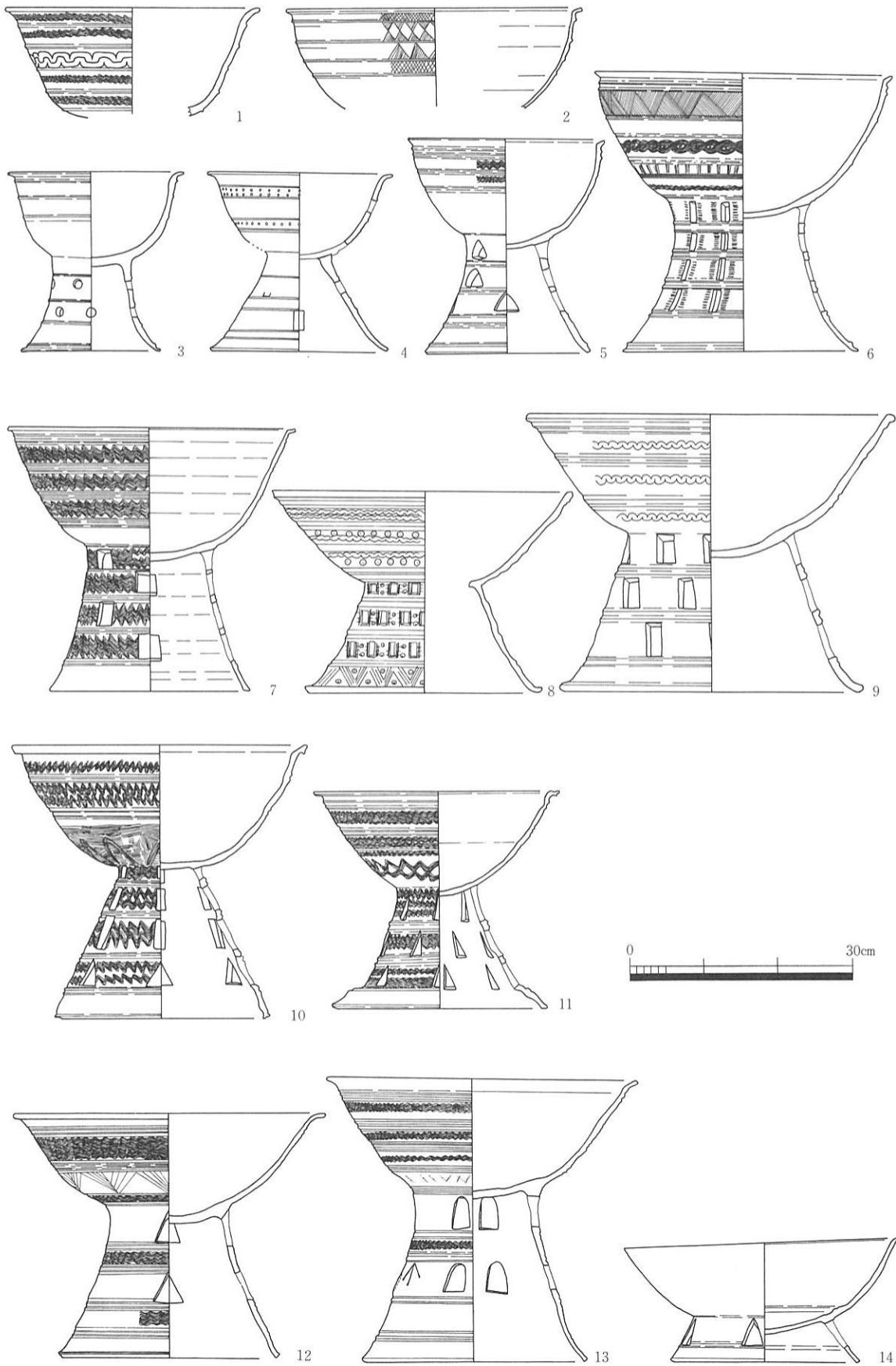


Fig. 486 高坏型器台II類～VI類

第7章 古墳出土の埴輪と初期須恵器

一瀬和夫（大阪府教育委員会）

1. 古墳共伴資料としての初期須恵器

小阪遺跡ではそれほど一般化する以前の須恵器が多く出土している。それらには従来、認識されていない器種や必ずしも定型化していないもの、土師器の形態と類似するものなどがある。

こうした一群の須恵器はいわゆる初期須恵器としてとらえられるもので、器種はバラエティーに富んでいる。これらは須恵器の生産体制が大規模化し、一定の器種組成とそれぞれが系列化して認識できるようになる以前の段階のものとして位置づけることが可能なものが多い。

小阪遺跡のものと同様な性格をもった近在する大庭寺遺跡の集落・窯出土資料¹⁾やTK73、TK85、TK87、TK305、TK306、TK216号窯²⁾などの出土資料がまず問題となる。この近在、類似するより直接的な初期須恵器資料の比較、検討は言うまでもない。しかし、これらをもってしても集団、地域差、時間差の評価が分類目的によって様々に展開する場合が多く、TK73型式といわれるものの前後の資料をどう解釈するのかによっては新旧の関係が逆転する可能性を多分に残している。特にTK73型式の前段階に重複性のある類似した、しかもまとまった資料が他地域においても量的に見出しにくい現状にあって、その仔細な位置づけはそのままに据え置かれている。

初期須恵器の直接かかえる問題は、朝鮮半島からの土器移入、窯窯技術の導入、従来の在地土器群のセットへの影響、土器の需給体制の変容、生産地の動向、生産基地と周囲への波及といった様々なものがある。こうした土器の直接的な課題は他項に委ねることとして、ここでは土器以外の要素と組み合わせることによって、初期須恵器の変化の過程がどのようにとらえることができるのかを論じたい。

その組み合わせの要素として、古墳墳丘に周る円筒埴輪の変化をとりあげたい。円筒埴輪の生産上の大きな画期は、黒斑の出現率が非常に少なくなる窯窯焼成への移行である。藤井寺・羽曳野市に所在する古市古墳群では、その変化の過程を明らかとすることができます³⁾、特に、応神陵古墳では大量の埴輪に形態、焼成、法量、調整の画一化がすこぶる強く表現されている。また、一方で、それより新しい段階で須恵器副葬が一般化し、須恵器そのものの大量需要とそれに伴う供給といった点で新たな局面をむかえる。

本稿では後者の問題をあつかわない。ここでは、特に前者の窯窯焼成の関連性とその前後で得られた円筒埴輪生産の推移と古墳供献される初期須恵器がどのようにかかわって変化するのか。そして、その変化は陶邑窯跡群の初期須恵器の変化とどう対応するのかという比較を試みるものである。

2. 円筒埴輪と初期須恵器

古墳に伴う出土遺物は複数種におよぶことから、それぞれの型式組列の検討を行うことができるメリットがある。しかし、それらの遺物群は一つの時代相をつくり出していることから、単純には短時間の幅の中に置くことができないというデメリットをもっている。

古墳墳丘周囲に置かれる円筒埴輪は墳丘外装の最終段階に位置することから、墳丘完成時年代に近い。一方、土器は造営時の際の日常的な入り込みと埋葬時の際の供献、埋葬後の設置といった段階的な入り

4. 円筒埴輪による各段階

込みがある。ただし、それらを明らかにすることができるのであれば、日常性が強いものほど他の関係すなわち遺構との時間的、地域的関連性といったことがらの比較も容易なものとする。

問題となる初期須恵器については出土する古墳が限定されることから、他の副葬品と同様、古墳に持ち込まれるまでの時間差を考慮に入れる必要性があるものもある。ここではそうした諸条件に留意しつつ埴輪の変化推移にもとづいて各古墳出土須恵器を配列し、傾向を読みとることに重点を置きたい。

3. 円筒埴輪の外面調整の変化

円筒埴輪による時間的推移については、川西宏幸氏⁴⁾が提示したB種ヨコハケという埴輪の外面2次調整について注目し、古市古墳群の大型墳を中心に細分を行ったことがある。このB種ヨコハケはちょうど窯焼成への変化過程中と須恵器生産の初期的な段階とがかかわり合うことから、本論では非常に重要な要素である。

B種ヨコハケは4つに細分が可能であり、B a、B b、B c、B dと呼称し、その順に出現頻度によって漸移的に変化する。これは凸帯間を水平方向にハケを整えて充足する方法がシステム化される過程を内包している。その際、ハケ工具を器面からできるだけ離さず、確実に施すために垂直方向に特徴的な静止痕が残るというものである。

B a種は静止痕の出現率が少なく、凸帯間を2周以上のハケ動作で充足しており、この種の出現頻度の高い古墳では須恵器を伴わずに、有黒斑の埴輪が多い。

B b種は静止痕の出現率が高くなるが、凸帯間を2周以上のままである。ただし、ハケ工具の変化と最終的なハケ動作が一周で凸帯間を充足しようとする意図が見受けられ、新・旧に分けることができる。新しい要素の出現率が高い段階で、窯焼成の埴輪へと変化、須恵器の共伴例が見られるようになる。

B c種は凸帯間を1周のハケ動作で充足するもので、須恵器との共伴が目立つようになる。この種の新しい須恵器共伴例としてはTK208~TK23型式のものがあり、典型的なB種ヨコハケのシステムと定型化した須恵器の形態と器種組成の一定の完成を見ることになる。出現頻度の高い大型古墳例を挙げるならば、堺市仁徳陵古墳、ニサンザイ古墳、藤井寺市允恭陵古墳などである。

B d種はこの段階以降となることから、説明をはぶき、主に対象となる古墳はB種ヨコハケをもつ古墳のうちでも、B b、B c種ヨコハケの出現頻度が高いものということになる。そして、B種ヨコハケの実態が連續してよく把握できる大阪府、奈良県といった地域に限定して以下に概観する。

4. 円筒埴輪による各段階

B b種ヨコハケを認めることのできる須恵器を出土する古墳には大阪市城山3号墳⁵⁾、豊中市御獅子塚古墳⁶⁾、大阪市長原45号、31号、29号、10号墳⁷⁾、柏原市玉手山遺跡⁸⁾のものがある。これらのうち、B b種ヨコハケの中でも新しい要素（ハケ原体幅が広いもの）が確認できる古墳には長原10号墳、玉手山遺跡の古墳がある。次に、B c種ヨコハケが認められる古墳には大東市堂山1号墳⁹⁾、奈良市ウワナベ古墳¹⁰⁾、藤井寺市野中古墳¹¹⁾、大阪市城山7号墳⁵⁾がある。

これらの古墳をB種ヨコハケにしたがって段階的にとらえると、B b種の古いもの（第I段階）。新しい段階のもの（第II段階）。B c種ヨコハケのもの（第III段階）として、3つの段階に分けて考えることができる。

第I段階

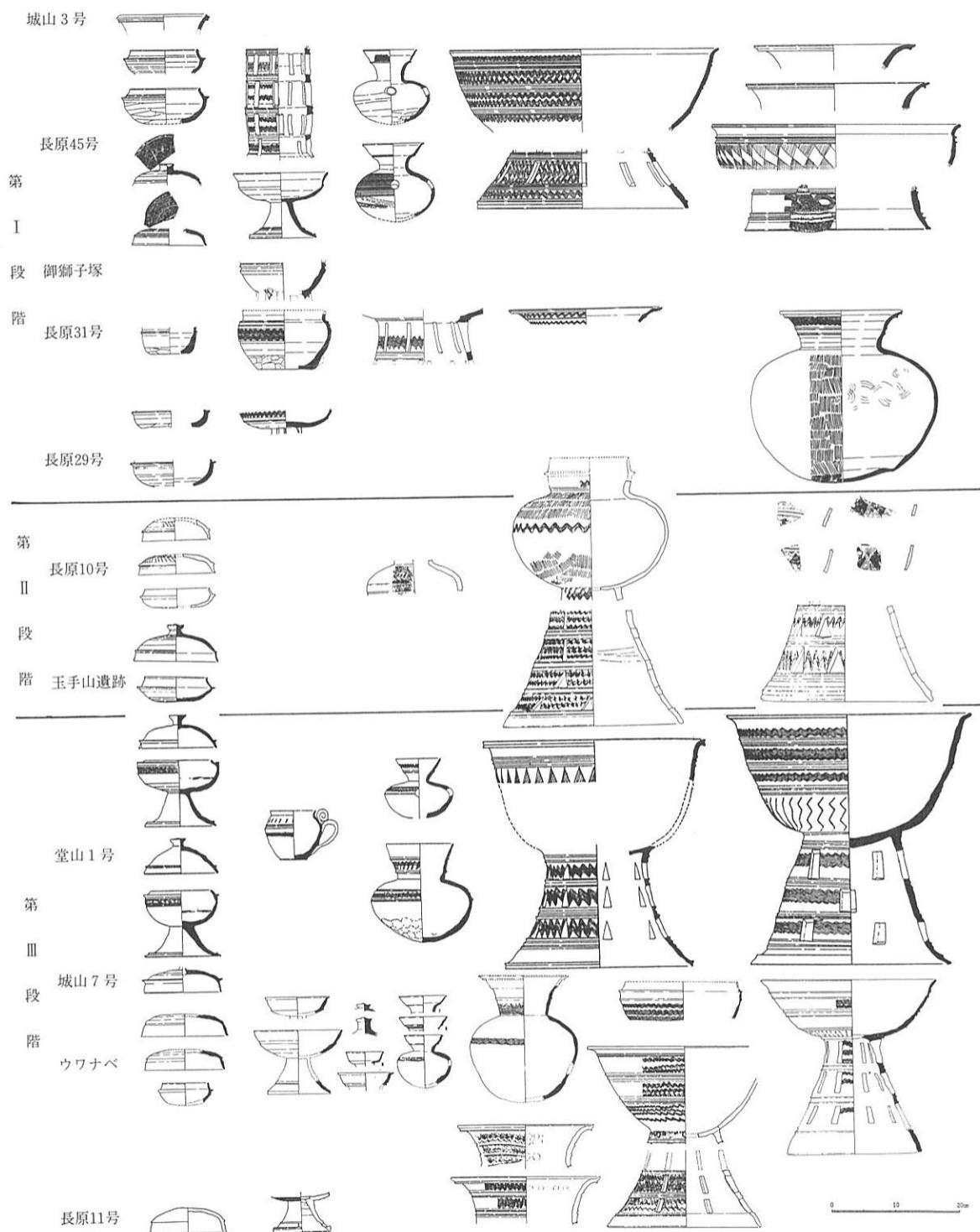


Fig.487 墓輪による段階別 古墳出土須恵器編年表

須恵器を有する古墳を確認できる古い段階である。御獅子塚古墳例をのぞくと、いずれも小型墳であり、須恵器の群としても比較的にまとまりの良いものである。したがって、埴輪との時間的な包括性は短いと考えてよい。

須恵器の量としては、御獅子塚古墳例を考えると数個体の数少ない出土が中心のようであり、今後もこの類の古墳出土例が増加するように考えられる。

その他はいずれも長原古墳群とその周辺のものであり、小型墳ゆえに資料が見出しやすいのかもしれない。

4. 円筒埴輪による各段階

ないが、同様な中期の小型墳集合型の京都府木津町上人ヶ平古墳群例¹²⁾と比較する時、長原古墳群の特質として評価できる。また、窯窯焼成の埴輪の採用も早く実現するといったことを考え合わせると、周辺に須恵器窯のあった可能性も充分に考えられる。

長原45号墳は群内でも器種にバラエティーがあり、壺、高壺、壺、器台、甕、魂と一定のセットがそろう。壺は受け部が体部と一体的にとりつく。

体部は器壁の厚い平底状の底部から丸味のある体部へと続き、比較的に長く外弯して内方に向かう口縁部がとりつく。底部から口縁部までは徐々に器壁が薄くなる。魂は口縁部が二重口縁状になっており、屈曲部が明瞭である。また、高壺の壺部上半部と同様に「く」の字気味に外弯しながら外方に開く。この傾向は魂口縁部や壺、甕、器台の口縁部にもうかがえる。文様には鋸歯文、組紐文があり、波状文は精密である。

31号墳の壺身は底部平底のもので、29号墳の壺身は下半の器壁が厚く体部に丸味をもつ。両者とも凸帯状の受け部を特徴とする。

第II段階

この段階の古墳も小型墳であり、時間幅はあまりないと判断できる。前段階の壺に比べると蓋天井部と身底部は比較的に器壁が均質となり、体部との境がスムーズに移行する。これは成形の基礎となる粘土円板の仕上げとケズリの方法の変化に対応するものであろう。

長原10号墳は壺蓋天井部に斜行状の刻み目がつくものがあり、口縁端部はそれまでのものと比べ、水平面を有するしっかりとしたものである。

玉手山遺跡は壺蓋のつまみが高いものであるが、その他の部分については定型化に向かう形状を感じさせる。ただし、壺身底部に平坦な部分を多く残し、蓋、身とも口縁端部付近で外方へ折れまがる。

第III段階

この段階はウナベ古墳のような大型古墳、野中古墳のような陪冢的古墳、堂山1号墳のような単独小型墳と様々である。また、後2者では搬入品的な土器が多く、出土量も多い。

堂山1号墳の埴輪は焼きがあまく、黒斑がつくものもあり、従来古く考えられがちであったが、形状、成形、調整を考慮に入れてこの段階が妥当である。一方、共伴する土師器高壺は硬質に焼成され、胎土が均質で、器壁も厚く、脚内面の調整の粗雑さなどから、古くさかのぼらせる必要はない。特に高壺脚部は脚柱部が下方へ大きく開きながら、さらに屈曲して水平方向に大きく開く形状は須恵器の有蓋高壺と共に通する。この形態と類似する高壺が讃良郡条里遺跡¹³⁾の自然河川などで出土しており、これより6世紀代にかけて、北河内地域独自の須恵器生産系譜が感じられる。魂は二重口縁状の口縁の段が明瞭でなく、体部は肩の張ったものとなっている。把手鉢は全体に丸味をもった体部で底部が小さい。

城山7号墳の壺蓋はつまみが堂山1号墳、玉手山遺跡と同様に高いものであるが、平たい天井部から口縁部にかけての間は全体に丸味をおびる。

ウナベ古墳の壺身には土釜状のものがあるが、体部下半が丸味をもち、ほとんど平底状部分をもたない。壺蓋は比較的に大きく、天井部は丸味をもつものの全体に偏平な感じをうける。蓋は稜で屈曲し口縁部となるが、境は不明瞭で一体感がある。高壺壺部上半部や魂口縁部は内弯気味にたちあがり、器壁の厚さを増した後、すぼまり、端部を丸くおさめるか外方に向けて屈曲させ、つまみ出している。こうした特徴は比較的に各器種に共通する。このため、魂なども二重口縁状ではあるが、段はさほど明瞭でない。

さて、野中古墳である。この古墳出土の陶質土器なり須恵器はバラエティーに富み、しかも壺が見られずに、特異な形状の器種が主である。そのため、相対的な須恵器の位置づけが堂山1号墳同様、困難である。しかし、埴輪はB c種が主体であり、この段階以前にはなり得ない。

特異な形状の器種は須恵質小型把手付壺や台付壺、有鍔土器と報告されるものである。これらは朝鮮半島から直接渡来した可能性が強く、それらと分離が困難な焼成、胎土のものが鋸歯文や組鈕文をもつものなどに認められる。こうしたもののに他に、二重口縁状の壺と土師器ではあるが高壺や鰐を認めることができる。

前者の壺は内弯気味でわずかに開く口縁部とその端部水平面を有して外方につまみ出す。この特徴はウワナベ古墳のものと類似する。後者の高壺は先の堂山1号墳の有蓋高壺を思わせるようなもので、高さのあるつまみを蓋天井部に付けるものと考えられる。鰐は肩のはる体部を有するものである。また、頸部がしまり、口縁部が外弯しながら大きく開く須恵器の壺がある。これは口縁部外面に凸線文を巡らすもので、端部はにぶく丸くおさめられる。櫛描波状文を頸部に有する壺はその使用頻度が高く、報告書によると全器種の施文頻度が27.16%におよぶ中にあって、櫛描文施文の出現率は89%に達する。

これらのバラエティーのある土器群は出土状況によって二分できる。把手付壺の一群は内部の主体施設に一括副葬されており、他とは異なった意味をもっている。野中古墳の時期では須恵質の土器の副葬がいまだ一般化されず、他の甲冑のような副葬品と一部同様なあつかいを受けていたのであり、把手付壺に関しては一定の保持、所有後の埋納を確実視できるものであろう。これに対して、二重口縁状の壺は日本化した須恵器のバリエイションの一つ、土師器は須恵器の影響を受けたものとして分離解釈が可能であり、比較的に築造時期に近い所産であると考えることができる。

以上、定型化以前の須恵器を伴う古墳出土土器を概観した。これに統いて長原11号墳⁷⁾、61号墳¹⁴⁾や藤井寺市青山2号墳¹⁵⁾、堺市伏尾遺跡¹⁶⁾などがある。それ以降は須恵器の古墳供献、副葬は爆発的に増加する。

5. 定型化前須恵器の新旧

主に古墳から出土する初期須恵器を概観してきた。これらのうち、野中古墳の土器群は多少の時間幅を見積る必要はあるが、分離して考えることができ、全搬に一定時期幅の土器一括群を有する古墳の須恵器であった。そして、埴輪による各段階によってその範囲の時間的な須恵器の形態変化の状況についていくらかの要素を抽出することが可能であった。

ここで得られる新旧は大きく第II段階中に起こっている。ちょうど第II段階は応神陵古墳完成期頃であって、埴輪にとっても窯窯焼成、B種ヨコハケの盛行、形象埴輪の器種整理に伴う多用化といった大きな画期が各地で顕在化する段階である。この段階を前後して須恵器各器種の変化をまとめてみよう。

壺は体部成形の基礎となる粘土円板状にまきあげていく単位が第I段階では比較的に平坦でその割合が大きく、口縁部に向かってそこからのまきあげも極端に垂直方向である。ヘラケズリも不規則に底部（天井部）と体部の境に集中する。そのため、器壁の厚さは均質でなく、底部（天井部）ほど厚くなっている。第II段階ではその傾向は残るものその境は不明瞭となり、均質化し、スムーズなものになっていく。したがって、第III段階の堂山1号墳の把手付壺やウワナベ古墳の土釜状の壺身の底部などは平底部分の割合が小さくなっている。

高壺壺部の上半部や二重口縁状の鰐口縁部の上半部は第I段階の長原45号墳の高壺に代表されるよう

6. 陶邑窯跡群における初期須恵器の推移

に断面「く」の字状に折れまがるようにして大きく外反する。それに比べ第III段階の堂山1号墳、ウワナベ古墳では逆に中位で肥厚、内弯気味であるとともに、上半、下半を分ける屈曲と稜は不明瞭となる。

頸、壺体部については第I段階では肩のはるものとそうでないものがある。後者が比較的に主流であるが、第III段階では肩のはるものが優位である。また同時に体部と頸部の屈曲が明瞭となる。

これらの他には、口縁端部に水平面をもち、ふんばったような感じになるものが第II段階より顕著になる。また、蓋天井部に貼りつくつまみの高いものは第II・III段階に目立つ。文様は個体内での粗密がそれごとに異なりを見せるが、全体的な施文率は高くなっていくようである。そして、それにしたがって組鈕文、鋸歯文がしだいに消失し、櫛描波状文を多用する。

以上のような変遷推移を考えることができるのであるが、これをもとに量の豊富な陶邑窯跡群の資料においても検討してみたい。

6. 陶邑窯跡群における初期須恵器の推移

大阪府南部にある陶邑窯跡群はこれまで多くの調査が実施され、須恵器編年が細かく組まれている。しかしながら、初期須恵器に該当する段階の新旧の変遷観はTK73号窯資料の解釈によって、若干異なっているのが現状であろう。

生産地遺跡の編年は時間的にも地域的にも安定した中で行うことのできる最も有効な土器編年の手段の一つである。しかしながら、時間的な共有性の最も高い同一床面資料とそこにある器種の豊富な資料を両立できる窯跡が結果的にはあまりめぐまれているとはいえない。そこで、窯資料は灰原資料を含めた編年とならざるを得ないため、一定の窯経営期間を見込むこととなる。その場合、期間の長短を考慮する必要が生じ、資料を抽象形式化することになって様式的な区分範囲の型式群を認定することになったと言えよう。したがって、本来、窯間の資料比較を行いにくいという点に関しては窯経営期間の重複性を通じて新旧を確認できる利点があるものの、それがために型式間の区分を少なからず不明瞭なものにしている。

こうしたことから、先の埴輪によって得られた型式変遷観より、陶邑窯跡群から出土する窯資料を、再度窯相互が関連するように坏身を例として配列することを試みたのがFig.488である¹⁷⁾。

TK73号窯は窯体天井部の重なり度合いから大きく3度の補修が報告されている。比較的に長期間経営された窯である。坏身は細かく5つに分かれれる。

A類は平底で体部がほぼ直立する。B類は平底の割合が少なくなり体部下半が丸味をおび、ヘラケズリの範囲がやや増える。C類はより体部下半に丸味があり、受け部が水平に突出する。TK73号窯ではこの3類が連續し、形態を異にして、F・G類がある。

TK85号窯は当初構築された窯と全く同じ地点にそれより後の時期に新たな窯が重複する。ここでは前者を見る。TK73号窯のC類と共通したものがある。D類はこれまでの口縁部たちあがりが直線的に内傾していたのに比べ、外弯して内傾する。底部の平底状部分がさらに少なくなるが、TK85号窯のC・D類には底部と体部の境にヘラケズリをほとんど施さない小型のものもある。E類は受け部が凸帯状にとり付かず、D類より体部と一体化しており、口縁部は短く、ヘラケズリはシステムチックなものとなる。

TK305号窯の窯体は大きく3度の作りかえがある。坏身は受け部が不明瞭であるものの、C類と類似した形状のものがあり、D類とも類似するものがある。E類は認められないが、F・G類がある。F

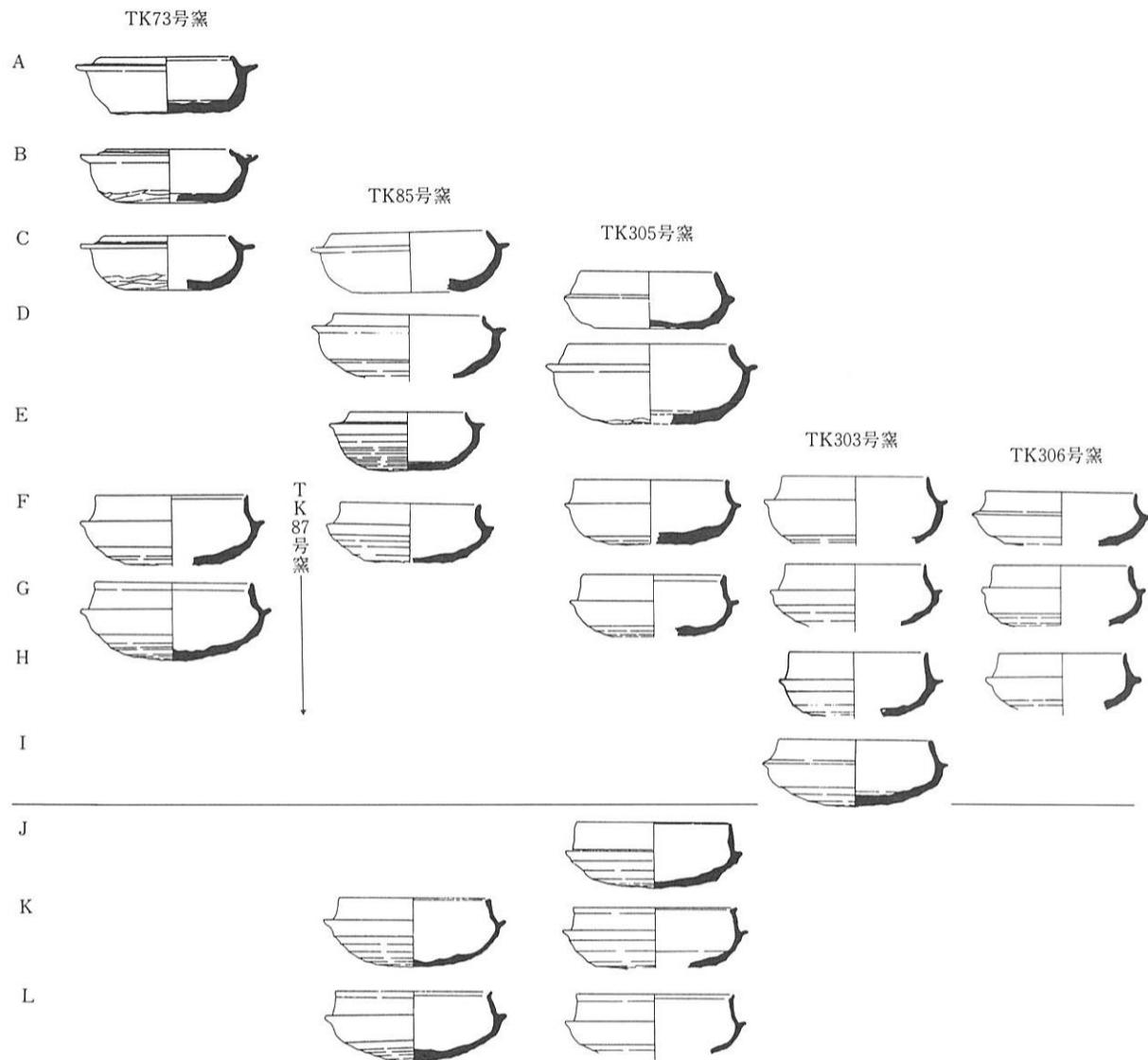


Fig. 488 陶邑窯跡群 初期須恵器坏身変遷推移

類はそれまでの体部と底部が分離している形状に比べ一體的なつくりものであり、口縁部たちあがりは断面三日月状に内傾する。G類は口縁部たちあがり上半部が比較的に垂直なものとなる。両者とも口縁部に水平面をもつ。TK305号窯は他にJ・K・L類の一群がある。

TK303・306号窯はTK303号窯が前庭部と灰原の資料、TK306号窯は上半部が削平をうけた資料であるが、比較的よくまとまった状況を示す。ただし、遺物出土量が多くなく、短期経営窯のあり方を示す。双方ともF・G類があり、それに統いて口縁たちあがりが直線的に、しかも垂直方向気味になる。受け部はより水平方向になる。特にH・I類のうち、I類はその傾向が濃厚である。しかも、口縁端面はよりしっかりと逆にすればふんばるように水平面を呈する。

J類以降は定型化したものとしてとらえることができ、TK305号窯の新しい一群はそれをよく示している。C～I類までは全般に口縁端部が丸くおさめられるのに対して、J～L類は端面に凹線状のくぼみがはいり、内外に拡張することが顕著である。また、受け部は下半が体部と一連となり厚くなるとともに上半が水平方向の面を呈するもののやや外上方斜めにつきでるようになる。体部の回転ヘラケズリはその範囲を増してスムーズに仕上げる。

7. 初期須恵器の変化のもつ意味

A～L類と坏身を細かく分け、変化の連続性を各窯の重複関係から見てきた。それらは漸移的に移行していくものとみて間違いかろう。その中で、大きな変化がある。まずC類であり、次にF類、J類となり、4分類にまとめることが可能である。そのうち、初期須恵器にかかるのは前の3分類である。この分類でよく適合する窯経営の資料を挙げるなら、現在のところ最初にTK73号窯の古い一群、次にTK85号窯、そしてTK303・306号窯の一群が適当である。これらを仮に型式として認定する。坏だけでなく他の器種についても大きくはこれに追従しているのがわかる。

出現頻度の高い甕について見るなら、TK73(古)型式のものは頸部と体部の境が不明瞭、頸部が長く顕著な屈曲なしで外弯、口縁部は内外面を強くヨコナデし、端部側を尖らすようにする。端面はその後ヨコナデしないものが特徴的である。TK85型式のものは端部を丸くおさめるものが顕著であり、面をもつものが一部で見られ調整の最終が端部付近となる。TK303・306型式は口縁部付近で外方水平方向に屈曲し大きく開き、端部は面をもち、上下にわずかに拡張される。頸部と体部の屈曲は明瞭であり、肩のはる体部が多い。このような新旧の変化を両者に認めることができ、TK85型式は前後のバリエーションがある。

壺は二重口縁状のものに注目するとTK85型式を中心として展開し、新しい要素をもつTK305号窯は屈曲の段が不明瞭であるものが目立つ。

高坏はTK73(古)型式のものが上半部において外弯しながら大きく開く。TK85型式は前傾向をひきつぐものの直線的である。TK303・306型式の高坏脚部は裾で屈曲し外方に大きく開く。

これらの変化は先の埴輪による推移とおおむね一致するものであり、第I段階はTK85型式の範囲に、第II・III段階はTK303・306型式に対応する。

さて、埴輪にないTK73(古)型式の特徴をさらにみると、甕に見られる叩き目はTK73号窯の平行叩きが99.8%であるのに対してTK85号窯は91.4%であり、後者のバラエティーを少なからず示している。文様の施文にもこの傾向はうかがえる。

7. 初期須恵器の変化のもつ意味

これまで、埴輪による新旧と初期須恵器の推移を照らし合わせてみた。その結果、古墳で出土する須恵器からはほとんど見出すことのできない形態のものがTK73号窯のものに認められた。その他のものはそれぞれの変化の様相に共通性があることからTK73号窯の一部は先行する形態であるとした。

その際に抽出できたのはTK73(古)型式と仮に呼称するものであり、坏A・B類の平底のものが特徴的である。また、他に、墳墓供献土器との差を考慮に入れても甕のシンプルさが目につく。甕口頸部はほとんど装飾されることなく、平行叩きで統一され、内面スリケシといったものである。石神 怡氏¹⁸⁾が指摘する「須恵器が本来持っていた実用容器・・・須恵器の中で最もその特性を発揮できたものが甕・・・大甕の所有量こそステータスシンボルとして存在」したという甕の評価がある。この時期、甕の比率は高い。

須恵器生産開始段階でその経営にたずさわり、消費側がまず求めたものは大甕であり、それは加飾せずとも実用性とステータスシンボル性を両立させていたと考えられる。つまり、一部集団の非常に特定的な要求とそれに呼応する特定の集団による生産体制がまず確立した。こうした要求の時点で生産される要求物はある意味で、すでに日本化を達成していたのであり、基本的には単純な器種と形態との構成であったといえる。そして、それに加えて特定集団による特定器種が個別に存在した。

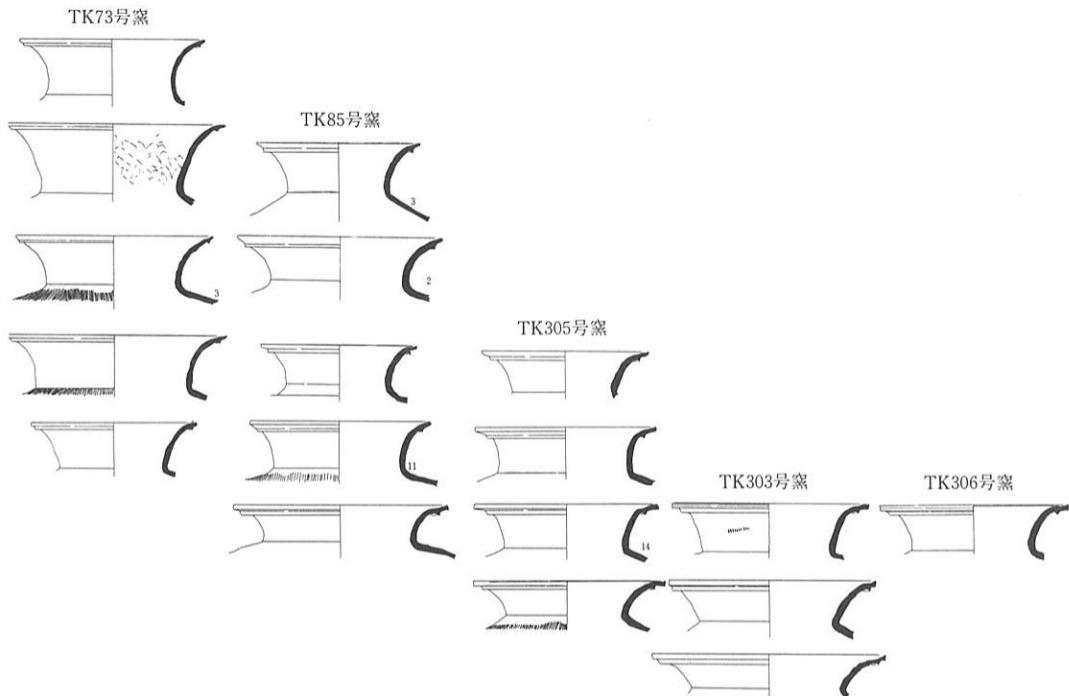


Fig. 489 陶邑窯跡群 初期須恵器甕変遷推移

TK85型式の段階ではかなりの集団の間で須恵器生産が地点を異にして展開したと考えられる。それは古墳供獻が目につくことや埴輪生産がすでに窯焼成へと移行していること、二重口縁壺をはじめとした土師器を模した器種の増加、壺形状の独特な方向への変化といった事象である。こうしたバラエティ一さは先の特定集団のみならず、一般労働力の大幅な参加と朝鮮半島内での地域を異にした集団の須恵器生産への参画などが主な要因として考えられる。

後者の状況は古墳供獻の土器によく示され、むしろ次のTK303・306型式の段階に豊富である。たとえば伽耶系と考えられる長原10号墳や北野耕平¹⁹⁾、定森秀夫²⁰⁾が野中古墳で指摘する伽耶、百濟系陶質土器と言ったものである。定型化以降の須恵器の一群に含まれる陶質土器系のものは比較的に分離しやすいが、対象とする段階では困難なものが多い。実際には時間、地域を異にして順次、渡来し定着、移動する様相があったと考えられ、そうした諸要素を明確に分離しにくい状況が初期須恵器のあり方そのものであったのであろう。しかし、それにしてもこのことは異なった集団がTK85型式以降、須恵器生産に大幅に関与し、それぞれの地域で微妙に異なる生産系譜をつくり出していると考えられ、北河内の地域相の状況などはそれを端的に示すであろう。

にもかかわらず、須恵器生産が定型化に向かったのはなぜか。

多量の人々の生産関与は応神陵古墳築造前後の第I・II段階であり、少なからず、大古墳築造のための労働力の集中のあり方と無関係でなく重複性をもっている。こうした労働力の管理システムの制御、すなわち強固な統合性は須恵器生産とも軌を一にした。TK303・306型式を通じて壺の大量生産・規格化、大型器台の生産などが明確に志向され、完成するのである。最も墳墓に投下させる労働力の集中を示した仁徳陵古墳の築造はこうした時期前後の第III段階に位置する。そしてまた、全体的にも壺を主体とした生活様式へとも変換していく。さらに須恵器の形態と組成を質量とも広範囲に確固たるものにした段階、それはニサンザイ・允恭陵古墳の築造のころであった。

陶邑窯跡群はこうした人的集中期の充実性を背景とし、バネとし、その過程を通じて、一大生産地と

7. 初期須恵器の変化のもつ意味

して固定化・大規模化されていくものと考えられる。

その発端としての基地が大庭寺遺跡²¹⁾の他に求められ、小阪遺跡は労働力拡大期にあたるTK85型式の段階から、おそらくは渡来系、在来系が融合した状況下の新たな生産基地の一つとして展開したと考えられる。

本稿を成すにあたっては、北野耕平、都出比呂志、福永伸哉、萩本 勝、中井貞夫、杉原和雄、柳本照男、服部聰志、田中清美、森屋美佐子、菱田哲朗、高橋克壽の諸先生、諸嬢、諸氏をはじめとする多くの方々の御指導、御援助を賜った。

註

- 1) (財)大阪府埋蔵文化財協会 1991 「大庭寺遺跡出土須恵器検討会」資料
大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990 「大庭寺遺跡(その5)発掘調査」現地説明会資料28
- 2) 大阪府教育委員会 1978 『陶邑』III 「大阪府文化財調査報告書」第30輯他
平安学園考古学クラブ 1966 『陶邑古窯址群』I
- 3) 大阪府教育委員会 1988 『大水川改修にともなう発掘調査概要』V
- 4) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
- 5) 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1986 『城山』(その1)
- 6) 豊中市教育委員会 1990 『御獅子塚古墳』
埋蔵文化財研究会 1989 『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第II分冊 第25回
- 7) 長原古墳群は以下の文献に拠るが、古墳番号・実測図については註6)の埋蔵文化財研究会のものにしたがった。
45号墳:(財)大阪市文化財協会 1989 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』I
31・29号墳:(財)大阪市文化財協会・長原遺跡調査会 1982 『長原遺跡発掘調査報告』
10号墳:大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター 1978 『長原』
- 8) 柏原市教育委員会 1983 『柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 1982年度』
- 9) 大阪府教育委員会 1973 『堂山古墳群発掘調査概要』
大阪府教育委員会 1978 『陶邑』III 大阪府文化財調査報告書 第30輯
- 10) 奈良県立橿原考古学研究所編 1976 「ウワナベ古墳」『奈良県文化財調査報告書』第28集
関川尚功 1984 「奈良県下での初期須恵器」『考古學論叢』第10冊 奈良県立橿原考古学研究所
- 11) 大阪大学 1976 『河内野中古墳の研究』大阪大学文学部国史研究室研究報告第2冊
- 12) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1989 「木津地区所在遺跡、上人ヶ平遺跡」『京都府遺跡調査概報』第32・35冊
- 13) 大阪府教育委員会 1991 『讚良郡条里遺跡発掘調査概要』II
- 14) (財)大阪市文化財協会 1990 『長原・瓜破遺跡発掘調査報告』II
- 15) 一瀬和夫 1992 「古市古墳群における大型古墳群の埴輪の変遷」『埋蔵文化財研究会15周年記念論文集』
- 16) 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1990 『陶邑・伏尾遺跡 A地区』
- 17) この推移はすでに石神怡氏が明確に論じている。(財)大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』I P.795
- 18) P.791 註17)と同じ。
- 19) 北野耕平 1969 「初期須恵質土器の系譜—紀伊六十谷出土の土器とその時代—」『神戸商船大学紀要第一類文科論集』17
- 20) 定森秀夫 1990 「日本出土陶質土器の原郷」『季刊考古学』第33号
- 21) 大庭寺遺跡の須恵器は上述の変遷觀からTK73型式以前には今のところさかのぼらない。

第8章 小阪遺跡の開発についての一考察

入江正則 [(財)大阪文化財センター]

1. はじめに

石津川流域の調査はこれまでにかなりの密度で実施されている。すでに実施された調査は石津川河口付近から和田川と分岐するあたり、中流域、上流域の遺跡の調査がなされて、地形的には氾濫原面、完新世段丘面、段丘II（中位段丘）、段丘I（高位段丘）の調査と流域のさまざまな地形上で実施されている。これらの調査のすべてにわたって検討を加え、各時代の開発に関する考察を行うのが本来であるが、力量も考え、ここでは(財)大阪文化財センターが実施した近畿自動車道松原海南線並びに府道松原泉大津線の調査を組上にのせて、平安時代以降近世まで石津川流域の氾濫原面、完新世段丘面、段丘I、段丘IIの各地形にそれぞれの時代では人々がいかに対応したのか、どの様な開発があり、現在の景観にいつごろ至ったのかに主眼を置いて、卑見を披露して批判を仰ぐこととした。

2. 石津川流域の地形

石津川流域の地形はすでに各種報告書の中や研究論文の形で報告され、ほぼ明らかにされている。ここではすでに刊行された概要報告書『小阪遺跡南その1』の中に高橋 学氏の論考があり、これに則つて述べて行きたい。

石津川河道に沿った部分に氾濫原面が発達し、この背後に完新世段丘面が広がる。両者の比高差は2～3mである。完新世段丘面の背後には比高差約10m以上に及ぶ崖面があり、この上部には段丘II、場所によっては段丘Iが伸びている。基本的にはこの4種の地形環境がある。

氾濫原面は太平寺遺跡および小阪遺跡南その1に一部分見られる。完新世段丘面は小阪遺跡その1、2、3、4、5、6、7、8、南その2、および小阪遺跡南その1、太平寺遺跡、西浦橋遺跡のそれらの一部分が該当する。段丘IIは万崎池遺跡、菱木下遺跡と西浦橋遺跡の一部分が該当している。また段丘Iは調査区に直接関係してこないが、隣接する伏尾遺跡が該当している。

3. 各時代の遺跡の様相

時代ごとにそれぞれの遺跡にどのような遺構が現れ、どの様な遺物が出土したのかをまとめると、次の通りになる。

1) 平安時代

小阪遺跡その3 (C地区)

黄色系粘質土層（第1層）この上面に古墳時代の遺構面がある。溝、ピット、落込み、土坑、竪穴住居、井戸が認められる。古墳時代以降は現在の景観とあまり変化ないと推測される。平安時代、近世の遺構も部分的に存在する。

小阪遺跡その5 (E地区)

陶器川は流路を変え河跡がバックマーシュとして湿地化するが、ここから室町時代の瓦質小皿が出土する。古墳時代河川2、古墳時代河川3は古代河川2となりその埋没は9世紀、古代河川3の形成も9

4. 各時代の問題点

江戸時代の土坑や埋甕が検出される。溝が現在の条里制の方向に合致し、埋土中から江戸時代の遺物が出土している。近世には完新世段丘面全体の開発がなされていた可能性がある。

万崎池遺跡

近世では土壌、溝、井戸、池等農耕に関する遺構が多く発見された。現在の完備された水利体系が出来上がるまでは、水田あるいは畠1枚ごとに水路や貯水土坑や井戸が設けられていた。段丘II上面が耕地化するのは近世前期以降である。

菱木下遺跡

16世紀に入ると灌漑用の井戸や溜池が出現する。江戸時代には段丘II上の大半が水田化する。花粉分析結果では稲作とナタネ等の商品作物も栽培されていた。

西浦橋遺跡

段丘II上の全面的な開発は埋甕の水溜や肥え溜と考えられる土坑や灌漑用の素掘りの井戸が出現する17世紀以降になると考えられる。

4. 各時代の問題点

1) 平安時代

小阪遺跡では旧河川跡を利用した水田を作るのが、調査されたこの時代の唯一の遺構である。これ以外に完新世段丘面を縦横に横切る溝も調査されておらず、完新世段丘面上の狭い範囲の水の得やすい所のみに水田が営まれていたと考えられる。一方段丘II上では溝が開削されはじめ、この頃に開削された溝はほぼ同じ位置に重複しており、段丘II上の開発はこの頃に基本的な骨組みが形作られたものと考えられる。段丘II上では開析谷等の開発しやすい部分の開発が進められたものと考えられる。しかし当時の技術では水の上げられない尾根筋等の範囲も広くこれらでは開発がなされておらず、全体的に見ると部分的な開析谷部分の虫食い状の開発が進んでいたものと考えられる。

2) 中世

このころでは石津川の完新世段丘面の開発もすすみ少し窪んだ部分やあちこちで水田の足跡が検出されており、水田面積は完新世段丘面上でもかなり増えていたものと考えられる。近世の開発に伴う削平もあっていま一つはっきりしない部分が多いが、水田の形状も一部分条里型区画に似た区域も存在し、一方では僅かに残った形から推測すれば現在の条里型の水路下に水路にとらわれない形の水田が広がっている区域があるなど、おそらく全体的には条里型水田ではない水田が広がる状況が推測される。しかも水利体系はまだ現在の様な大規模な用水網は完備されておらず、埋没河川がまだ窪んでおり、相当部分で谷水を利用した形での用水体系と考えられる。石津川の氾濫原面の開発は中世にも洪水に襲われて削平されるなどはっきりしない。段丘II上では開析谷に溜池の堤を築造したり、溝を開削している。この事から中世後半には段丘II上もかなりの部分は耕地化していたと考えられる。また和田川の完新世段丘面が耕地化するのは中世前半と考えられる。

3) 近世

近世に入ると小阪遺跡全域から鋤溝や畝溝が検出されるに至り、完新世段丘面全域に水田が作られたと考えられる。また中世まで低湿地として放置されていた旧河川跡地も近世に入り水田化される。近世に入ってようやく陶器川上流から取水する現状の全面的な農業幹線水路網の完成と条里型水田へと耕地の整理がなされたのではないかと考えられる。また段丘II上は井戸や貯水槽の掘削、水路の開削等の社

会的整備が進んでようやく全面的に水田化していると考えられる。すなわち石津川の氾濫原面、完新世段丘面及び段丘II上を通して見れば、全面的な水田化がなされ現在の様な水利体系と条里型水田と段丘II上の水田の、あたり一面の水田景観が展開するのは近世に入ってからではないかと考えられよう。

5.まとめ

石津川流域の広大な沖積地に広がる条里型水田と農業用水網は近世に現在見られるような形に完成したのではないかとの結論に至った。しかし中近世に至るまで問題は残されており、奈良時代の開発では、旧陶器川に沿った範囲に水田を検出している。ここでは条里制区画と方向が合致した水田畦畔が調査されており、この頃すでに現在見られるような条里型水田が施行されていた可能性もなきにしもあらずである。しかし自然景観は現在と全く異なっており、陶器川の流路が調査区の東側にあり、石津川の支流が小阪遺跡その3付近に流れたりする。地形環境は全く異なり現在見る水利体系は当時には機能しえないのは明らかである。中世の開発も部分的な水田が検出され、この水田が全面に存在していたかどうか、近世の開発で削平された可能性もあり判らない所が多い。しかし中世の水利体系も現在と同じ形態で存在しないことは中世の地形環境においても明らかである。そして古代、中世の灌漑用水の溝がほとんど検出されないことから、大規模な用水網が作られなかった可能性が強い。近世に入って旧来の湿地が開発され小阪遺跡その3にある旧河道跡も埋没して水田化され、現在存在する用水網が作られる条件が整備される。陶器川の上流約1kmに堰を設け延々と農業用水を引く大規模な工事を完成させて、始めて調査区周辺に安定した水が得られる条件が整ったと考えられる。この工事は近世のある時期に施工されたと考えられる。それと同時期に条里型水田の区画整理も併せて施行され、幹線水路から順次水を取り入れることのできる地形への改変、上流の水田が高く、次第に低くなる水田配置がなされたと推測される。大規模な農業幹線水路網の完成とともに高位段丘の開析谷にある溜池は現在では夏涸れ時の非常用の位置しか占めていないが、それまではこれらの溜池の谷水が周辺の水田に非常に重要な位置を占めていたと考えられる。

今、小阪遺跡周辺が現在の様な水利体系と条里型水田の景観でうめつくされるに至った時期を近世以降としたが、これは必ずしも石津川全域にあてはめることはできないと思われる。下流側ではさらに早い時期に全面開発がなされている可能性もあり、石津川流域内においても開発の大きな時期差が存在している可能性がある。それとともに奈良時代の水田をどう理解するかが石津川流域の開発を考える上で大きな意味を持つと考えられる。これらの問題については今後の検討に待ちたい。

また開発時期については近世の開発と記したが実際には中世後期のしかも近世に非常に近い時期の可能性もあり、詳細な時期はもう少し検討が必要である。

かつて段丘I上の開発について文献史料を用いて若干の意見を私は述べたが、この中でこれらの段丘I上の開発は近世に入ってからで少なくとも18世紀に入る頃ようやくなされたとした。もしそれが正しいとしたとき完新世段丘及び段丘II上の開発と段丘I上の開発については最大見積もったとしても約1～2世紀の差しか認められず、この石津川流域の小阪遺跡周辺での開発は近世に入ってから、集中的に大規模な開発が行われていたと考えられる。

和泉国の石津川流域の開発状況は河内の大和川流域の平野部の開発状況とは同一ではないと思われる。石津川流域では河川の下刻作用が著しく、河川の豊富な水が利用できない特殊な状況があり、そのため水を得るのに非常な苦労をしている。この様な地域の状況は畿内一円の開発状況として普遍化するこ

5. まとめ

とはできないと思われる。この様な様々な地域の開発状況が次第に明らかにされていく、地域の歴史として積み上げられていく、ささやかな一歩として本論考の意義があると思われる。

参考文献

- (財)大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 I』
(財)大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書 II』
(財)大阪文化財センター 1986 『小阪遺跡（その1）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1986 『小阪遺跡（その2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1987 『小阪遺跡（その3）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1987 『小阪遺跡（その4）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1988 『小阪遺跡（その5）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1988 『小阪遺跡（その6、6-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その6-3）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1988 『小阪遺跡（その7、7-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その7-3）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その8、8-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（その9）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1989 『小阪遺跡（南その1）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1990 『小阪遺跡（南その2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1991 『小阪遺跡（南その2-2）—調査の概要—』
(財)大阪文化財センター 1987 『福田遺跡（その1）—調査の概要—』

終章 小阪遺跡発掘調査の意義

小阪遺跡において実施された考古学的・自然科学的調査の成果、および出土遺構・遺物に関する考察を受け、小阪遺跡の周辺地域をも含めた自然環境の変遷と、それに対応する人間活動について、周辺遺跡の調査成果を鑑みながらまとめてみたい。

旧石器時代

I 地区における崖錐性堆積物の形成や、7G レンチ最深掘削部においてみられた砂礫層の堆積がみられる。砂礫層はこの地域の基盤となる、扇状地のベースとみなすことができる。崖錐性堆積物には二次堆積ながら始良丹沢火山灰（AT）が介在する。小阪遺跡においてはこの年代の土壤サンプルではなく、植生の復元には至らなかったが、周辺地域において採取された試料よりこの年代の植生は針広混合林・冷温帶落葉広葉樹林が想定されている。始良火山灰は大阪府下では鬼虎川遺跡や南花田遺跡、大里遺跡において層位的に検出されており、諸遺跡における自然科学的調査の成果が期待される。

後期旧石器時代

国府型ナイフ、有舌尖頭器が遊離した状態で検出されており、面や遺構の確認はされていない。これは周辺遺跡においても同様の状況であり、旧石器の出土地点は多いものの、遺構の確認は南花田遺跡や大園遺跡などに限られる。

縄文時代早期末～前期初頭

広義の石山式（天神山式？）土器が河川から、羽島下層II式または北白川下層式土器が崖錐性堆積上面から出土し、これらとの層位的関係は不明ながら、アカホヤ火山灰が面的に検出されている。周辺では隣接する太平寺遺跡においても条痕文土器が出土しており、この年代には小阪遺跡周辺において人間活動があったものと考えられる。アカホヤ火山灰の上下層を試料とした花粉・珪藻分析では、化石は少なかったものの、下層試料（アカホヤ火山灰降下直前）ではコナラ亜属・ニレ属一ケヤキ属・エノキ属・ムクノキ属・キハダ属・カエデ属といった落葉広葉樹や、暖温帶常緑広葉樹の主要構成種であるアカガシ亜属が検出され、また珪藻化石群集よりしばしば干上がる湿地のような堆積環境が推定されている。アカホヤ火山灰は大阪府下においては、先にあげた南花田遺跡、大里遺跡のほかに羽倉崎遺跡などにおいて確認され、周辺地域における花粉分析結果においても同様な結果がみられる。

小阪遺跡では火山灰に伴出する遺物はみられず、火山灰降下前後における土器型式の変化をうかがうような資料にはめぐまれなかった。先にあげた大阪府下の諸遺跡においても、南花田遺跡において長脚石鏃が認められるが、土器は伴出していない。東海地方では、塩屋遺跡、清水ノ上貝塚の検討や縄文早期末～前期前葉の土器の検討から、アカホヤ火山灰の降下を石山式土器の直後、正確には塩屋中層B式土器の直後、天神山式土器の段階とみる考え方があり、実際には清水ノ上貝塚の調査においてアカホヤ火山灰層の直下からは粕畠式土器が、その直上からは清水ノ上I式土器が検出されている。またアカホヤ火山灰層下位のK層からは少量ではあるが発育のよいハイガイが認められ、一方アカホヤ火山灰層上位のH貝層ではスガイ・イシダタミ・イボニシなどの小巻貝が主体をしめる貧弱な貝類層が認められて

縄文時代中期末～後期初頭

いる。これらより、その前後の様相については貝塚出土ハイガイの成育状況などより、火山灰の降下→気温の低下→降雨量の増加→貝類の発育阻害といった図式の変動が考えられている。近畿地方では石山貝塚のほか近年栗津湖底遺跡や勝山遺跡において当該期の資料が出土しており、とくに自然遺物にめぐまれた栗津湖底遺跡では植物相や動物相の変遷について貴重な資料を提供している。こうした資料の蓄積により、近畿地方においても、アカホヤ火山灰降下前後の土器をはじめとする諸様相の変化が明らかになることが期待される。

縄文時代前期

北白川下層II～III式土器、大歳山式土器が河川より出土している。隣接する太平寺遺跡では北白川下層IIa式土器が、平井遺跡では大歳山式土器が出土しており、少ない資料ではあるが、断片的な人間活動の痕跡がうかがえる。この年代は縄文海進のもっとも内陸にまでおよんだ年代であり、アカガシ亜属に代表される照葉樹林は大阪湾沿岸にまで到達していたと考えられている。

縄文時代中期中葉

船元I式土器、船元II式土器、里木式土器が出土しており、船元II式土器が出土した面では木の根が検出されるなど土壤化層が認められたため、一時期生活面であったことが明らかである。木の根の樹種はアカガシ亜属であり、花粉分析においても圧倒的にアカガシ亜属が優勢であることから、小阪遺跡周辺は照葉樹林の森林の様相を呈していたものと考えられる。I地区には河川が流れ、その岸辺で土器や石器が散在的に出土している。その場で土器や石器が用いられるか廃棄されたものであろう。磨石もしくは叩き石の可能性をもつ石が1点出土している。

大阪府下の中期の遺跡は、大阪市森の宮遺跡、四条畷市砂遺跡、寝屋川市讚良川遺跡など河内湾に面した地点に顕著である。前期の遺跡が台地や段丘上に立地するものが多いのに比べ、中期では河川近くの低地部に遺跡が多くみられ、遺跡の立地の違いが指摘されている。和泉における当該期の遺跡は数少ないが、小阪遺跡もこうした遺跡の動向にあてはまるものと考えられる。なお、讚良川遺跡では新保・新崎式、北裏C1式、北屋敷式などの東日本の土器の流入がみられる。

縄文時代中期末～後期初頭

引き続き照葉樹林におおわれた小阪遺跡では、多くの土器が出土し、遺構も確認されたことから人間活動が顕著となる年代である。比較的大規模な河川が流れ、地点の特定はできないものの近くの自然堤防上に居住域があったものと考えられる。I地区には土器片敷遺構や落込み、土坑がみられることから、居住域が一時期I地区付近にあった可能性もある。

土器片敷遺構の類例は大阪府東大阪市縄手遺跡、兵庫県竜野市清水遺跡にみられる。縄手遺跡では、後期前半の土器片敷遺構が2ヵ所検出されており、うち一つは不整形な土坑の中に下層から土器片一石組一土器片一石組を4層に敷き並べたものである。清水遺跡では後期初頭中津式並行期の住居跡近辺で直径約1m、深さ約15～20cmを測る浅い土坑が検出された。底面は焼土化し、薄い炭層を挟んで土器片が敷き並べられている。両者とも小阪遺跡同様火に関する遺構ではあるが、住居との関連などその性格については確定に至らず、今後の資料の蓄積を待ちたい。

周辺では、仏並遺跡、池田下遺跡、西浦橋遺跡をはじめとして遺跡数が増加する。この時代は近畿地

方をはじめとし、西日本全体で遺跡数の増加がみられ、土器において各地の地域色が存在する。加曾利E式の影響のもと成立したと考えられる北白川C式の分布圏においても小地域色がみられ、小阪遺跡はそのなかで大阪湾沿岸部でグルーピングされる遺跡の一つである〔第III部 第2章〕。

縄文後期

アカガシ亜属を主とする照葉樹林とともに、トチノキ属・キハダ属などの落葉広葉樹、ブドウ属・ツタ属などのツル性植物から植生が構成される。このことはトチノキ属果皮が河川埋土中に認められたことより裏づけられる。また、樹種鑑定より後期中葉まで機能していたと考えられるI地区河川28出土木材でアラギリが1点報告されており、近畿地方の縄文時代にみられる樹種としては初出の可能性がある〔第II部 第11章〕。F地区では、河川に向かう緩傾斜地において遺物集中区が検出された。ここでは北白河上層式2～3期の土器とともに石鏸、楔形石器、スクレイパー、石核、二次加工のある剝片、剝片が多数出土した。観察から、剝片剝離の段階で放棄された可能性をもつ剝片が多数認められた。また、非目的的な剝片の中には剝片剝離の際に同時に剝がれたもののほかに、石器製作時や使用時に副次的に生じたものが多数含まれていると考えられている。これと楔形石器や二次加工のある剝片、微小剝離のある剝片の存在から、石器製作と使用は時間的にも空間的にも近接していたと考えられ、この場の機能としては、単に石器製作を行っていたとみるよりも、木材加工などの作業に際して作業に適した石器を適宜製作していた可能性が指摘されている〔第III部 第1章〕。

周辺には、四ツ池遺跡、仏並遺跡、淡輪遺跡があり、堅穴住居跡、土坑などが検出されている。同時期の和泉地域における集落遺跡の存在が明らかになっている。

縄文時代晩期～弥生時代前期

A～H地区においてアカガシ亜属の樹木の根株が多数検出された。遺構には土坑、溝がある。A～D地区IV～V層で検出された畦畔状遺構は、検討の結果、地表の畦畔に影響された自然現象と判明した。遺物には船橋式土器、長原式土器に伴って、浮線網状文土器および弥生時代前期中段階の土器が出土した。浮線網状文土器は、大洞A'式土器に並行するものと考えられる〔第III部 第3章〕。縄文時代晩期の土器は全体の75パーセントの個体（母数60）に角閃石を含む。特異な胎土の土器に、I地区晩期土器群8出土の深鉢（Fig.85-476）がある。深鉢は、体部に角閃石を含む茶黒色の胎土、凸帯部分に精良な乳白色の胎土を用いている。一方、弥生時代前期の土器は、大部分が和泉産の胎土を用いている。このほか、晩期土器群8では木製容器が1点出土している。

弥生時代前期の遺跡は、大規模集落遺跡と考えられる四ツ池遺跡、池上遺跡を中心として展開する。それらの遺跡から出土する土器には、いわゆる生駒西麓産や紀伊産の胎土を有するものがあり、地域間交流をうかがわせる。

弥生時代中期

土坑、しがらみ、杭列、水田の可能性を持つ土壤化層が検出された。H地区では、水田の可能性を持つ土壤化層が2層確認され、下層土壤化層上面で噴砂のひろがりがみられた〔第II部 第4章〕。

小阪遺跡における弥生時代の遺構、遺物は希薄であるが、小阪遺跡を見おろす段丘上に立地する伏尾遺跡では集落が検出されており、明確な水田遺構は確認されなかったもののこれとの関連が注目される。

古墳時代中期～後期

古墳時代に入ると、考古学的調査により遺構・遺物の検出も顕著になり、人々の活動が活発化していく様子がうかがわれる反面、意に反して、自然河川の氾濫および後世の削平等を受け、包含層がほとんど残っておらず自然科学的調査が最も行われていない時期に相当する。

古墳時代前期

南東から伸びる尾根の先端部に数条の溝が検出されたのみで、遺構としては、希薄であり、自然河川も重なりを見せるためにこの時期のものは確とはし難い。本文でも述べたように、庄内期の溝と布留期の溝があり、いずれのものも、泉州域の土器の特徴を表しているものの、角閃石を多量に含むいわゆる生駒西麓産の「庄内甕」を含むことから、河内地方との関わりが密であったことがうかがえる。

なお、胎土分析結果より、1点は和泉産と思われていたものに、結晶片岩の細粒を含む紀伊産のもの〔(817). 第II部 第19章試料番号23〕が確認された。

しかしながら、土器片のため本文に記載されていない石英片岩の礫を含むもの（小阪G-19.20.22.23）のうち、胎土の分析結果より、G-24はEタイプ、G-22.23はFタイプ、G-19.20はJタイプに分類されており、G-24は生駒西麓産とされている。Fタイプは在地および在地近傍とされ、Jタイプについては記されていない。石英(Qt)－斜長石(Pt)の相関関係では3点がVIグループに入り、他はグループに属さない結果となっている。VIグループは明記されていないが紀伊系の可能性を示唆している〔第II部 第17章参照〕。肉眼観察による結果と若干の差異があり、再検討の余地を残している。

一方、同時期の土器の重鉱物分析による結果は、「組成の主体をなす角閃石は、ほとんどが新鮮であることから、おそらく泉北や泉南丘陵に分布する大阪層群中のテフラに由来すると考えられる。」〔第II部 第19章〕とされ、小阪周辺で作られた可能性を示唆している。

いずれにしても、花崗岩のばいらん土という余り特徴のない胎土のため、小阪遺跡周辺で作成されたと思われる土器の特定には至らなかったが、大きくは、和泉産の土器の特徴〔第III部 第4章参照〕をもつものが大半を占めている結果となり、考古学的見地からの土器の見方と大差ないものとなった。

古墳時代中期～後期

当遺跡で一番遺構の密度が高い時期に該当し、旧の石津川と陶器川の影響を受け、3地区に区分される〔第II部 第2章参照〕。その一は現陶器川以西で旧の石津川と陶器川の合流地点に当たり、自然堤防上に築かれている集落の中心部である。その二は現陶器川以東の旧の陶器川の氾濫原に当たる地点で自然河川が数条重複している。その三は現陶器川以南の陶器川へ流れ込む支谷を形成し、一部は伏尾遺跡が位置する段丘へと続く地区である。

以上のこととは土器からもいえ、地区的にその特徴と時期に若干の差異があり〔第III部 第5章参照〕、陶邑内の小地区差を作り出している。すなわち、原ノ池の灰原の立地が陶器川へ流入する支谷の尾根の斜面で大きくはMT地区に属すのに対し、小阪遺跡の集落が位置するのはTK地区とMT地区の境目になり、なお、TK地区に属す段丘上に立地する伏尾遺跡の一部とそこから流出した遺物とから成り立っているからである。

古墳時代中期の集落の立地としては、河川の合流地点の自然堤防上という制約があり、東西・南北が60m前後という小規模なもので、竪穴住居6棟、平地式住居2棟、掘立柱建物3棟が検出され、それらの規模も3～5mと小さく、竪穴住居4では作り付けの竈があり、柱は2本柱である。検出された竪穴

住居のうち、3棟は削平を受け、3棟および掘立柱建物のうち2棟は焼けた痕跡を残すものである。

竪穴住居から検出された土器が比較的少量であることから類推すれば、何らかの理由で焼却・廃棄したとも考えられる。

竪穴住居から出土した土器は、ほとんどのものが土師器で占め、須恵器はわずかであることと、遺物が遺存していた住居からは、いずれも、韓式系土器の小型平底鉢や甌、須恵器の影響を受けた外反する口縁部をもつ高坏等が出土しており、須恵器作りに関わりをもつ集落と考えられた。このことは、井戸や土坑等から出土する土器にもいえ、土師器と須恵器の割合が半々であることや、土師器に似せた須恵器の出現や須恵器に似せた土師器の出現および韓式系土器を多量に含むこと等、須恵器生産に関わりのあるムラ、すなわち、土師器生産に関わっていた人々が、須恵器生産に従事するようになったと考えられる。このことは、重鉱物による胎土分析から、古墳時代中期の土師器24点中、6点が不明で、10点が在地および近傍であり、8点が南河内地域であると推定されていることと何らかの関係が導きだされる可能性があろう〔第II部 第19章参照〕。

それに加えて、河川等から出土する土器の多様性は陶邑における須恵器作りの波及の過程を如実に表していると考えられる。

H地区の灰原から出土した土器は（MT252・253）の窯で焼成され廃棄されたものと思われ、大きくは3段階に区分された。そのことにより、陶邑のMT地区でも古い段階から須恵器が焼かれていたことを証明した結果となった。

なお、灰原の遺物を統計処理することにより、例えば、器種構成をする場合にどういう手段が有効であるかを具体的に破片数・口縁残存度・重量の3種の方法で比較すると、Fig.316（P.405）のような結果が得られ、口縁残存度による構成比がより有効であることが類推された。蓋坏の主成分分析に関しては、定型化以降のある程度規格化された段階では有効なことが証明され、型式分類および時期分類を蓋坏で行うことの意義を見出した。

しかしながら、膨大な資料のほとんどの検討が時間との兼ね合いでできず、統計処理の可能性のわずかな部分を引き出したに過ぎないのが悔やまれることとなった。

また、灰原の須恵器の蛍光X線分析では、陶邑内の細分を示唆し、加えて伏尾遺跡や大庭寺遺跡の須恵器とは異なるグループで、貝塚市の石才南遺跡と同グループであると指摘された。このことは、小阪遺跡の（MT252・253）の窯から石才南遺跡への搬出とも考えられるが、いかんせん、遺物の時期が異なるために供給源とはなりえないことが判明した。ともあれ、灰原と同様な遺物が出土すれば、考古学的なものに加えて、胎土分析でも追認しえる資料となった〔第II部 第18章参照〕。

いずれにしても、小阪遺跡出土の初期須恵器およびそれに伴う土師器等は、従前の陶邑産の須恵器のイメージを大きく一新するもので、陶邑産でないとされていた土器の見直しを余儀無くされる結果となったと推測される。そういう意味で、今回土器の実測にも細心の注意を払い、従前の須恵器の描き方とは異なり、余り誇張せず、土器の特徴を最大限捉えるように心掛けたが、何分にも、未熟なところはご容赦願いたい。

さらに、初期須恵器に関して、韓半島との比較〔第III部 第6章〕、古墳出土の須恵器および埴輪からの位置づけ〔第III部 第7章〕がなされ、小阪遺跡の初期須恵器およびそれに伴う土師器の編年〔第III部 第5章〕がなされたが、資料の増加と共に、それらの位置づけがなされるであろう。

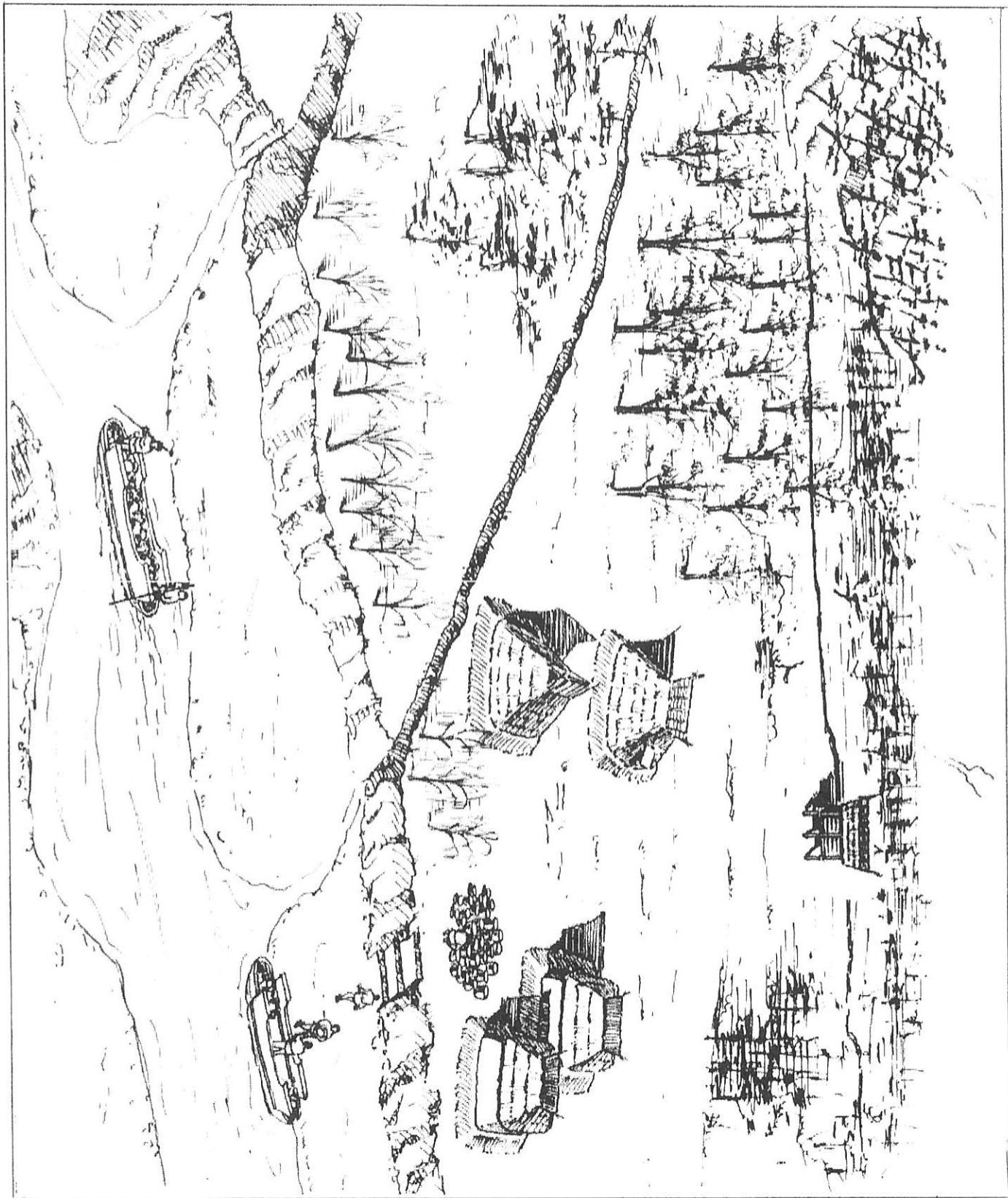


Fig. 490 古墳時代集落復元図

古代以降

古代以降、小阪遺跡で検出される遺構は、C地区の掘立柱建物群を除けば、基本的には水田を主とした生産に関するものが大半となる。陶器川左岸の完新世段丘上では、I地区において8世紀末以前の条里水田の可能性の高い小区画水田が検出されており、古代における大規模な農業開発をうかがい知る好資料となった。陶器川右岸部の氾濫原においても、8世紀代の流路に設置されたしがらみやダム状土盛りが検出されており、この時期、盛んに水田開発が行われていたようである。平安時代においても、G地区で旧流路内の凹地を水田化した例が検出されており、耕作が可能となる条件ができれば、貪欲に活用しようとする当時の人々の強い意欲が感じられるものであった。

古代の時期の本来の生活面は、中～近世頃の削平で喪失しており、深く穿たれた遺構しか残存していない。そのため、出土遺物も少なく、時期を特定しがたい嫌いがある。掘立柱建物群の検出されたC地区においても、建物として復元できたものは散在的に分布する3棟のみであり、時期を特定できるものとしては平安時代後期の2棟に限定される。他の建物として復元できないピットも平安～鎌倉時代のものと推測できる程度であり、集落構造の解明にはいたらなかった。

中・近世における小阪遺跡も、耕作に関連する遺構が大半を占める。この時期、時期は限定できないながらも、旧来からの耕地の再編と新たな新田開発が行われる。低地を埋め立て、水田面を嵩上げするとともに、水田区画の拡大化が図られている。従来、この泉北丘陵内においても、高位段丘や丘陵上を対象とした近世段階での新田開発が盛んに行われたことは古文書や地名からも周知の事であった。しかし、小阪遺跡での調査例からも判かるように、谷底平野内の完新世段丘上や氾濫原においても大小の規模で耕地の開発と再編が行われている。この事は、新たに未開の原野を開発するだけではなく、旧来の耕地内でも荒れ地として放棄されていた場所を耕作可能にする努力が続けられたことを示している。こうした行為の結果として、近年まで石津川流域に整然として残されていた条里制に基づく水田区画が最終的に完成し、堤防の整備とその背後の氾濫原の全面的な耕地化が果たせたのであろう。

なお、花粉分析結果からして、この時期の土層内よりソバ属・ワタ属・アブラナ科の花粉が検出されており、稲作以外にそうした商品作物も栽培されていたようである。作物によっては、二毛作が行われていた可能性が高いものと思われる。

今回的小阪遺跡の調査においては、本文では触れなかつたが、「偽畦畔」の検出も大きな成果としてあげられる。この偽畦畔は、陶器川左岸の完新世段丘上のA～D地区の地表下1m前後で検出されたもので、現地表面の条里水田とほぼ同じ位置に存在していた。通常の発掘手法でいけば誰もが畦畔として調査せざるを得ないものであったが、検出された土層が縄文晩期の包含層中であり、そう断定するには問題が大きすぎた。その是非を判断するために、花粉分析やプラント・オパール分析などの自然科学関連の分析を依頼するとともに、後の発掘調査でも再度の検討を行った。その結果、見掛けは畦畔として観察されるが、実際には地表の畦畔に影響されて畦畔状に見える土層変化であることが判明した。

このような自然現象によって引き起こされる遺構状の土層変化は、そのまま遺構として調査してしまうと遺跡の評価を大きく損なうものであり、充分留意されなければならない。

Tab.96 総合一覧表

標高	柱状様式	層相	主な遺構、遺物	^{14}C 年代	花粉、珪藻、プランクトン・オホアル	大型植物遺体	樹種	堆積環境
T.P.+23.0m	I層 II層 (C地区古墳時代包含層) III層 IV層	灰黄色シルト (古墳時代包含層) 褐色粘土 黄橙色粘土 灰白色シルト-粘土	I地区久慈土壤、粘土深掘坑（近世） A-1地区水田（中近世） G、I地区水田（奈良、平安） D-1地区河川、しがらみ（奈良、平安） F、G地区河川8、しがらみ（古墳時代中期-後期） H地区灰原（古墳時代中期-後期） C地区竪穴住居、掘立柱建物、平地住居、土坑、溝、井戸（古墳時代中期） F、G地区土坑、溝（古墳時代前期） H地区しがらみ、水田、杭列（弥生中期） C地区溝（繩文晩期-勞生前明） B地区土坑（繩文晩期-長原式） 立木B,P.2320+25 立木B,P.2510+20	マツ属複維管束亞属 サワラ マツ属複維管束亞属 ソバ属、コムギ属、ワタ属、アブラナ科 アカガシ属-シノキ属-マテバ シイ属 コナラ属、マツ属複維管束亞属、スギ属 イナイ科-イスガヤ科-ヒノキ科 メダケ属、スキ属、ヨシ属、イネ属 (低地)	マツ属複維管束亞属 ソバ属、ワタ属、アカガシ属-ヒノキ科 メダケ属、スキ属、ヨシ属、イネ属 スイレン属、アサザ属、タスキモ属、 ビツジグサ属、ジユンサンサイ属近似種、 コオホネ属、ヨシ属、マコモ属、 コアケサ属 イネ属	現氾濫面上で 溢流堆积 完新世段丘面段丘化 (後背湿地)		
T.P.+22.0m		暗灰色有機質土	F、G地区土器群（縄文後期-北白川上層式-元住吉山式） F地区遺物集中区（縄文後期-北白川上層式） I地区土器片數遺構、土坑、落込み、土器群 川17・8（縄文中期末-後期初頭北白川C式-中津式） I地区土器群（縄文中期-船元式、里木式） TP.+20.0m V層- 青灰色シルト-粘土	木B,P.3380+40 木B,P.3730+20 炭化物B,P.4290+30 炭化物B,P.4470+30 木B,P.4660+20	アカガシ亞属 クリ属-シノキ属-マテバシイ属 トチノキ属、キハダ属 ブドウ属、ツタ属、ティカカラズ属 メダケ属 ヨシ属-低率	アカガシ亞属 ムクロジ、サロモジ属、 ヒサカキ、ユズリハ属、サカキ コジイ、シノキ、ムクノキ、カエデ属、 ヤマザクラ、アブガリ	溢流堆积 (後背湿地)	
T.P.+21.0m		暗灰色有機質土	F地区土器群（縄文中期末-後期初頭北白川C式-中津式） I地区土器群（縄文中期-船元式、里木式） TP.+20.0m V層- 青灰色シルト-粘土	木B,P.3380+40 木B,P.3730+20 炭化物B,P.4290+30 炭化物B,P.4470+30 木B,P.4660+20	アカガシ亞属 クリ属-シノキ属-マテバシイ属 トチノキ属、キハダ属 ブドウ属、ツタ属、ティカカラズ属 メダケ属 ヨシ属-低率	アカガシ亞属 ムクロジ、サロモジ属、 ヒサカキ、ユズリハ属、サカキ コジイ、シノキ、ムクノキ、カエデ属、 ヤマザクラ、アブガリ	溢流堆积 (自然堤防)	
T.P.+19.0m			アカホヤ火山灰 砂砾	立木B,P.5790+30	アカガシ亞属 コナラ属、ニレ属-ケヤキ属、キハダ属 エノキ属-ムクノキ属、カエデ属-落葉広葉樹	火山灰降下堆積	溢流堆积 (自然堤防)	* 堆積環境の見方 上段=堆積をひきおこした原因 (下段)=その結果形成され、次の 堆積が生じる際のうつわ となった地形 (中州)

* 柱状模式図は、F地区をもとに作成し、遺構、遺物はこれに対応する層位に列挙した。そのため、F地区以外これに対応する層位には実際と異なる部分がある。

小阪遺跡本報告書

—近畿自動車道松原海南線・府道
松原泉大津線建設に伴う発掘調査—

発行年月日	1992年3月31日 発行
編集著作 発行者	大阪府教育委員会 大阪市中央区大手前2丁目1-22 財団法人 大阪文化財センター 大阪市城東区蒲生2丁目10-28
印刷所	株式会社 中島弘文堂印刷所 大阪市東成区深江南2-6-8

2

200

2

3

2

1